

—— 千葉県市原市 ——

おお わ だ
大 和 田 遺 跡

1 9 8 8

財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島のほぼ中央に位置する市原市は、古来より、恵まれた自然環境のもと文化が栄え、多くの先人達の足跡が記されている地域であります。上総国分二寺をはじめ、先頃、新聞紙上等を賑わせた、稲荷台一号墳、神門古墳群など、数多くの遺跡が存在し、埋蔵文化財の宝庫とも言われております。

現在は、農業はもとより、臨海工業地帯を含み、また首都圏のベッドタウンとしても、さらなる発展が期待されており、今後も東関東自動車道の延長等、様々な地域開発が進められると思われます。このような状況のもと、埋蔵文化財の保護と開発行為との調和をいかにして図っていくかが、文化財行政上の重要な課題となってきました。

当センターでは、様々な開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査の成果を、遺跡発表会、遺跡見学会の開催、「私たちの文化財」の発行等を通して、市民の方々に還元するよう努めております。今後も、文化財についてのより一層の御理解をいただけるよう努力していくつもりでおります。

今回、調査を行ないました大和田遺跡は、高滝ダム建設に伴う周辺整備対策の一環としての市道7253号線の建設に先行して、記録保存を目的として調査を実施したものであります。横穴墓、古墳、須恵器窯が検出されましたが、特に須恵器窯については、現段階では、県内最古に位置づけられるものであります。また横穴墓は16基について調査を行ないましたが、養老川流域における墓制の展開を理解する上で、無視することのできない貴重な成果を提供しております。

本報告書は、この大和田遺跡の成果をまとめたもので、研究者はもとより、広く一般市民の方々の文化財保護についての理解の一助となるよう御活用いただければ幸いです。

最後にあたり、市原市高滝ダム周辺整備対策室の御協力、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課及び関係諸機関の方々の御指導、また地元の方々の御厚意に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月25日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市大和田字緑岡378－1他に所在する大和田遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市原市高滝ダム周辺整備対策室による市道7253号線の建設に伴い実施したものである。
3. 発掘調査、整理作業、報告書作成作業は以下の通り行なった。
発掘調査……昭和61年7月1日～昭和62年3月25日 担当 主 幹 山口直樹
整理作業……昭和62年11月1日～昭和63年3月25日 担当 調査研究員 高橋康男
4. 本書の原稿執筆は、高橋が行なった。
5. 発掘調査から整理作業の過程で、以下の諸機関の御指導、御協力を賜った。
市原市高滝ダム周辺整備対策室、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課

凡 例

1. 遺構番号は、調査時番号をそのまま用いた。(ただし20番台は欠番)
2. 方位は、磁北を使用した。
3. 縮尺は、横穴については原則として1/60、小規模なものについては1/30とし、古墳は適宜、窯跡は1/60、その他の遺構は1/10である。遺物は、土器は原則として1/3、鉄器は、刀類を1/3、その他を1/2 玉類は原寸である。

市原市文化財センター組織表

昭和61年度(調査)

役 員

理事長 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)
副理事長 横 濱 辰 夫 (教育委員会教育指導部長)
常務理事 岩 見 一 民 (専任)
理 事 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)
理 事 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)
理 事 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)
理 事 松 崎 良 一 (市企画部長)
理 事 斎 藤 栄 亮 (市総務部長)
理 事 地 引 希 壹 (市都市部長)
理 事 松 下 隆 (市総務部財政課長)
監 事 白 鳥 一 夫 (市会計課長)
監 事 斎 藤 崇 雄 (教育委員会総務課長)

事 務

庶務課

課 長 田 丸 萬 富
主 事 補 大 鐘 光 江
事 務 員(嘱託) 秋 田 晴 美
事 務 員(嘱託) 石 渡 あ ゆ み

調査課

課 長 清 藤 一 順
主 幹 石 田 広 美
主 幹 山 口 直 樹
主任調査研究員 宮 本 敬 一
主任調査研究員 米 田 耕 之 助
調 査 研 究 員 田 中 清 美
調 査 研 究 員 近 藤 敏 一
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真 一
調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直 紀
調 査 研 究 員 木 對 和 啓
調査研究員(嘱託) 鈴 木 英 三
調査研究員(嘱託) 半 田 堅 史
調査研究員(嘱託) 田 中 新 史
事 務 員(嘱託) 高 浦 貞 子
事 務 員(嘱託) 長 谷 川 い づ み

昭和62年度(整理)

役 員

理事長 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)
副理事長 大 野 皎 (教育委員会教育指導部長)
常務理事 岩 見 一 民 (専任)
理 事 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)
理 事 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)
理 事 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)
理 事 松 崎 良 一 (市企画部長)
理 事 飯 山 英 夫 (市企画部長)
理 事 宮 崎 芳 雄 (市総務部長)
理 事 地 引 希 壹 (市都市部長)
理 事 松 下 隆 (市総務部財政課長)
理 事 安 藤 隆 一 (市総務部財政課長)
監 事 斎 藤 崇 雄 (教育委員会総務課長)
監 事 白 鳥 一 夫 (市会計課長)
監 事 元 吉 末 喜 (市会計課長)

庶務課

課 長 田 丸 萬 富
主 事 補 大 鐘 光 江
事 務 員(嘱託) 秋 田 晴 美
事 務 員(嘱託) 石 渡 あ ゆ み

調査課

課 長 清 藤 一 順
主 幹 石 田 広 美
主 幹 加 藤 正 信
主任調査研究員 宮 本 敬 一
主任調査研究員 米 田 耕 之 助
調 査 研 究 員 田 中 清 美
調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直 紀
調 査 研 究 員 近 藤 敏 一
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真 一
調 査 研 究 員 木 對 和 紀
調査研究員(嘱託) 田 中 新 史
調査研究員(嘱託) 半 田 堅 三
事 務 員(嘱託) 高 浦 貞 子
調査補助員(嘱託) 田 中 裕 子

目 次

序文

例言

凡例

市原市文化財センター組織表

大和田遺跡の位置と周辺環境	1
調査の方法	1
調査した遺構と遺物	5
1. 斜面部の調査	5
1) 横穴	5
2) 窯跡	36
2. 台地上の調査	40
1) 古墳	40
2) その他の遺構	49
小結にかえて	53
1. 養老川流域における横穴研究の現状と課題	53
2. 大和田窯の提起する問題点	58

挿 図 目 次

第1図 大和田遺跡と周辺の遺跡	2	第10図 7号横穴出土土器実測図	11
第2図 大和田遺跡全体図	4	第11図 7号横穴実測図	13・14
第3図 40号横穴実測図	7	第12図 7号横穴出土耳環実測図	15
第4図 40号横穴出土須恵器実測図	7	第13図 7号横穴出土鉄製品実測図	15
第5図 40号横穴出土鉄製品実測図	7	第14図 8・9号横穴実測図	15
第6図 4号横穴出土須恵器・鉄製品実測図	8	第15図 30号横穴実測図	16
第7図 4号横穴実測図	9	第16図 30号横穴出土鉄製品実測図	16
第8図 5号横穴実測図	10	第17図 30号横穴出土ガラス小玉実測図	17・18
第9図 6号横穴実測図	10	第18図 30号横穴出土鉄刀実測図	18

第19図	31号横穴実測図……………23	第34図	1号墳 墳丘測量図……………40
第20図	32号横穴および出土須恵器実測図…23	第35図	第1トレンチ実測図……………41
第21図	33号横穴実測図……………25・26	第36図	第2トレンチ実測図……………43
第22図	33号横穴出土鉄製品実測図……………27	第37図	1号墳実測図……………44
第23図	33号横穴出土鉄刀実測図……………27	第38図	2号墳 墳丘測量図……………45
第24図	33号横穴出土須恵器実測図……………28	第39図	第3トレンチ実測図……………46
第25図	34号横穴実測図……………28	第40図	2号墳実測図……………47
第26図	35・39号横穴、38号前庭部実測図 ……31・32	第41図	3号墳 墳丘測量図……………47
第27図	35号横穴出土銅釧・耳環・滑石製 小玉実測図……………33	第42図	3号墳実測図……………48
第28図	38号前庭部出土土器実測図……………33	第43図	13号土壌墓実測図……………49
第29図	35号横穴出土鉄製品実測図……………34	第44図	13号土壌墓出土鉄製品実測図……………49
第30図	36号横穴実測図……………34	第45図	19号住居跡実測図……………51
第31図	37号横穴実測図……………35	第46図	17号土坑実測図……………51
第32図	12号窯跡実測図……………37	第47図	14・18・20号遺構実測図……………51
第33図	12号窯跡出土遺物実測図……………39	第48図	16号土坑実測図……………52

表 目 次

第1表	大和田遺跡周辺の遺跡……………3
第2表	大和田遺跡遺構一覧表……………5
第3表	30号横穴出土ガラス小玉計測表……………19～22

図 版 目 次

図版1	大和田遺跡周辺の航空写真
図版2	1. 大和田遺跡遠景 2. 大和田遺跡全景
図版3	1. 40号横穴玄室 2. 4号横穴全景

- 図版 4 1. 7号横穴羨道部遺物出土状況 2. 7号横穴及び周辺の横穴
- 図版 5 1. 5号横穴 2. 6号横穴 3. 7号横穴
- 図版 6 1. 7号横穴内部 2. 8・9号横穴
- 図版 7 1. 30号横穴 2. 30号横穴玄室内遺物出土状況
- 図版 8 1. 33号横穴及び周辺の横穴 2. 33号横穴玄室
- 図版 9 1. 33号横穴遺物出土状況 2. 33号横穴隔壁前遺物出土状況
- 図版10 1. 32・34号横穴 2. 35号横穴及び周辺の横穴
- 図版11 1. 35号横穴内部 2. 39号横穴
- 図版12 1. 36号横穴 2. 37号横穴 3. 37号横穴大甕出土状況
- 図版13 1. 1号墳全景 2. 1号墳表土除去後全景
- 図版14 1. 1号墳盛土状況 2. 1号墳盛土除去後
- 図版15 1. 1号墳主体部土層 2. 1号墳主体部完掘状況
- 図版16 1. 2号墳全景 2. 2号墳表土除去後 3. 2号墳表土除去後
4. 2号墳盛土状況
- 図版17 1. 3号墳全景 2. 3号墳表土除去後
- 図版18 1. 3号墳主体部 2. 3号墳北側遺物出土状況
- 図版19 1. 19号住居跡全景 2. 13号土壇全景
- 図版20 1. 12号窯跡内遺物出土状況 2. 12号窯跡排水溝遺物出土状況
- 図版21 1. 12号窯跡煙道及び天井部残存状況 2. 12号窯跡排水溝遺物出土状況
3. 12号窯跡焼台出土状況
- 図版22 1. 12号窯跡掘り上がり状況 2. 12号窯跡掘り上がり状況
- 図版23 横穴群出土遺物
- 図版24 横穴群出土遺物および窯跡出土遺物

大和田遺跡の位置と周辺環境

大和田遺跡は、市原市大和田字緑岡に所在する。養老川右岸の標高約60mの、西方に延びる台地のほぼ先端に位置している。養老川は蛇行の激しいことでも有名であり、これまで、幾度となく、流路を変え、隋所にメアンダー地形を残している。

本遺跡の周辺に所在する遺跡については別表の通りであるが、実際に調査された遺跡は少ない。養老川流域においては、横穴群の展開が見られるが、大和田遺跡の横穴群は宮原横穴群に次いで南に位置するものである。なお、市内における横穴の展開については後述する。永田・不入須恵窯跡群は、本遺跡から、7～800m離れた地点に所在している。操業の時期については、今回調査した窯跡とはかなり空白の期間があると思われるが、ごく接した地点に、時期を異にする窯跡が存在することは興味深い。また、昭和54・55年に、千葉県文化財センターにより調査が行われた番後台遺跡は、本遺跡から、約1km離れた西方に位置している。この河岸段丘面に所在する遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての集落の調査がなされ、数多くの土器が出土している。また、同遺跡では縄文時代中期の住居跡も検出されている。低地への集落の展開が、いつごろの時期から活発になってくるかは今のところ不明であるが、地形的な制約もあって、低地の利用は、かなり活発であったと考えるべきであろう。また、本遺跡の南方約800mに高滝神社が所在する。同神社の成立については不明であるが貞観10年9月に従五位下に叙されている。白鳳二年の創建と伝えられる。真偽のほどは定かではなく、記録上に登場する時期と約200年隔てているが、仮にある程度史実を反映しているとし、さらに須恵器の祭祀的要素を加味すると、窯業生産の展開と符号する点も生じてきて、興味深いところである。

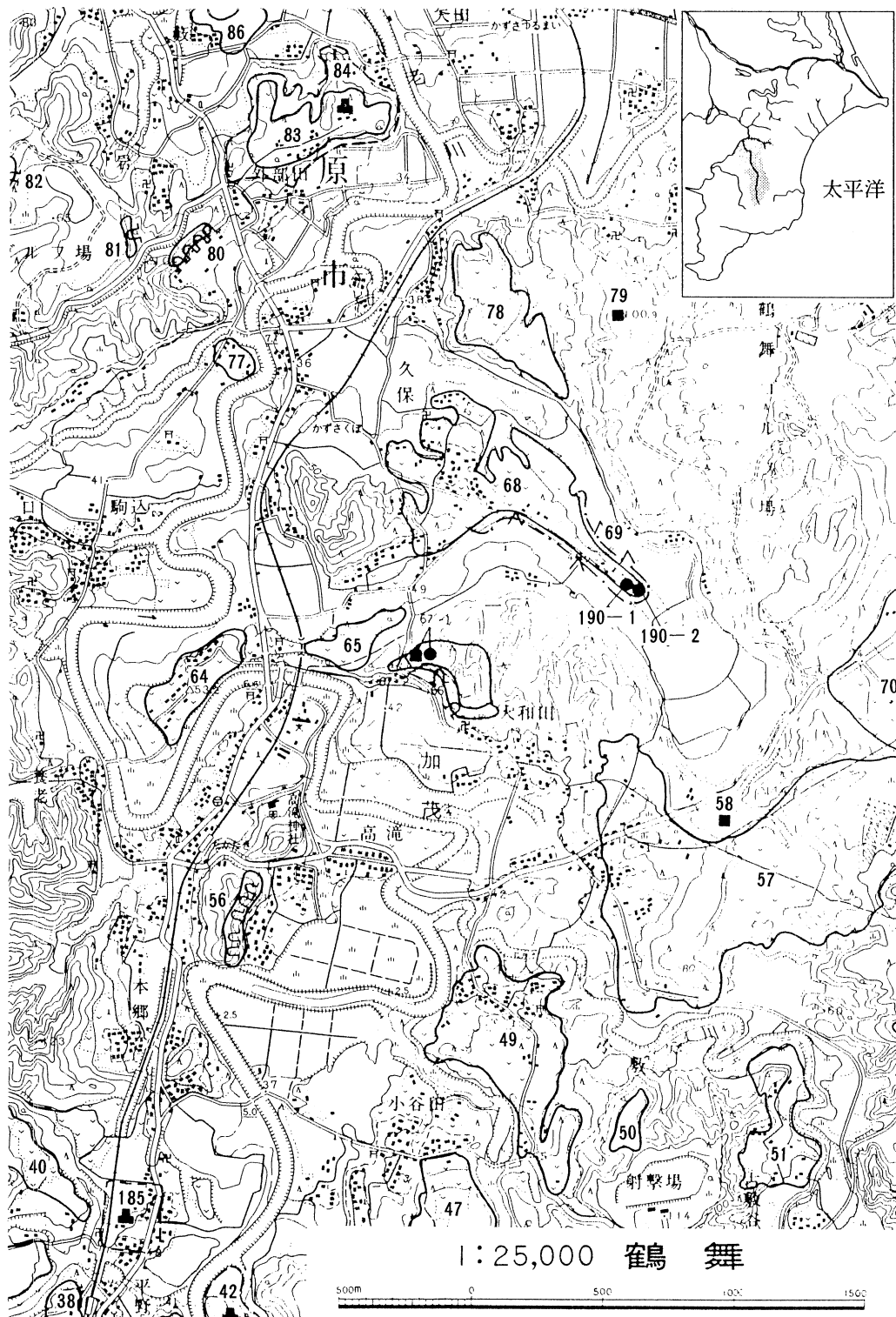
調査の方法

遺構に関しては、着手の順により通し番号をつけ、特に時期、性格についての分類は行なわなかった。本報告においてもその遺構番号を踏襲した。したがって調査時の遺構番号と、報告書における遺構番号とは一致する。

測量およびグリッドの設定については、調査区東の円墳(1号墳)の墳頂と、中央の方墳(2号墳)の墳頂を通る線を基準とし、円墳頂上を基準点として、原則として5m間隔にグリッド杭を設定している。したがって、調査区内の方眼方向は、公共座標の方向とは一致しない。また各横穴および窯の測点については、航空測量により、座標値を与えている。

古墳のトレンチは、上述の基準線および、それに直行する方向で設定している。遺物の取り上げについては、基本的には、ドットをおとすこととし、調査時に移動してしまった物については、小グリッド単位で取り上げてある。

横穴の実測については、平面図は、床面のみを実測してある。したがって、立体的な状況は



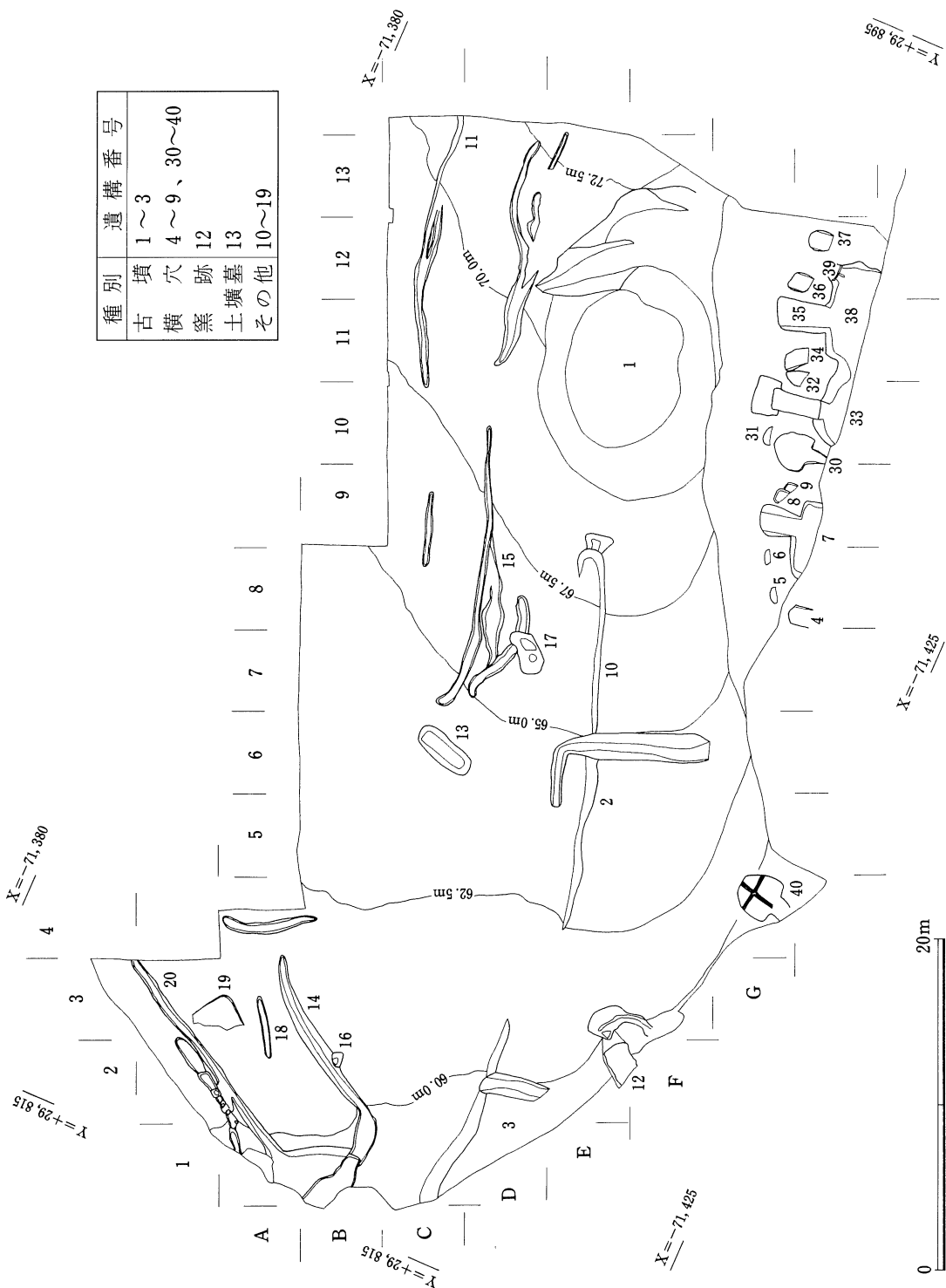
第1図 大和田遺跡と周辺の遺跡(トーン部:大和田遺跡)

※なお、図中番号は「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」
に対応する。

第1表 大和田遺跡周辺の遺跡

遺跡 番号	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 期	遺構・遺物等	立 地・現 状
38	堂ノ前遺跡	平野字堂ノ前	包蔵地	古墳	土師器	川岸段丘面・水田
40	沢ノ上遺跡	本郷字沢ノ上	包蔵地	縄文	縄文土器 石器	川岸段丘面・畑・宅地
42	大羽城跡	飯給字赤松部多他	城跡	中世	郭址、地	丘陵・山林
47	中ノ台遺跡	小谷田字中ノ台他	包蔵地	縄文	縄文土器	台地上・畑・山林
49	愛宕遺跡	小谷田字愛宕他	包蔵地	先土器・ 縄文・古 墳・中世	黒曜石チップ 縄文土器 土師器・カワラケ	台地上・畑・山林
50	大口遺跡	古敷谷字大口他	包蔵地	縄文	縄文土器	台地上・水田・山林
51	林遺跡	古敷谷字林他	包蔵地	縄文・古 墳・中世	縄文土器・土師器 カワラケ	河岸段丘面・水田・畑
56	宮原横穴群	高滝字宮原	横穴	古墳	6基	丘陵・山林
57	柏野遺跡	大和田字柏野他	包蔵地	縄文・古 墳	縄文土器・土師器	台地上・畑・山林
58	神山塚	大和田字神山	塚	近世	方形	台地上・山林
64	香後台遺跡	加茂字香後台他	包蔵地	縄文・弥 生・古墳	住居跡・縄文土器・ 弥生土器	河岸段丘面・水田
65	久保堰ノ谷遺跡	久保字堰ノ谷他	包蔵地	縄文	縄文土器	河岸段丘面・畑・山林
68	不入遺跡	不入字細谷他	包蔵他 窯跡	弥生・奈 良・平安	弥生土器・土師器・ 須恵器	河岸段丘面・畑
69	永田窯跡	不入字南向田他	窯跡	須恵器	須恵器	河岸段丘面・山林
70	山小川遺跡	山小川字関野代他	包蔵地	縄文・古 墳・奈良・ 平安	縄文土器・土師器・ 鉄滓	台地上・畑・山林
77	下駒込遺跡	駒込字下駒込	包蔵地	古墳		河岸段丘面・水田
78	久保北新畑遺跡	久保字北新田他	包蔵地	縄文・古 墳	縄文土器・土師器	河岸段丘面・畑
79	山田谷三山塚	久保字山田谷	塚	近世	三山塚	山林
80	外部田谷横穴群	外部田字谷他	横穴	古墳	40基	丘陵斜面・山林
81	岩横穴群	岩	横穴	古墳・奈 良・平安	10基・土師器・須恵 器	台地縁辺・山林
82	藪横穴群	藪	横穴	古墳・奈 良・平安	2基	台地縁辺・山林
83	御園生館跡	外部田字御園生他	館跡	平安	土塁・郭址他	台地・山林・畑
84	外部田遺跡	外部田字東台他	包蔵地	縄文	縄文土器	台地・山林・畑
86	藪マギノウ遺跡	藪字マギノウ他	包蔵地	奈良・平 安	住居跡・須恵器・土 師器	河岸段丘面
185	本郷堀ノ内遺跡	本郷字堀ノ内他	館跡	中世	平館	河岸断丘面・水田・宅地
190-1	大和田新谷古墳群 第1号墳	大和田字新谷	古墳	古墳	円墳	河岸段丘面・山林
190-2	大和田新谷古墳群 第2号墳	大和田字新谷	古墳	古墳	円墳	河岸段丘面・山林

「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」をもとに作成。遺跡番号は同文献中番号に対応する。



第2図 大和田遺跡全体図(s = 1 / 400)

エレベーションあるいは、写真図版等から理解していただければ幸いである。

第2表 大和田遺跡 遺構一覧表

番号	種 別	番号	種 別	番号	種 別	番号	種 別	番号	種 別	番号	種 別
1	円 墳	7	横 穴	13	土壇墓	19	住居跡	34	横 穴	40	横 穴
2	方 墳	8	横 穴	14	溝	20	溝	35	横 穴		
3	方 墳	9	横 穴	15	溝	30	横 穴	36	横 穴		
4	横 穴	10	道	16	小土坑	31	横 穴	37	横 穴		
5	横 穴	11	道	17	土 坑	32	横 穴	38	35・39の前庭		
6	横 穴	12	窯 跡	18	溝	33	横 穴	39	横 穴		

調査した遺構と遺物

1. 斜面部の調査

1) 横 穴

今回調査した横穴は全部で16基である。いずれも同一斜面に開口している。開口部のレベルには多少の高低差は認められるものの、同一群として把握してよいと思われる。各横穴の構造については、後世の道路工事により、南側を大きく欠失しているものが多く、不明な部分が多いといわざるを得ない。前庭部まで残存していた横穴は3基のみであり、それ以外は、羨道部以奥あるいは、玄室の一部のみの調査となった。また、後世の再利用により、改変されたものもあって、遺物の出土状況についても埋納時の実態をストレートに反映しているか否か疑問の残るところもある。

上述のような事情により、ここで報告する各横穴の相関関係、時期的変遷については不明な点も多い。たとえば、天井の形態、隔壁の有無等々である。しかし、このような状況の中においても若干傾向らしきものが認められたので、個別の報告に入る前にここで指摘しておく。玄室の形態については、平面形では正方形あるいはそれに近いものと、主軸方向に長い長方形のものがほとんどである。正方形に近い形態を有するものは、羨道部、隔壁まで残存していたものに限って見られ、これらからは副葬品も出土している。玄室のみ残存していた横穴については、その残存部の形状から、正方形を呈したとは考え難く、長方形であったと考えておくべきであろう。また、これら残存状況の悪い横穴は、主軸方向を、残存状況の良い横穴の方に向けている感もある。副室の存在を考えておく必要もあるが、この斜面の削平前の状況も想定して考える必要があろう。

ここでさらに一言付しておきたいことは、いずれの横穴にも、棺床・棺台の存在が認められなかったことである。市原市内さらには県内における横穴の変遷は棺床・棺台の形態、個数等をその指標としている場合が多い。しかし、今回の横穴群の変化を捉える場合にはその指標を採用することはできない。棺床・棺台をもたない横穴が展開するところに大和田横穴群の特徴があるといえるわけであるが、この特殊性が何に起因するものか検討する必要がある。

副葬品については、個々の報告を参照されたいが、半数以上の横穴において副葬品が出土している。時間軸上にのせられる遺物は少ないが、年代比定の指標とし得る土器が数点認められる。その流れについては後論を参照されたい。また、台地上に所在する古墳からは、遺物がほとんど出土していないことを対比すると、横穴の方が遺物は比較的豊富といえる。被葬者の性格、築造時期の相違等によるものと思われるが、今後の検討課題の一つであるといえよう。

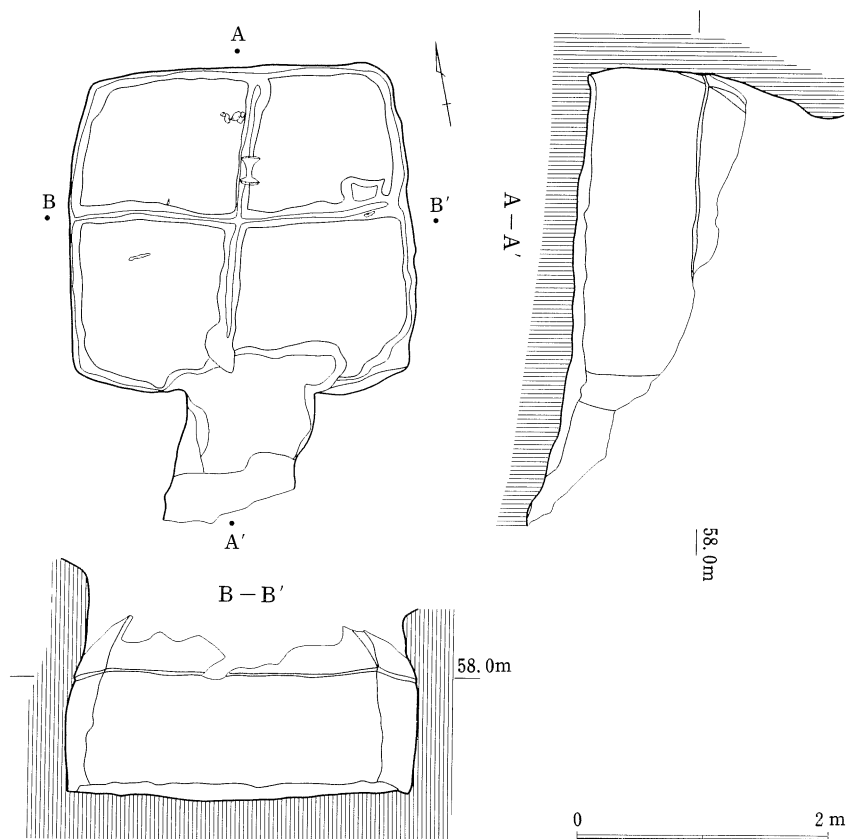
40号横穴

今回調査した横穴群の中ではもっとも西に位置し、他の横穴群から孤立している感すらある。南半は切り通しにより欠失しており、玄室および羨道の一部のみの残存である。玄室中央のやや奥寄りの部分から完形の須恵器の高杯が出土している。

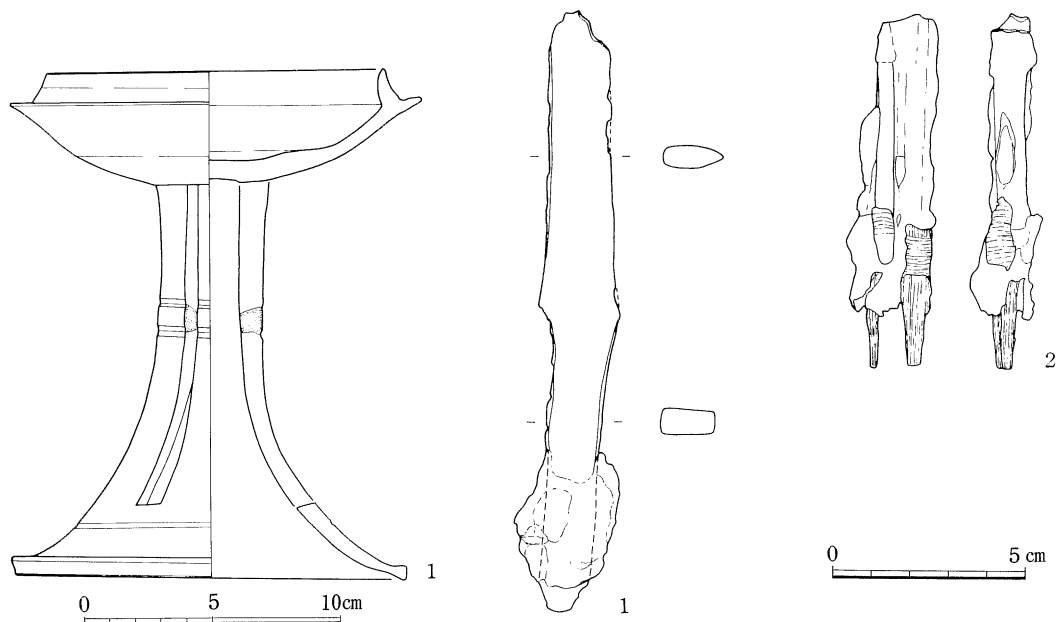
玄室は、長さ約2 m 50cm、幅2 m 40cmで、ほぼ正方形といい得る平面形である。壁際には溝が全周し、さらに床面にも十字に溝が通っている。玄室内を四分しているような感じである。溝の幅は10～20cm、深さは5 cm前後である。このうちの中央の南北溝のやや北寄りの部分で、須恵器高杯が、入口側に向いて倒れていた。天井部は残存状況は良好ではないが、壁との境界に段が作られている。また、壁は床から直角に近く屈曲しており、全体に、玄室の作りは丁寧な部類に入ると言える。天井の高さは約1 m 40cmであるが、本来は1 m 60cmぐらいにまで及んでいたと思われる。

羨道は、約1 mの残存である。玄室への入口は、やや東側にずれており、端部は40cmほど玄室中に入り込んでいる。玄室との境には隔壁はないが高さ5 cm前後の段がつくられている。玄室の作りに比べ、羨道の作りはやや雑な感もある。

玄室内から出土した須恵器高杯は、器高20cm、口縁部径13.3cm、脚台部径15.5cmを計る。容量は400ccである。焼成段階では、長脚二段透しであったものを、焼成後に一段透しにして改めている(実測図中点描部分)。このような改変を行なう理由として考えられることとしては、供給側と需要側の意図のズレの存在があげられる。つまり、生産する側は既に二段透しの生産に移行していたものが、消費側では、あくまでそれ以前の長脚一段透しに執着していたことが考えられるのである。周辺地域から、現在までのところ長脚一段透しの出土例はなく、また、意識レベルの問題にはなかなかふみ込めないものであるので、とりあえず可能性の問題として指摘しておく。また、この遺物の器面には、内外ともに白い付着物が見られたが、焼成時の降灰によるものとも考えられず、また、横穴内に長期間置かれたため、天井からの石灰質を含んだ水の落下による可能性は、立地の土壌が、砂岩質であって、それほど石灰質とも考えられないことから、肯定し難い。白色の顔料の可能性を考えたいところであるが、類例の報告がないため、ここでは、存在の指摘にとどめておく。



第3図 40号横穴実測図(s = 1 / 60)



第4図 40号横穴出土須恵器実測図

第5図 40号横穴出土鉄製品実測図

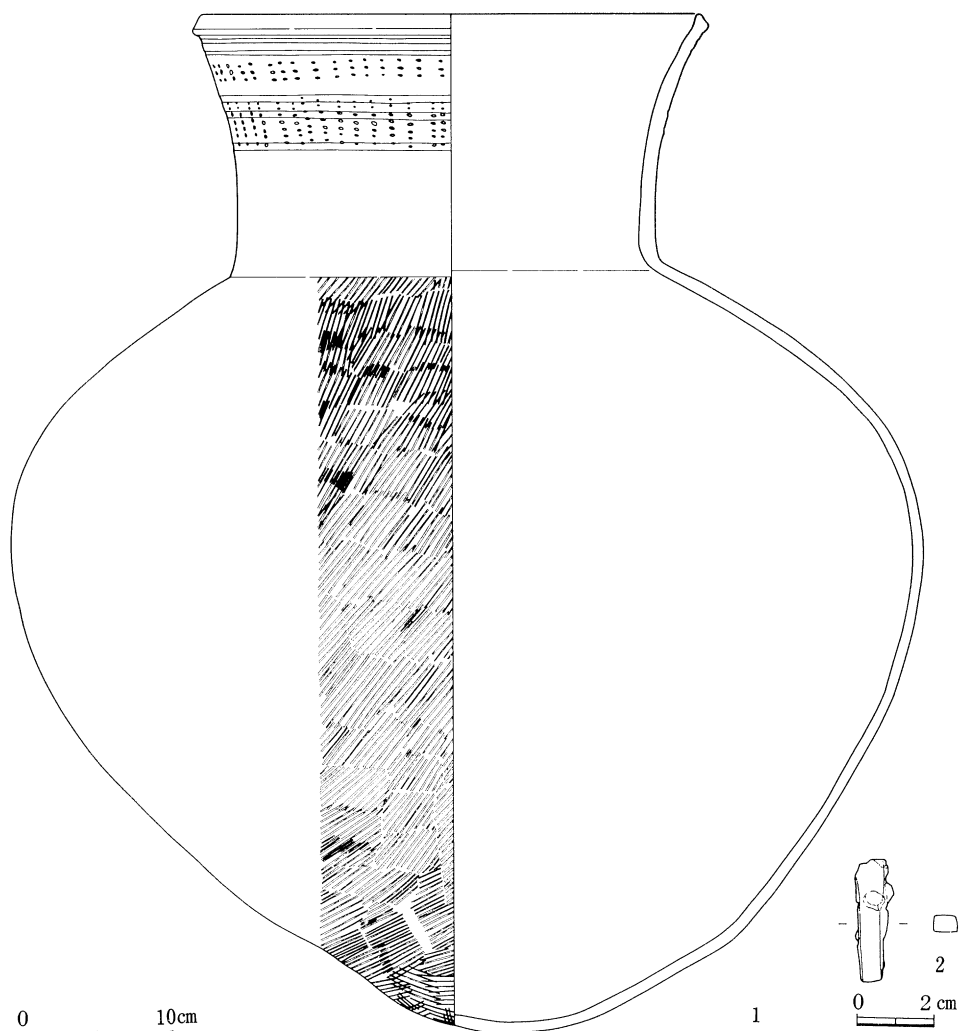
また覆土中から、波状文を施した須恵器の頸部の破片、図示はしていないが、大和田窯で焼成されたと思われる甕の胴部の破片が出土している。

今回の調査により出土した遺物の中で、最古に位置づけられる土器であり、横穴群の上限を示しているものである。

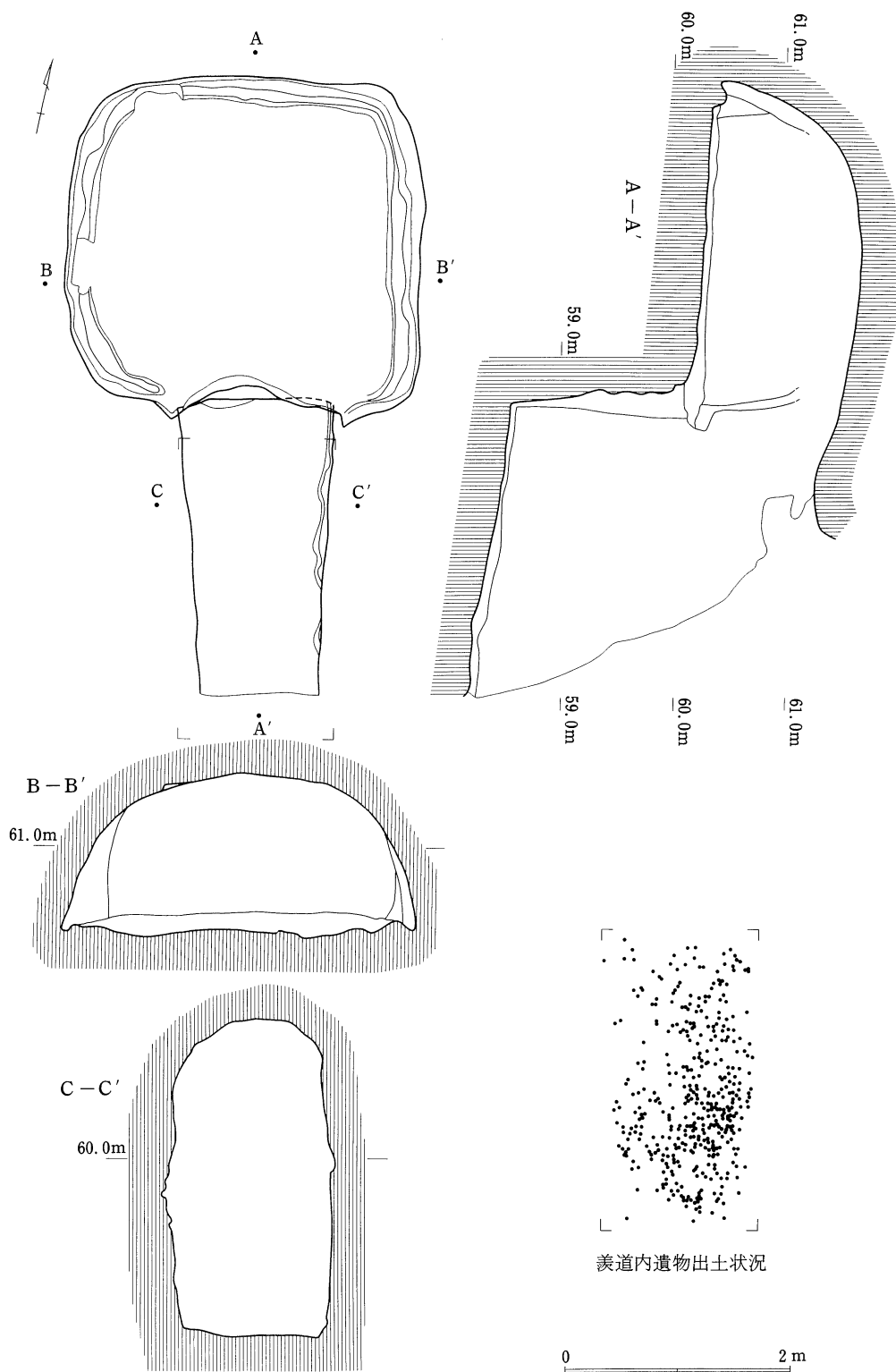
4 号横穴

今回調査した横穴群の中で、40号横穴を除く一群のうちで最も西に位置するものである。羨道南端及び前庭部を欠失しているが、比較的遺存状況は良好で、羨道部からは、須恵器の甕の破片が大量に出土している。玄室内は、後世に改変されており、遺物の出土は皆無であった。

玄室はほぼ正方形を呈し、一辺は約2 m70cmである。壁際を周溝が巡っており、その幅は10 cm前後、深さは5 cm前後である。なお、この周溝の内側がさらに一段低く、堤状に一周してい



第6図 4号横穴出土須恵器・鉄製品実測図(s = 1/5, 1/2)



第7図 4号横穴実測図(s=1/60)

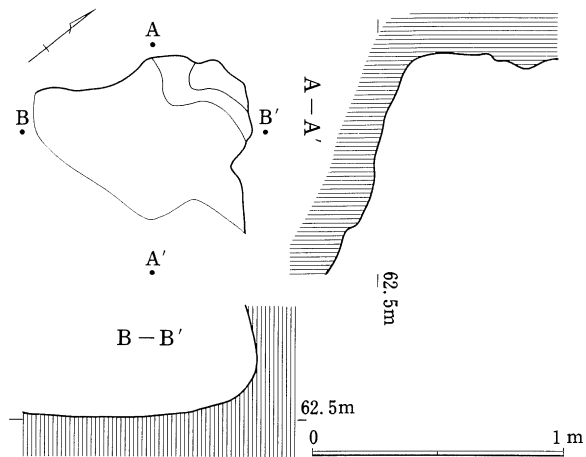
るが、これは、後世の改変により内部が一段下げられた結果によるもので、本来の形状とは考え難い。天井の形態はドーム状で、壁との境界は不明瞭である。天井の高さは、最も高いところで、約1 m 40 cmである。

羨道部は、残存部で長さ約2 m 80 cm、幅は前庭側で約1 m 10 cm、玄室側で1 m 40 cmでやや逆台形を呈している。東壁際には、幅・深さともに10 cm前後の溝が見られる。隔壁は、高さ約1 m 60 cm、そこから天井までは約2 m 80 cmある。覆土中からは、400個を越える須恵器の甕の破片が出土し、それはほぼ完形に復原された。

なお、この4号横穴は、かつてより、切り通しの部分で存在が確認されていたものである。また、この甕の他に、須恵器の破片が出土しているが、図示し得る程復原はできなかった。

5号横穴

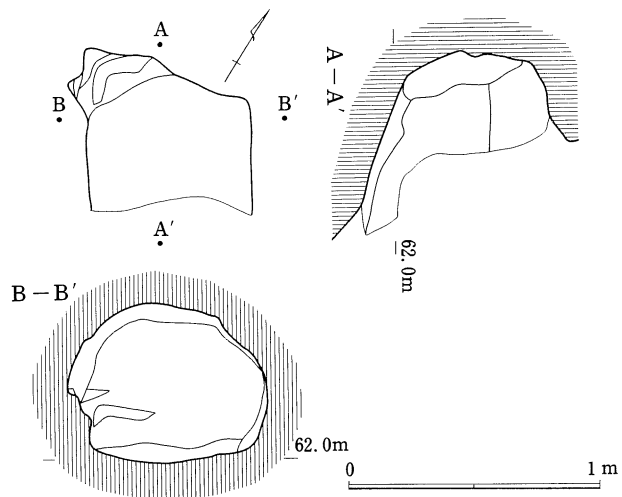
4号横穴の真上に位置する。遺存状態は極めて悪く、わずかに玄室最奥部が残存しているのみである。残存部は、最大で、長さ65 cm、幅85 cmで、全容はほとんど伺い知れない。さらに、他の横穴と比較して、玄室の傾斜が強く、あるいは未完成の時点で放棄されたとも考えられる。また、遺物の出土も皆無である。



第8図 5号横穴実測図(s = 1 / 30)

6号横穴

7号横穴の羨道部の西側に位置する。残存状態は悪く、玄室の最奥部のみの残存である。残存部で、長さ50 cm、幅65 cmで、天井部は高いところで65 cmを計る。正面西側には、三箇所の段が形成されている。前述の5号横穴同様、床面の傾斜が強い方と言える。遺物の出土は皆無である。



第9図 6号横穴実測図(s = 1 / 30)

7号横穴

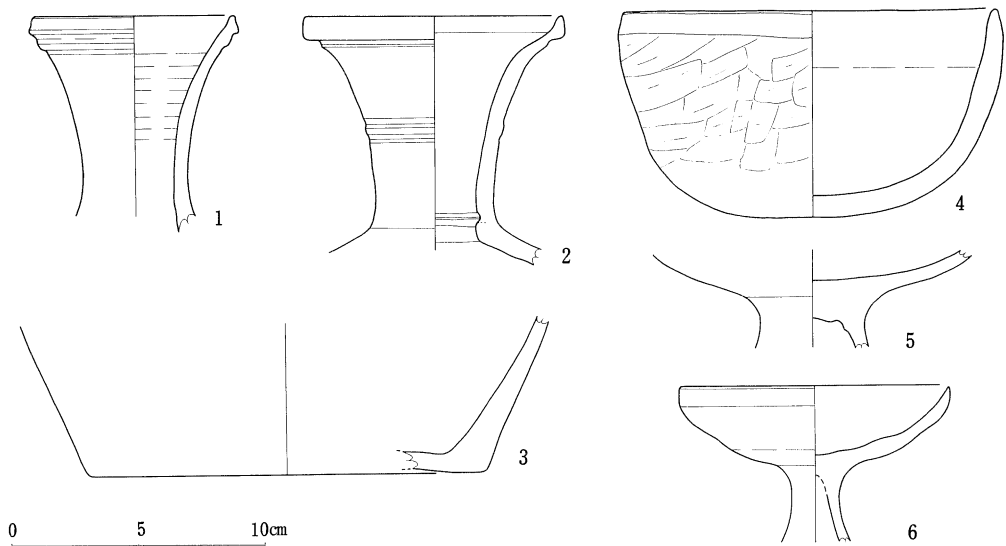
6号横穴と8、9号横穴の中間に位置し、前庭部南側は削平を受けているものの、比較的残存状態は良好であった。羨道部及び前庭部から、耳環や土師器片が出土している。しかし、玄室は、後世の二次的利用により、改変されており、玄室に伴う遺物の出土は皆無であった。

玄室はやや横長の長方形を呈し、東西の壁際には、幅10cm前後の溝が掘られているが、後世の改変により切られており、全周していたものかどうかは不明である。四方の壁はいずれも、内傾し、天井部は、明瞭な段の形成により区画されている。天井はゆるい曲線を描きドーム状を呈している。天井は最も高いところで、床面から、約1 m40cmである。遺物は、羨道部および前庭部から出土している。正面の壁の高さ約60cmの箇所に長方形の浅い掘り込みがあり、西壁には「南無阿」の線刻、床面には方形の掘り込みや不定形の削平があって、そのうち中央部の掘り込み中からは炭化物、焼土がわずかながら検出されている。いずれも、二次的利用の所産であろう。

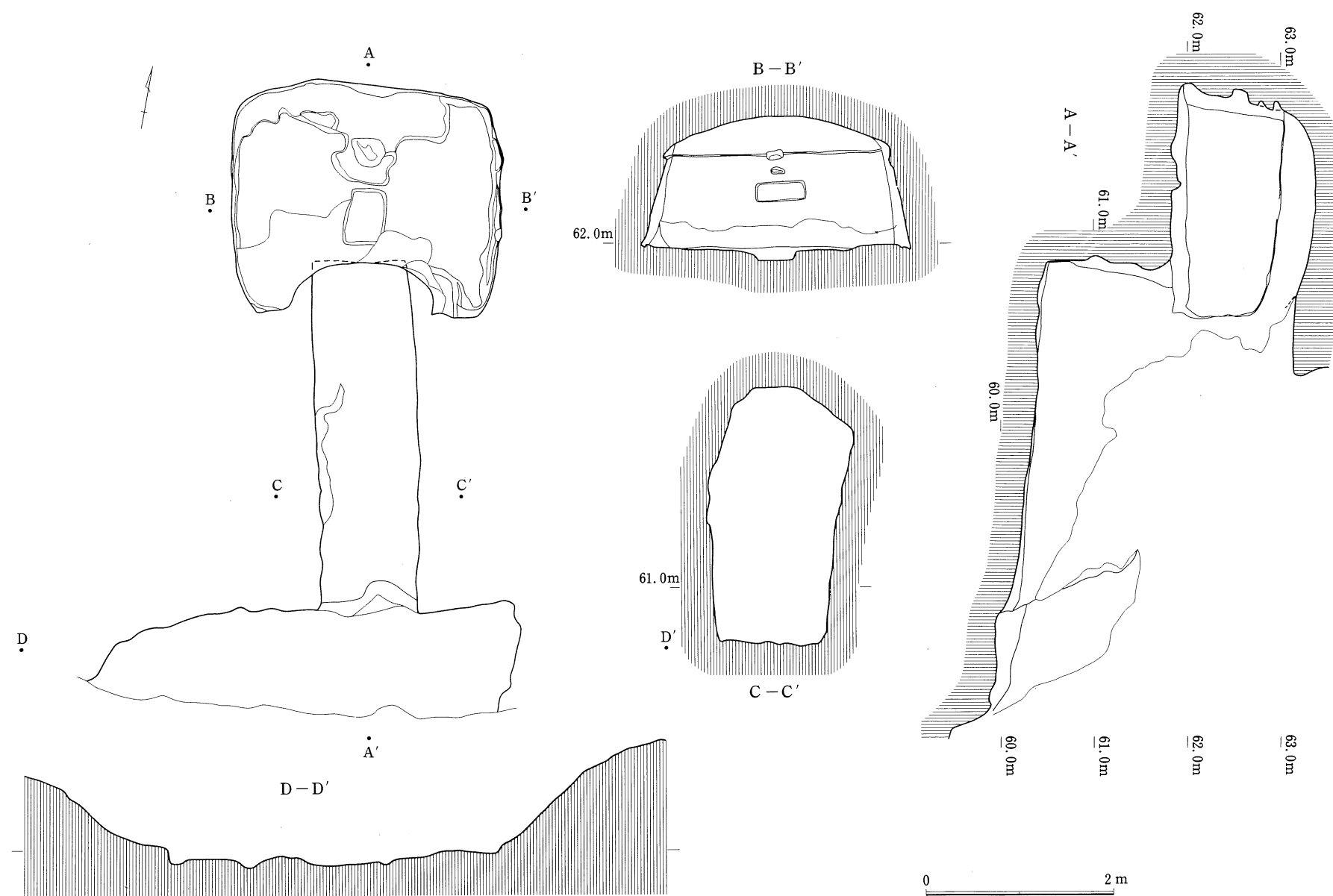
羨道は、長さ約3 m80cm、幅は玄室側、前庭部側ともに約1 m10cmで、長方形を呈している。前庭部との境には、高さ約10cmの段が作られている。玄室の方へは約50cm入り込んでおり、隔壁の高さは約1 m40cmである。また、羨道の1/3部分には、天井が残っており、最も高いところで約2 m80cmを計る。

前庭部は、既述の通り南半は欠失しているが、残存部で幅約4 m40cm、奥行き約1 m10cmである。

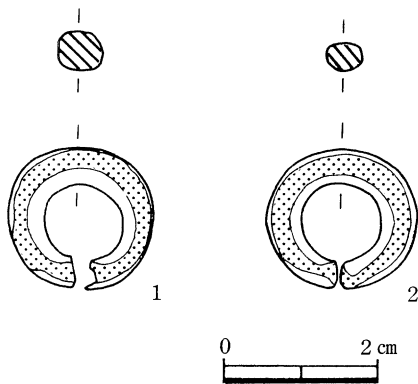
遺物は、羨道部および前庭部から出土している。



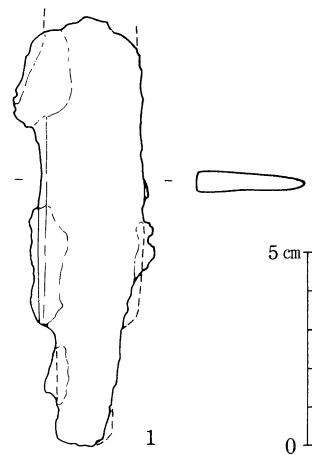
第10図 7号横穴出土土器実測図(4のみ土師器、それ以外は須恵器)



第11图 7号横穴实测图(s=1/60)



第12図 7号横穴出土耳環実測図(原寸)



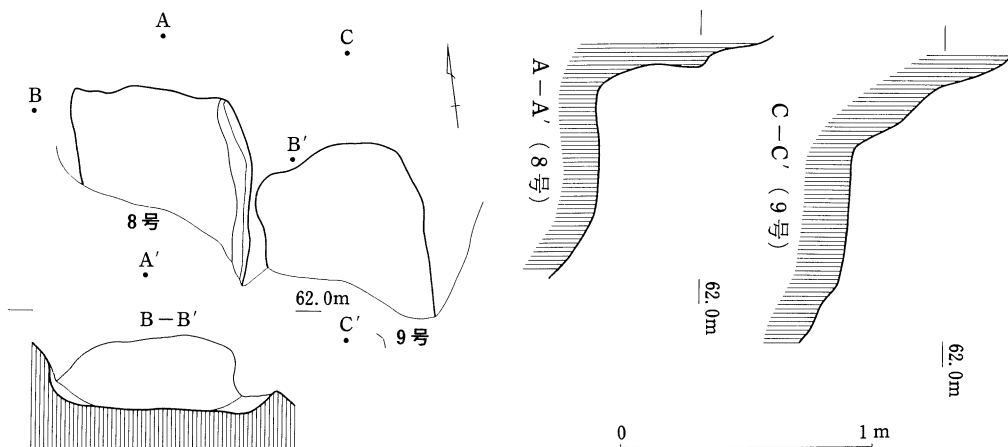
第13図 7号横穴出土鉄製品実測図($s = 1/2$)

8、9号横穴

7号横穴の羨道部東側に並列して存在する。調査時の所見によれば9号の崩落土を8号が切っており、8号の方が新しい。いずれも玄室の先端部のみ残存しており、全容は不明である。

9号横穴については、玄室の幅約70cmで、床面には、特に施設も設けられておらず、遺物の出土も見られなかった。

この9号横穴を切っている8号横穴についても、玄室の幅約70cmと、同様の規模である。東側壁際に幅5～8cmの溝が検出されている。この溝の深さは、玄室先端部側へ行くほど浅くなっており、深さ数cmであるが、南端では約10cmとなっている。この横穴からも遺物は出土していない。



第14図 8・9号横穴実測図($s = 1/30$)

30号横穴

7号横穴と33号横穴の間に位置し、羨道部の南半は欠失しているが、玄室の遺存状態は比較的良好で、内部からは、100個を超えるガラス玉や、鉄器が出土している。

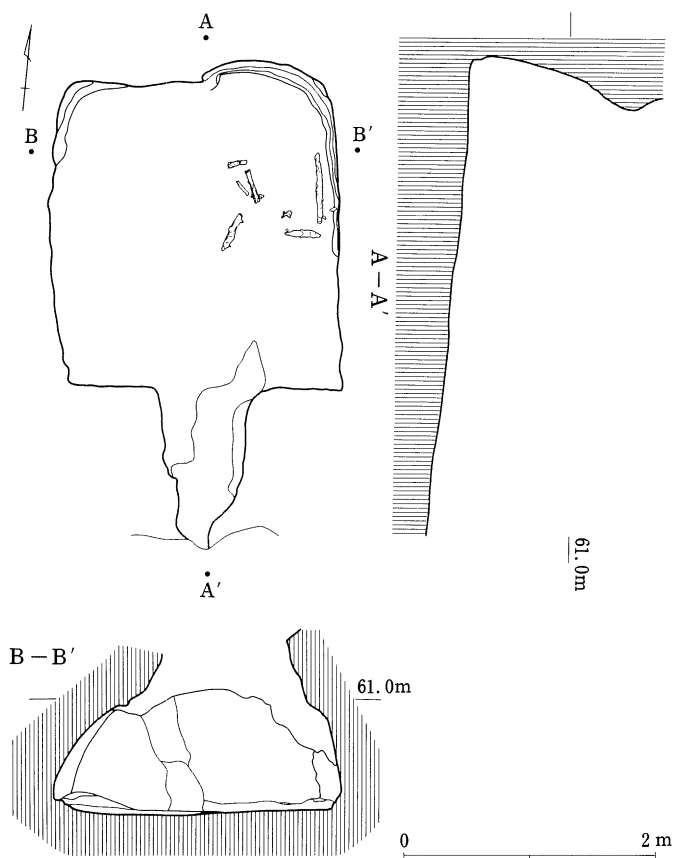
玄室は、長さ約2 m 50cm、幅約2 m 20cmのやや縦長の長方形を呈している。北西隅には高さ6 cm前後のテラスが形成され、正面東半の壁際から、東壁際の約2 / 3の部分にかけて、非常に浅い溝が掘られている。天井部の残存状況は悪くほとんど残っていない状況であるが、残存部で床からの高さ約90cmである。また、天井部と壁との境界は不明瞭である。ガラス玉は、この玄

室の中央寄りに散在して検出し、鉄器はやや東寄りの部分で出土している。

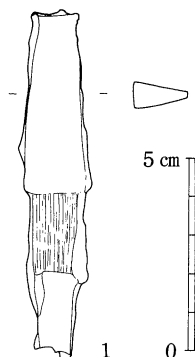
羨道は南半が欠失しており、残存部にも後世の攪乱が及んでいるため、残存状況は悪い。玄室への入口部分で幅約90cm、南側で約60cmであり、元来、逆台形を呈していたかもしれない。なお、この横穴では、隔壁はなく、隣接する羨道を有する横穴(たとえば7号、33号など)とは構造を異にしている。

遺物は、上述のように、ガラス小玉と、鉄器が出土した。

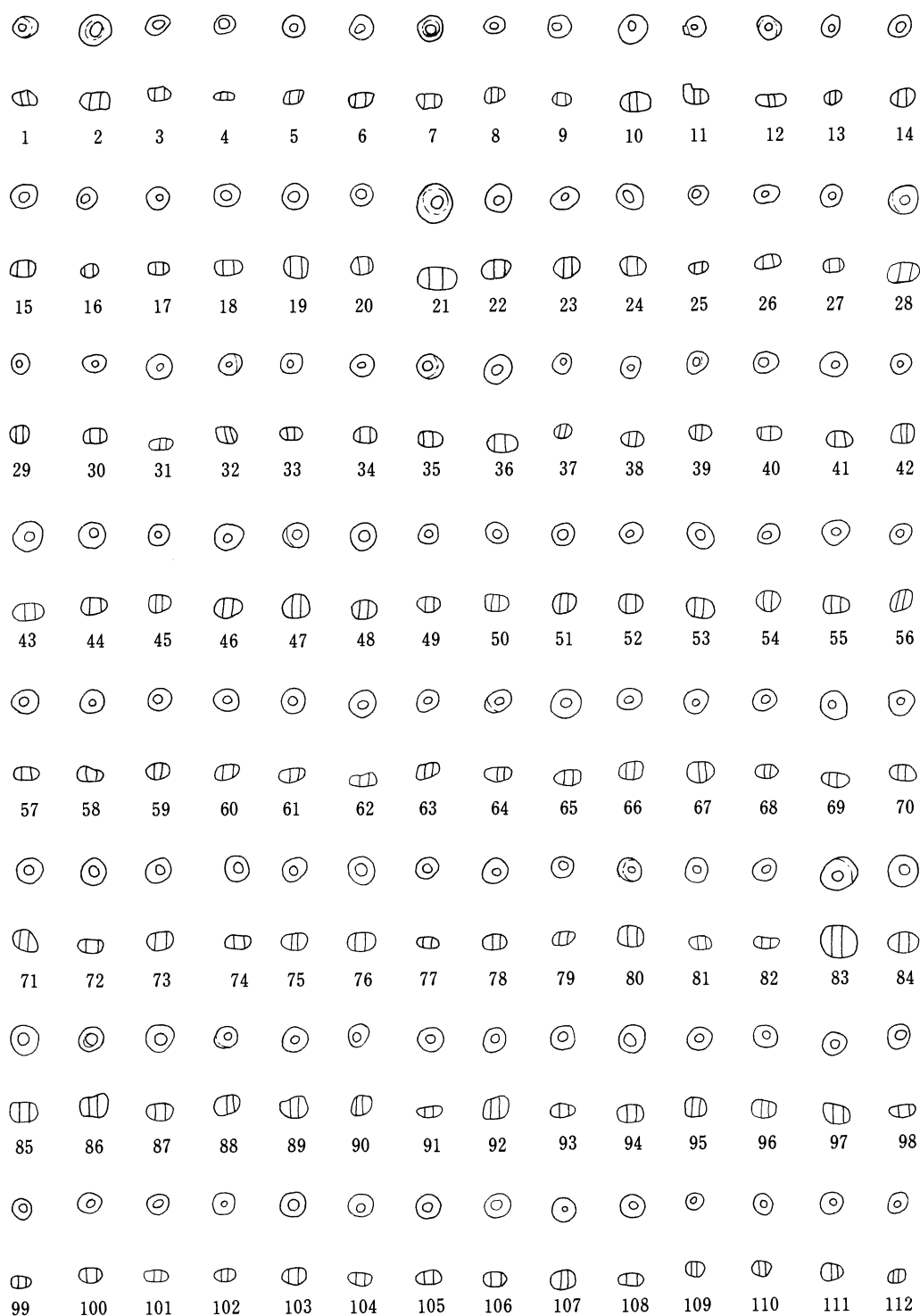
ガラス小玉は約130個検出されたが、一部で既に崩れているものもあり、図示し得たものは125個である。いずれも、長さ2 mm前後、外径3～4 mm、口径1.0～1.5mm、重量は0.03 g 前後のものが多数を占める。なお、125個全体の統計上の数値は、重量平均0.043 g、標準偏差0.0207であった。これは、重量という1つの属性についてのみ着目した場合の数字であって、長さ・口径等との相関関係については分析していない。また、色調の相違



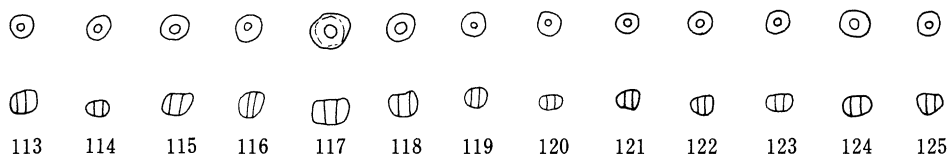
第15図 30号横穴実測図(s = 1 / 60)



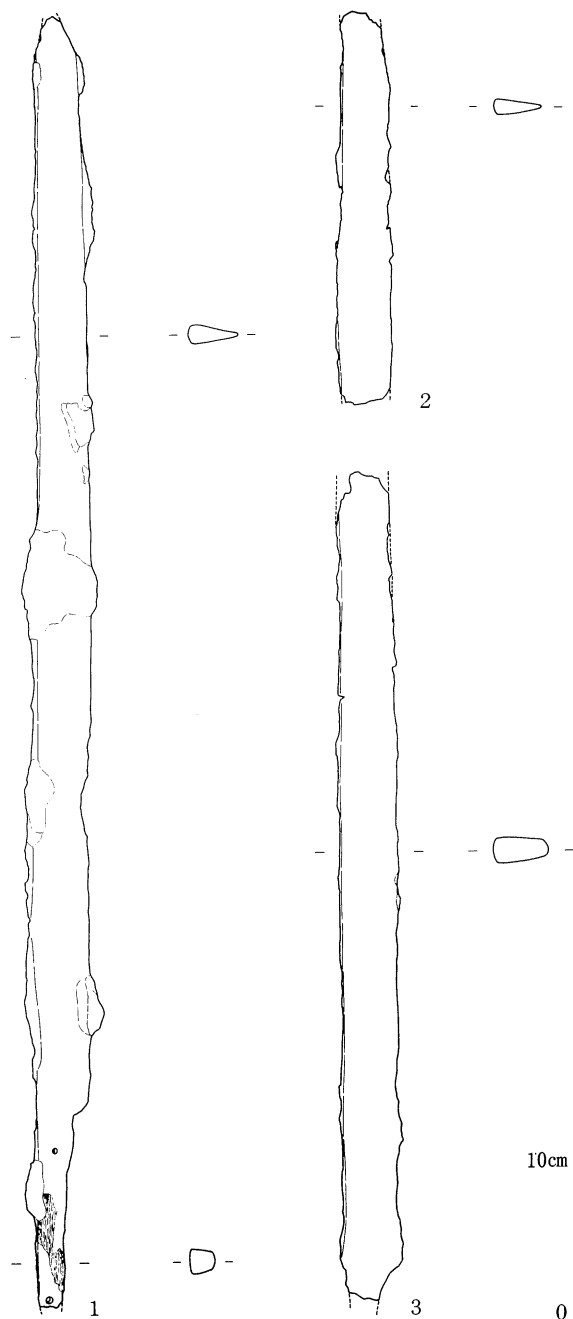
第16図 30号横穴出土鉄製品実測図(s = 1 / 2)



第17図 30号横穴出土ガラス小玉実測図(1)(原寸)



第17図(2) 30号横穴出土ガラス小玉実測図(2)



についても、無視した。本来ならば、複数の属性を共有するものを最初に抽出すべきであろうが、逆に1つの属性のみに着目することも可能ではないかと考えたことによる。ただし、今回は、平均と標準偏差を示したにすぎないが、なお、検討すべき点を残しているので、今後の課題として以下に挙げておきたい。まず、たとえば、No.83のように重量の際立って重い固体については、棄却検定法による検定を経て、他の固体と同一母集団に属するものと見てよいか吟味する必要がある。また、正規分布に一致するかどうかの検討も併せておこなうべきであろう。ともすると、数値データを扱うに際して、平均と標準偏差までは提示しても、検定作業については、おろそかになりがちな感がある。

総計学を専門に研究する必要はないが都合のいいところで手を引くことのないようにする必要がある。逆に、数字に目を奪われて、実体を見失うことのないように留意する必要がある。

(なお、今回、玉の重量の計測には、島津製作所 A E L-200を使用した。)

第18図 30号横穴出土鉄刀実測図(s=1/5)

第3表 30号横穴出土ガラス小玉計測表

番 号	色 調	長 さ(mm)	外 径(mm)	孔 径(mm)	重 量(g)	番 号	色 調	長 さ(mm)	外 径(mm)	孔 径(mm)	重 量(g)
1	淡青色	2.4	3.3 ～ 3.6	1.0	0.040	33	淡青色	2.0	3.3 ～ 3.4	1.4	0.034
2	〃	2.2 ～ 2.7	4.3 ～ 4.9	1.6	0.074	34	淡青色	2.0 ～ 2.2	3.3 ～ 3.4	1.6	0.036
3	〃	2.1	3.0 ～ 3.6	1.0	0.031	35	濃青色	1.7 ～ 1.9	3.8 ～ 4.0	1.9	0.038
4	〃	1.0 ～ 1.3	2.9 ～ 3.0	1.0	0.014	36	淡青色	2.6	4.4	1.7	0.065
5	〃	1.7 ～ 1.8	3.2 ～ 3.5	1.4	0.026	37	〃	2.0	2.9 ～ 3.1	1.0	0.025
6	〃	2.0	3.3 ～ 3.6	1.2	0.032	38	〃	1.6 ～ 1.9	3.1 ～ 3.5	1.1	0.026
7	濃青色	2.2	3.6 ～ 3.9	1.4	0.047	39	〃	2.1	3.1 ～ 3.6	1.3 ～ 1.6	0.031
8	淡青色	1.8 ～ 2.4	2.9 ～ 3.0	1.0	0.028	40	〃	2.0	3.1 ～ 3.5	1.1	0.028
9	〃	1.8	3.0 ～ 3.3	1.0	0.026	41	〃	1.9 ～ 2.3	3.9 ～ 4.0	1.7	0.045
10	黄 色	2.7 ～ 3	4.1 ～ 4.5	1.3	0.073	42	〃	2.6 ～ 2.8	2.9 ～ 3.1	1.5	0.037
11	濃青色	1.9 ～ 2.7	3.0 ～ 3.4	0.9	0.032	43	〃	2.4	4.3 ～ 4.6	2.2	0.069
12	淡青色	1.7	3.5 ～ 4	1.4	0.034	44	〃	1.9 ～ 2.6	3.8 ～ 3.9	1.2	0.051
13	〃	1.6 ～ 2.0	2.9 ～ 3.2	0.9	0.023	45	緑 色	2.9	3.4	1.3	0.045
14	〃	2.0 ～ 2.3	2.9 ～ 3.3	1.1 ～ 1.3	0.029	46	淡青色	2.6	4.0 ～ 4.2	1.7	0.053
15	〃	1.8 ～ 2.0	3.2 ～ 3.5	1.3 ～ 1.6	0.029	47	〃	3.3 ～ 3.4	3.7 ～ 4.0	1.3 ～ 1.5	0.075
16	〃	2.1	3.1 ～ 3.1	1.2	0.029	48	〃	2.7	3.0 ～ 3.3	1.5	0.063
17	〃	1.8	3.0 ～ 3.3	0.9 ～ 1.4	0.027	49	〃	1.9	3.1 ～ 3.4	1.5	0.026
18	〃	1.8	3.4 ～ 3.9	1.0 ～ 1.6	0.033	50	〃	2.1 ～ 2.3	3.3 ～ 3.9	1.7	0.043
19	〃	2.6 ～ 3.1	3.5 ～ 3.9	1.6 ～ 1.4	0.056	51	〃	2.3 ～ 2.4	3.5 ～ 3.6	1.5	0.040
20	〃	2.1	3.3	1.7	0.032	52	〃	2.5 ～ 2.6	3.3 ～ 3.6	1.2	0.043
21	〃	2.8	5.4 ～ 5.5	2.0	0.120	53	〃	2.7	3.8 ～ 4.5	1.3 ～ 1.6	0.062
22	緑 色	2.4	2.9 ～ 3.0	1.6 ～ 1.7	0.054	54	〃	2.6	3.3	0.9	0.040
23	淡 色	2.3 ～ 3.0	3.8 ～ 4.2	1.4 ～ 1.7	0.057	55	〃	2.3 ～ 2.6	3.7 ～ 4.0	1.5	0.056
24	〃	2.2 ～ 2.6	3.5 ～ 4.0	1.3 ～ 1.9	0.049	56	〃	2.7 ～ 2.9	3.1 ～ 3.3	1.3	0.045
25	〃	1.2 ～ 1.6	2.9 ～ 3.2	1.0 ～ 1.5	0.019	57	〃	2.2	3.7 ～ 4	1.5	0.043
26	〃	1.5 ～ 1.7	3.0 ～ 3.6	1.4	0.024	58	〃	1.8 ～ 2.5	3.7 ～ 3.9	1.5	0.046
27	〃	1.4 ～ 1.5	3.0 ～ 3.2	1.6	0.023	59	〃	2.2 ～ 2.4	3.5 ～ 3.6	1.7	0.042
28	黄 色	2.7	4.2 ～ 4.3	2.0	0.070	60	〃	2.4 ～ 2.5	3.6 ～ 3.8	1.0	0.049
29	淡青色	2.0 ～ 2.2	2.7 ～ 3.0	1.3	0.025	61	〃	2.0	3.8 ～ 4.0	1.2	0.045
30	〃	2.1	3.2 ～ 3.7	1.5 ～ 1.6	0.033	62	〃	1.5 ～ 2.1	4.1 ～ 4.2	1.4	0.038
31	黄 色	1.8	3.6 ～ 3.7	1.4	0.032	63	〃	2.1	3.8 ～ 4	1.3	0.038
32	淡青色	2.4	3.2	1.3	0.039	64	濃青色	2.0	3.8 ～ 4.3	1.3	0.041

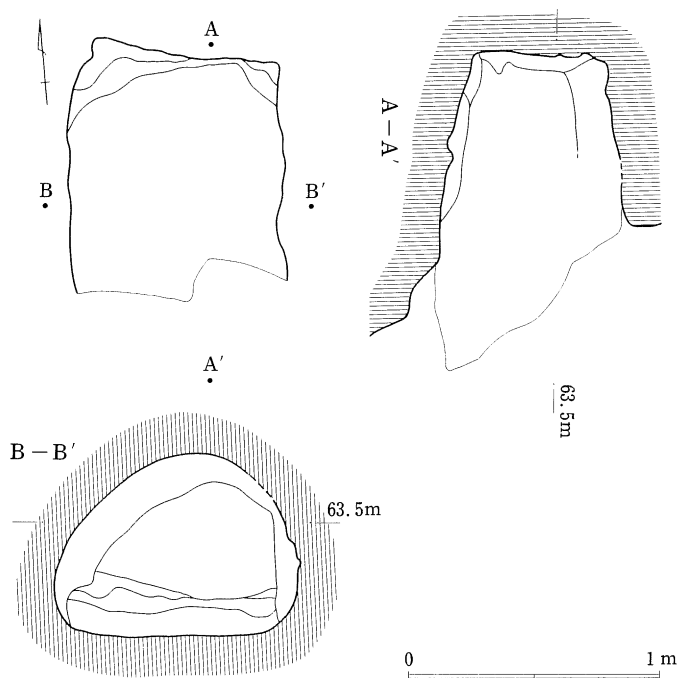
番 号	色 調	長 さ(mm)	外 径(mm)	孔 径(mm)	重 量(g)	番 号	色 調	長 さ(mm)	外 径(mm)	孔 径(mm)	重 量(g)
65	淡青色	1.8 ～ 2.0	4.2 ～ 4.3	1.6	0.052	96	淡青色	2.5	3.6 ～ 4	1.2 ～ 1.3	0.050
66	"	2.1 ～ 2.4	3.5 ～ 3.8	1.4 ～ 1.7	0.042	97	"	2.5 ～ 2.7	3.6 ～ 3.7	1.3	0.049
67	"	2.3 ～ 2.6	3.8 ～ 3.9	1.5	0.053	98	"	1.7 ～ 1.8	3.8 ～ 3.9	1.5	0.035
68	"	1.7 ～ 2.0	3.3 ～ 3.5	1.4	0.031	99	"	1.6	3.0 ～ 3.4	1.3	0.022
69	"	2.2 ～ 2.4	4.0 ～ 4.2	1.4	0.054	100	"	1.8 ～ 1.8	3.1 ～ 3.5	1.1 ～ 1.3	0.026
70	"	2.4 ～ 2.6	3.7 ～ 3.8	1.6	0.051	101	"	1.6	3.4	1.4	0.026
71	"	2.4 ～ 2.5	3.6 ～ 3.7	0.9	0.044	102	"	1.7	3.4	1.4	0.025
72	"	1.6 ～ 1.8	3.7 ～ 3.8	1.4	0.034	103	"	2.1 ～ 2.4	3.7	1.4	0.043
73	"	2.4	3.4 ～ 3.6	1.5	0.041	104	"	1.7 ～ 1.8	3.4 ～ 3.7	1.6	0.032
74	"	1.6 ～ 2.0	3.8 ～ 4.2	1.5	0.040	105	"	1.7 ～ 1.8	3.6	1.3 ～ 1.7	0.032
75	濃青色	1.9 ～ 2.2	3.7 ～ 3.9	1.2	0.042	106	"	2.1	3.6 ～ 3.9	1.4	0.040
76	淡青色	2.6	2.9 ～ 3.2	1.4	0.060	107	"	2.5 ～ 2.6	3.7 ～ 3.9	0.9	0.051
77	"	1.6 ～ 1.7	3.1 ～ 3.2	1.8	0.023	108	"	1.9	3.6 ～ 3.8	1.4	0.038
78	"	1.7 ～ 2.4	3.8 ～ 3.9	1.3	0.045	109	"	2.1 ～ 2.2	2.9 ～ 3.0	1.5	0.027
79	"	2.0	3.3 ～ 3.4	1.3	0.032	110	"	1.8 ～ 1.9	3.0 ～ 3.5	1.0 ～ 1.5	0.027
80	"	2.5	3.3	1.2	0.037	111	"	2.1 ～ 2.3	3.3 ～ 3.4	1.3	0.034
81	"	1.9	3.5	1.2	0.031	112	"	1.6 ～ 2.1	2.9 ～ 3.3	1.0	0.025
82	"	1.3 ～ 1.4	3.3 ～ 3.7	1.3	0.022	113	"	2.2 ～ 2.3	2.9 ～ 3.1	1.1	0.028
83	"	4.2 ～ 4.5	4.0 ～ 5.7	1.3 ～ 2.2	0.183	114	"	1.7	2.9 ～ 3.2	1.0 ～ 1.3	0.021
84	"	2.3 ～ 2.6	4.6 ～ 4.8	1.7	0.074	115	"	2.4 ～ 2.7	3.4 ～ 3.8	1.5 ～ 1.8	0.045
85	"	2.5 ～ 2.9	3.1 ～ 4.3	1.8	0.063	116	"	2.8 ～ 3.0	3.5 ～ 3.6	1.2	0.049
86	"	2.6 ～ 3.0	3.8 ～ 4.1	1.6	0.059	117	"	2.6 ～ 3.0	4.0 ～ 4.2	2.0	0.106
87	"	2.4	4.2 ～ 4.3	1.8	0.061	118	"	3.1 ～ 3.3	3.5 ～ 3.9	1.3 ～ 1.5	0.064
88	"	3.0	3.6 ～ 3.9	1.4	0.056	119	濃青色	2.3	3.0 ～ 3.1	0.7	0.029
89	"	2.5 ～ 2.8	3.6 ～ 4.0	1.2	0.052	120	"	1.8	3.2	1.4	0.023
90	"	2.7	3.0 ～ 3.5	1.6	0.037	121	"	2.0	3.1 ～ 3.2	1.5	0.024
91	"	1.4	3.7 ～ 3.8	1.4	0.025	122	淡緑色	2.2	2.9	1.2	0.026
92	"	2.8 ～ 3.3	3.8 ～ 4.0	1.5	0.064	123	"	2.4	3.2 ～ 3.3	1.3	0.037
93	"	1.4 ～ 1.6	3.5 ～ 3.8	1.0 ～ 1.5	0.030	124	"	2.0 ～ 2.1	3.5 ～ 3.9	1.3 ～ 1.8	0.039
94	"	2.0 ～ 2.4	4.1 ～ 4.4	1.5 ～ 2.1	0.058	125	黄 色	1.8 ～ 2.0	3.3 ～ 3.4	1.5	0.032
95	"	2.2 ～ 2.5	3.5 ～ 3.9	1.5	0.047						

31号横穴

30号横穴の直上に位置し、南側は欠失し、玄室の一部のみの残存である。

この玄室は、残存部で長さ約1m、幅約80cmで、ほぼ長方形を呈している。正面左右にそれぞれ、小規模なテラスを設けている。天井部は約60cm残存していたが、高さは最も高いところで約70cmである。なお、東西の壁と天井部との境界は不明瞭であるが、正面では、直角に近く屈曲しており、玄室全体の形状としては、ゆがんだカマボコ形とでもいうような形態である。

遺物の出土は皆無である。

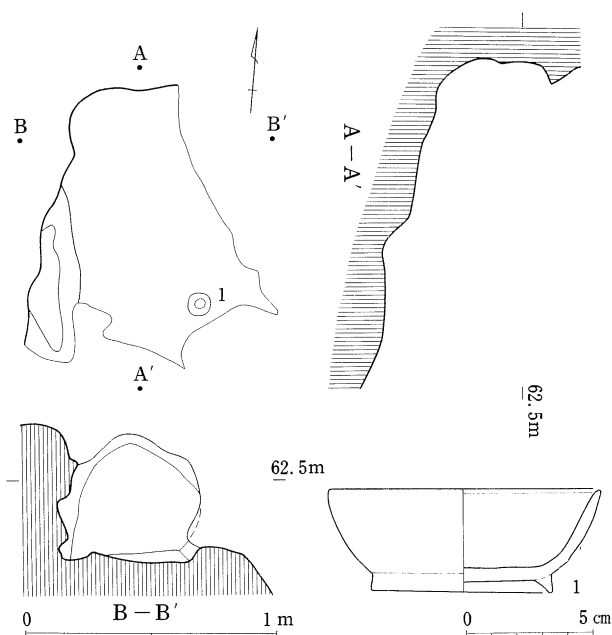


第19図 31号横穴実測図(s = 1 / 30)

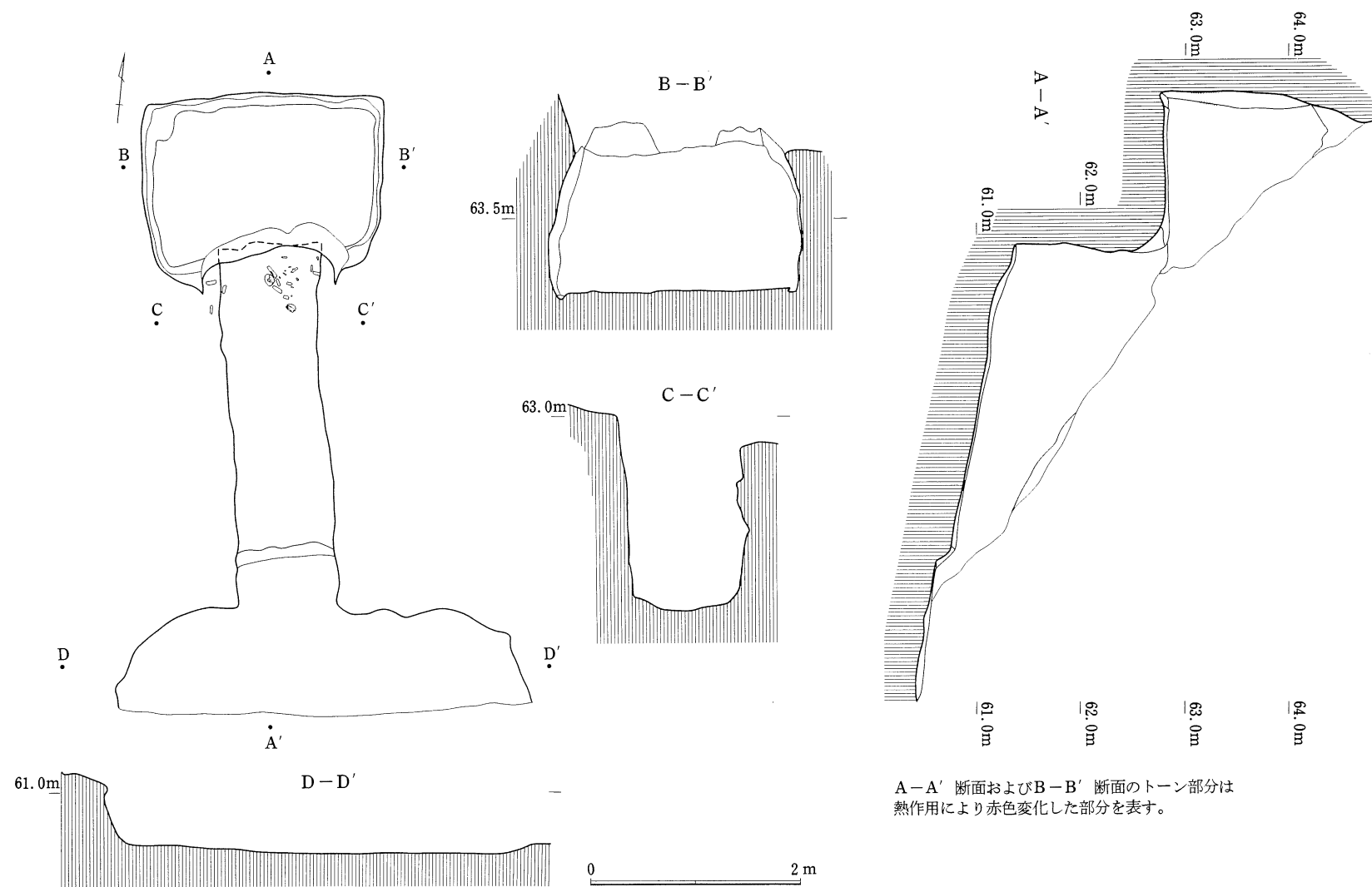
32号横穴

33号横穴の羨道部東側に位置し、南側は欠失し玄室の一部のみが残存している。さらに、この玄室も東壁は、34号横穴に切られている。このような悪い残存状況ではあったが、覆土中より、完形の須恵器有台坏身が出土している。

残存する玄室は、長さ約1m20cm、幅は最奥部で約40cm、入口側で約1mであった。西壁側には、長さ約70cm、深さ約10cmの掘り込みが見られ、



第20図 32号横穴(s = 1 / 30)および
出土須恵器実測図(s = 1 / 3)



第21図 33号横穴実測図(s = 1 / 60)

これはさらに入口側に延びていると思われるが、いわゆる排水溝かどうかは不明である。天井は、最奥部でわずかに残存しているだけであるが、高さ約50cmであった。

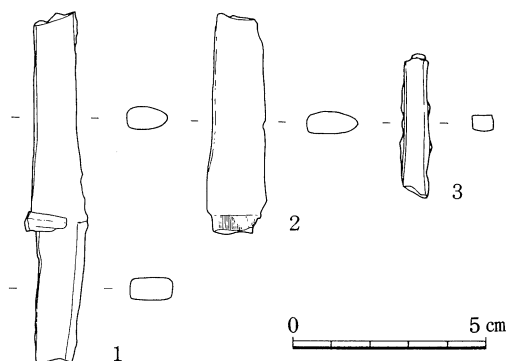
覆土上層から出土した須恵器有台坏は、口径11cm、台部径7.2cm、器高4.2cmであった。生産地については、不明である。近在する、永田・不入窯産の製品とは考え難い。

33号横穴

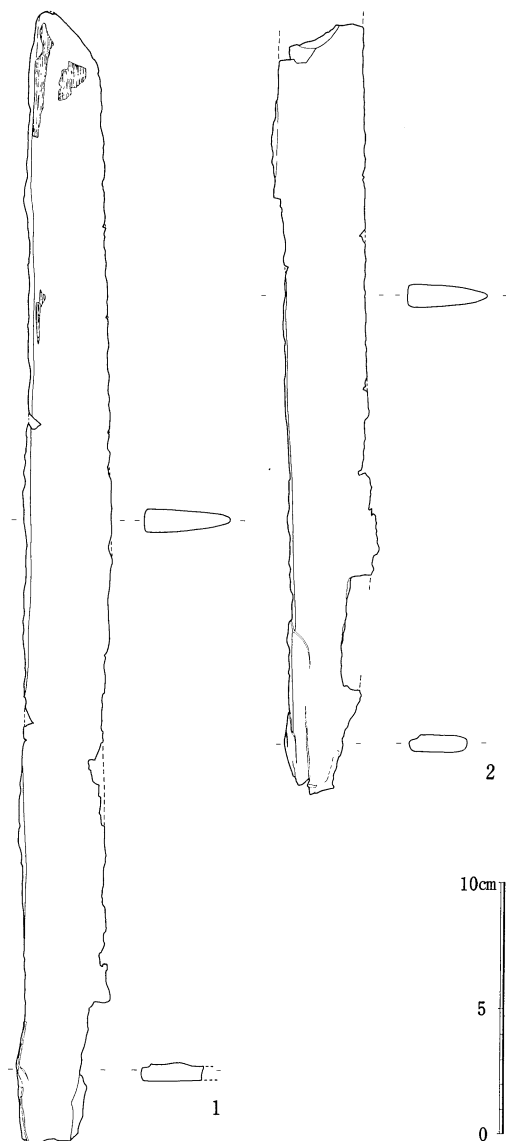
30号横穴の東側に位置する。前庭部南側が削平を受けているが、全体に遺存状態は良好であった。また、土器・鉄器が出土している。

玄室は、横長の長方形を呈し、幅10cm前後、深さ2～3cmの溝が壁際を全周している。また、正面高さ15cm前後の部分から、幅20～30cmに及ぶ帯状の赤色部分が見られ、その延長が東壁、西壁にまで及んでいる。熱を受けて酸化したための所産と思われる。玄室内からは炭化物等の出土も認められず、羨道部にかき出された痕跡も認められないところから、横穴掘削直後に何らかの行為があったと考えるのが妥当であろう。ただしどのような目的の行為かは不明である。

羨道部は長さ約3m70cm、幅は1m前後で、天井部から崩落した岩が堆積していた。この崩落岩と、隔壁の間に若干すき間が空いてお

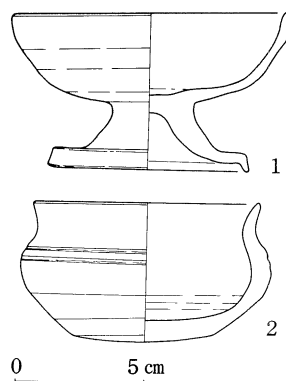


第22図 33号横穴出土鉄製品実測図(s = 1 / 2)



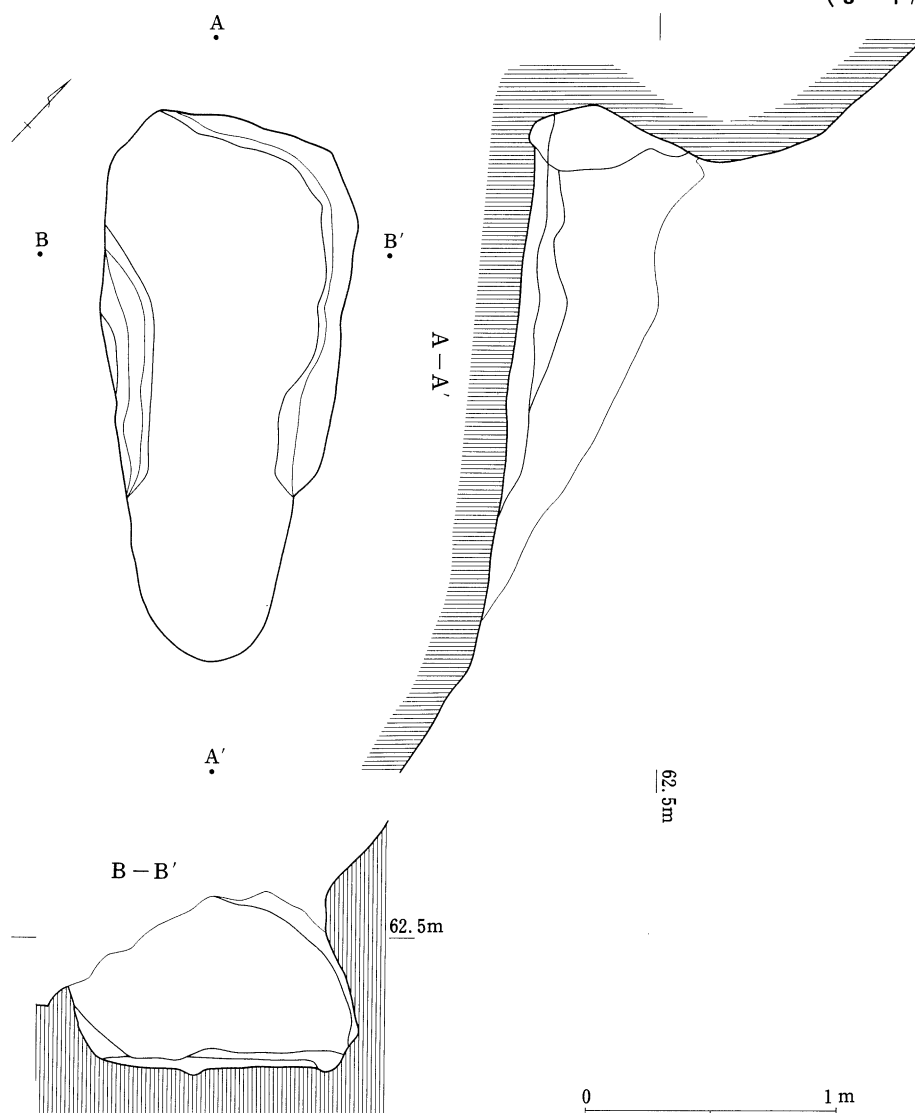
第23図 33号横穴出土鉄刀実測図(s = 1 / 3)

り、その部分から遺物が集中して出土している。また南端寄りの部分には、高さ17~18cmの段が造られている。隔壁は、上端部に崩落が見られるが、高さ約1 m 40cm、幅約1 mで、わずかに玄室内に入り込んでいる。前庭部は既述の通り南側部分が削平されている。残存部で奥行き約1 m 10 cm、幅約4 mである。この部分からは遺物の出土はなかった。



第24図 33号横穴出土須恵器実測図
(s = 1 / 3)

34号横穴



第25図 34号横穴実測図(s = 1 / 30)

35号横穴の羨道の西側約1mのところに位置し、上方は32号横穴に接しており、南平は、欠失している。玄室のみ残存しており、開口方向は、35、39号横穴の前庭部の方を向いている。玄室は、長さ約2m20cm、幅は奥側で約90cm、手前側で約70cmで、やや台形を呈している。正面から東壁際に沿って、また、西壁際のほぼ真中の部分にのみ、溝が見られる。天井部は全く残存していない。また、遺物の出土も皆無であった。

35、39号横穴(38号前庭部)

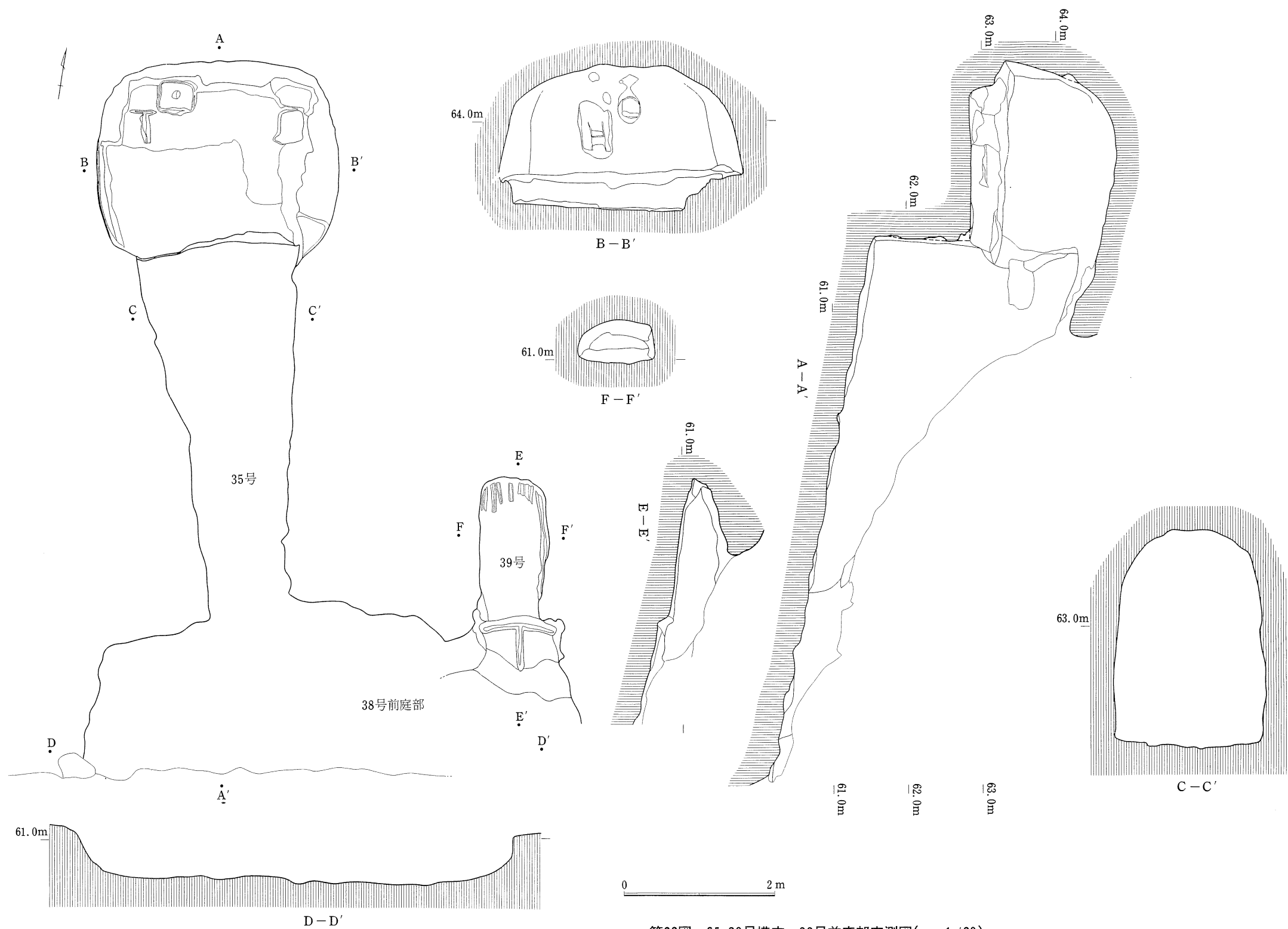
33号横穴の前庭部に接して、35号横穴と39号横穴とが38号前庭部を共有して存在する。したがってここでは35号と39号を合わせて記しておく。

35号横穴は、今回調査した横穴群のうちでも大きい部類に属し、残存状態も比較的良好な方であった。玄室は横長の隅丸方形を呈する。正面及び東壁、西壁にはテラス状の高まりが見出される。しかし、このテラスの形態は不整形で、造り出されている面積も小さいところから、棺台といった機能をもつものとは考え難い。ただし、元来もう少し大きくはり出していたものが、後世に作り変えられた可能性も否定できない。実際、後世の二次利用の痕跡として、正面、高さ1m20cm程のところに、浮き彫りらしきものが彫られており、見ようによっては、五輪塔の下半分ともとれ、すぐ右脇にも線刻が見られるところから、後世の利用によって、旧状が改変されている可能性は大である。ただし、上述した、棺台の存在の可能性については、今回調査した横穴群の中には、そのような施設をもつものは皆無であり、可能性は存在するが、きわめて低いと言えよう。天井部は残存状態が比較的良好といえ、羨道部を1m程覆うところまで残存している。形態的には、不整のドーム状で、一番高いところで床面から約2mを計り玄室入口部では幅1m80cmである。また天井中央のやや南寄りの部分には、径約30cmの不整円形のくぼみが認められた。

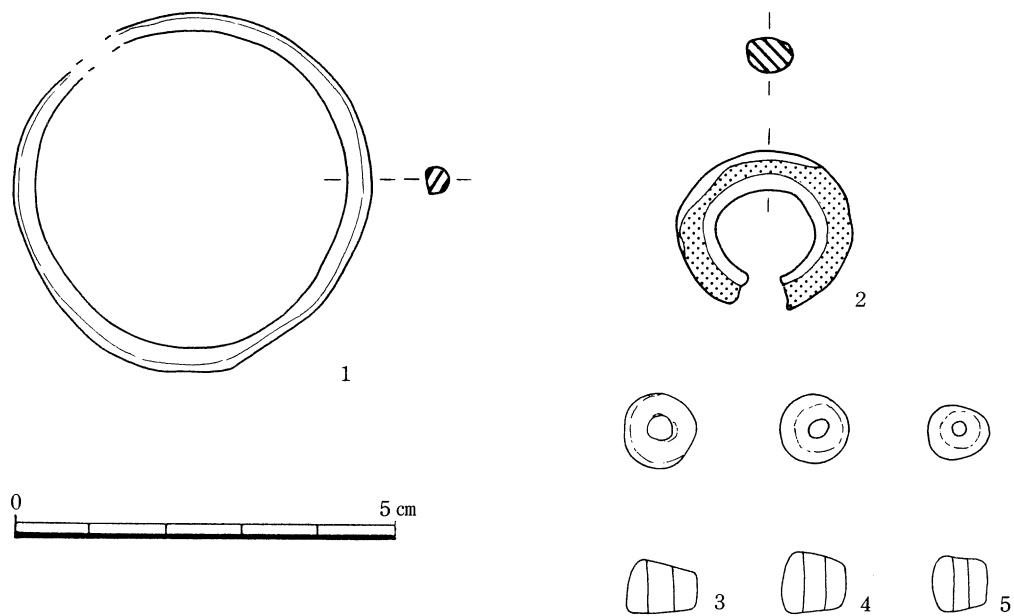
羨道部は長さ約5m、幅は、前庭部側で約1m20cm、玄室側で約2m20cmと、逆台形を呈している。調査開始時には崩落した岩が堆積しており、その上層中より、土師器片や古銭が出土し、崩落岩除去後、ガラス玉、耳環、銅釧等が出土している。なお、隔壁は、ほぼ直立し、高さは、約1m30cmである。

39号横穴は、35号横穴の東側約2mのところに開口している。

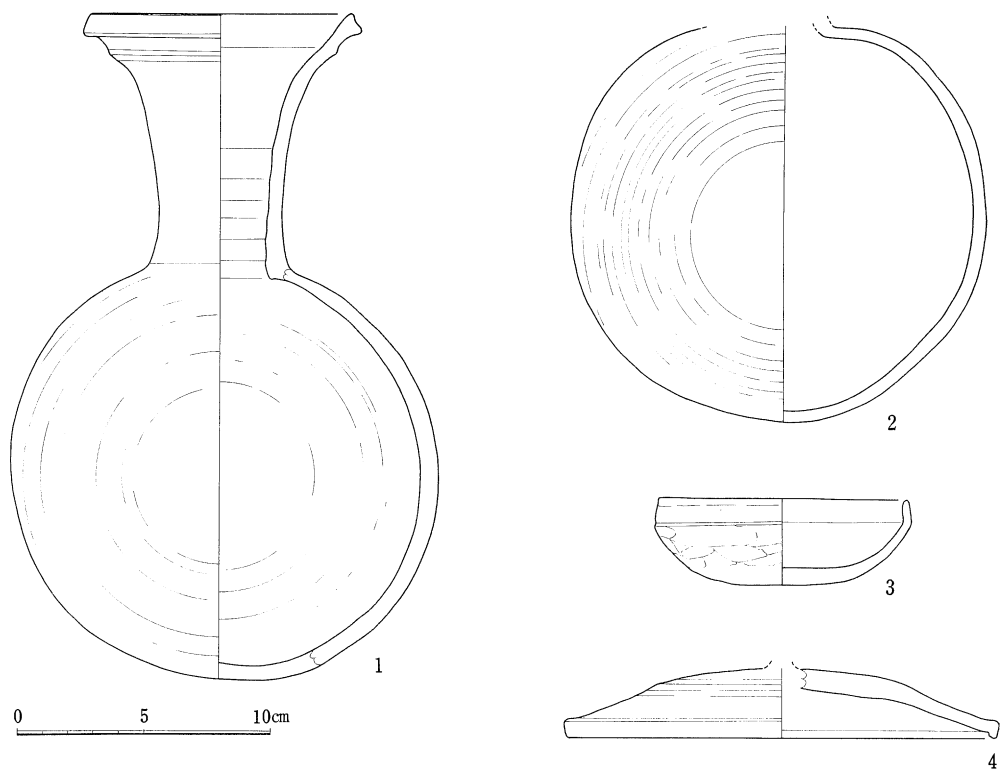
玄室と、羨道の区別がなく、前庭部からただちに玄室となる。この玄室は、幅90cm前後、長さ約1m80cmの長方形を呈し、最奥部は曲線的である。東壁際には、幅10cm前後、深さ1cm前後の溝が走っているが、前庭部まではのびておらず、玄室内で完結している。また、最奥部には、幅10cm前後の工具痕が、数条見られた。天井部は、約半分残存しており、床からの高さは最も高いところで約70cmである。奥に行くにしたがって漸次低くなるという形態をとっている。



第26图 35·39号横穴, 38号前庭部实测图(s = 1 / 60)

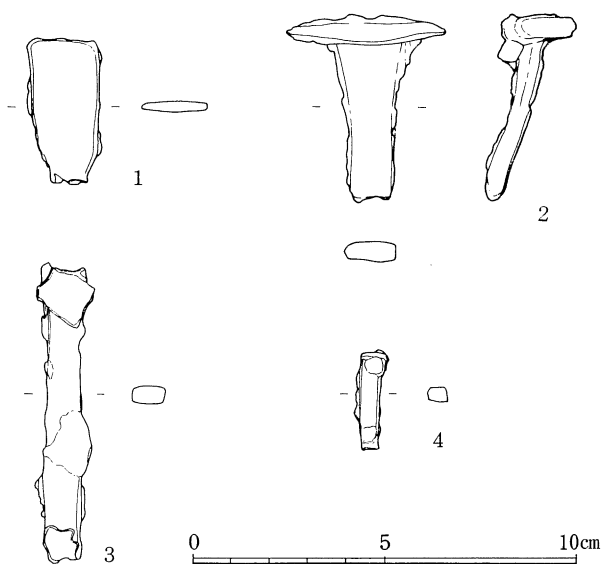


第27図 35号横穴出土銅釦・耳環・滑石製小玉実測図(原寸)



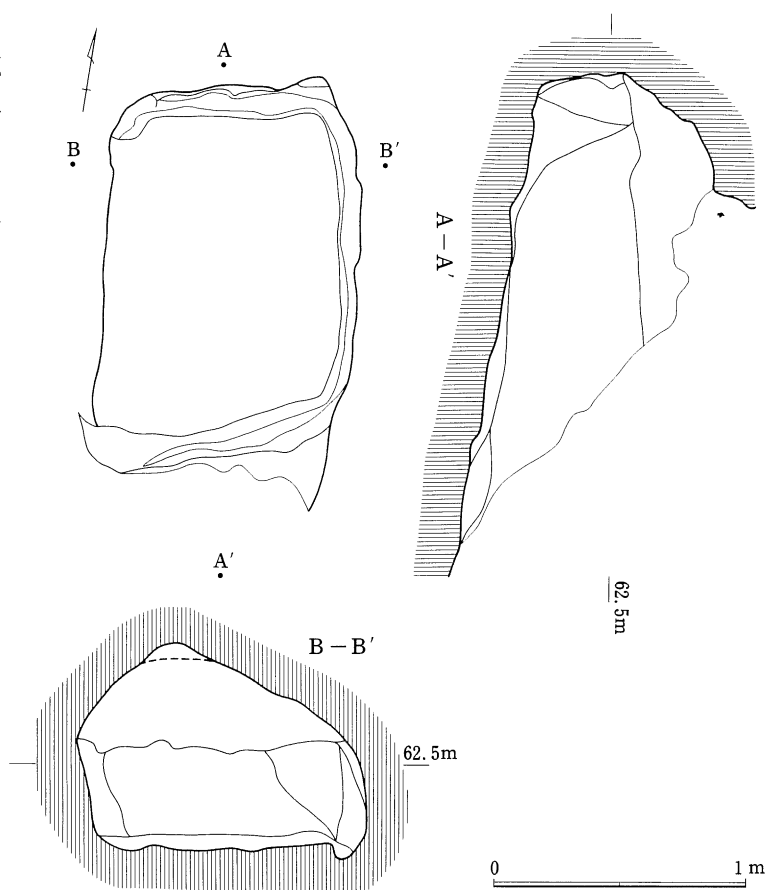
第28図 38号前庭部出土土器実測図(s = 1/3, 3のみ土師器, それ以外は須恵器)

この玄室と、前庭部の間に「T」字状の溝が検出された。このうち東西方向の溝は玄室の幅よりも長く、ゆるやかな曲線を描いている。玄室と前庭を区画する溝と考えられ、幅は15～20cm、深さは玄室側から見て15～20cm、前庭側から見ると7～10cm位である。南北方向の溝は、南側が削平を受けているが、残存部で長さ約60cm、幅10cm前後、深さ数cmである。39号横穴に伴うものと考えられるが、性格不明である。



第29図 35号横穴出土鉄製品実測図(s = 1 / 2)

前庭部は前述したように、35号横穴と39号横穴で共有するものである。南半は削平により欠失しているが、残存している範囲で、幅約6m、奥行き約2m20cmである。遺物は比較的35号横穴寄りに集中して出土している。



第30図 36号横穴実測図(s = 1 / 30)

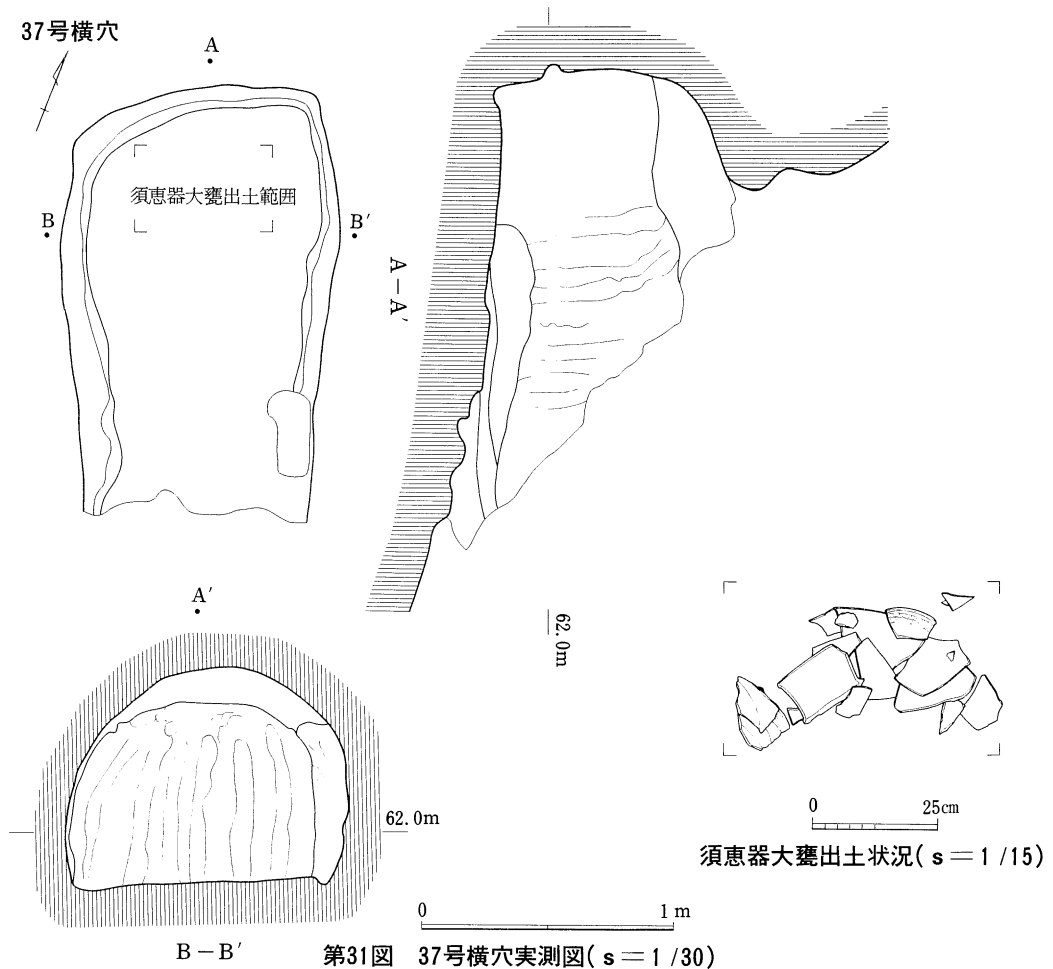
36号横穴

35号横穴の羨道部東側に位置し、南側は欠失し、玄室のみの残存である。

玄室は、全長約1 m 50 cm、幅は約1 mでほぼ長方形を呈する。正面から東壁、入口へと溝が巡っているが、西壁側には、見られない。この溝は、幅10～20 cm、深さは1 cm前後である。天井部はわずかに残存しており、壁との境界にかすかに稜を形成している。天井の高さは、最も高いところで約80 cmである。また、正面壁の中位に小さいテラスの形成が認められる。

この横穴については、羨道部が残存していないが、三方を巡る溝が存在し、これを玄室の区画と考えるならば、非常に小規模なものと言える。他の横穴に関しても被葬者について云々することは難しいが、この横穴に関しては、この溝の区画を考慮すると、成人男性の埋葬を考えるには、やや小さすぎると言える。あるいは小児の埋葬であったかもしれないが、推測の域を出ない。

なお、遺物の出土は皆無であった。



今回調査した横穴群の中で、最東端に位置し、39号横穴の北東にあたる。南側は欠失しており、玄室部のみの残存である。須恵器の大甕が出土している。

玄室は残存している部分で、長さ約1 m 70 cm、幅は奥で約1 m、手前側で約90 cmだが、ほぼ長方形を呈している。壁際には、幅10～15 cm、深さ2～3 cmの溝が巡っている。天井部はわずかに残存しており、壁との区画は不明瞭である。天井の高さは、高い箇所では約90 cmであるが、中央付近ではさらに高かったものと推察される。また、正面および東壁には、工具の痕跡が認められる。最奥部で、須恵器大甕の大型破片が、集中して検出された。

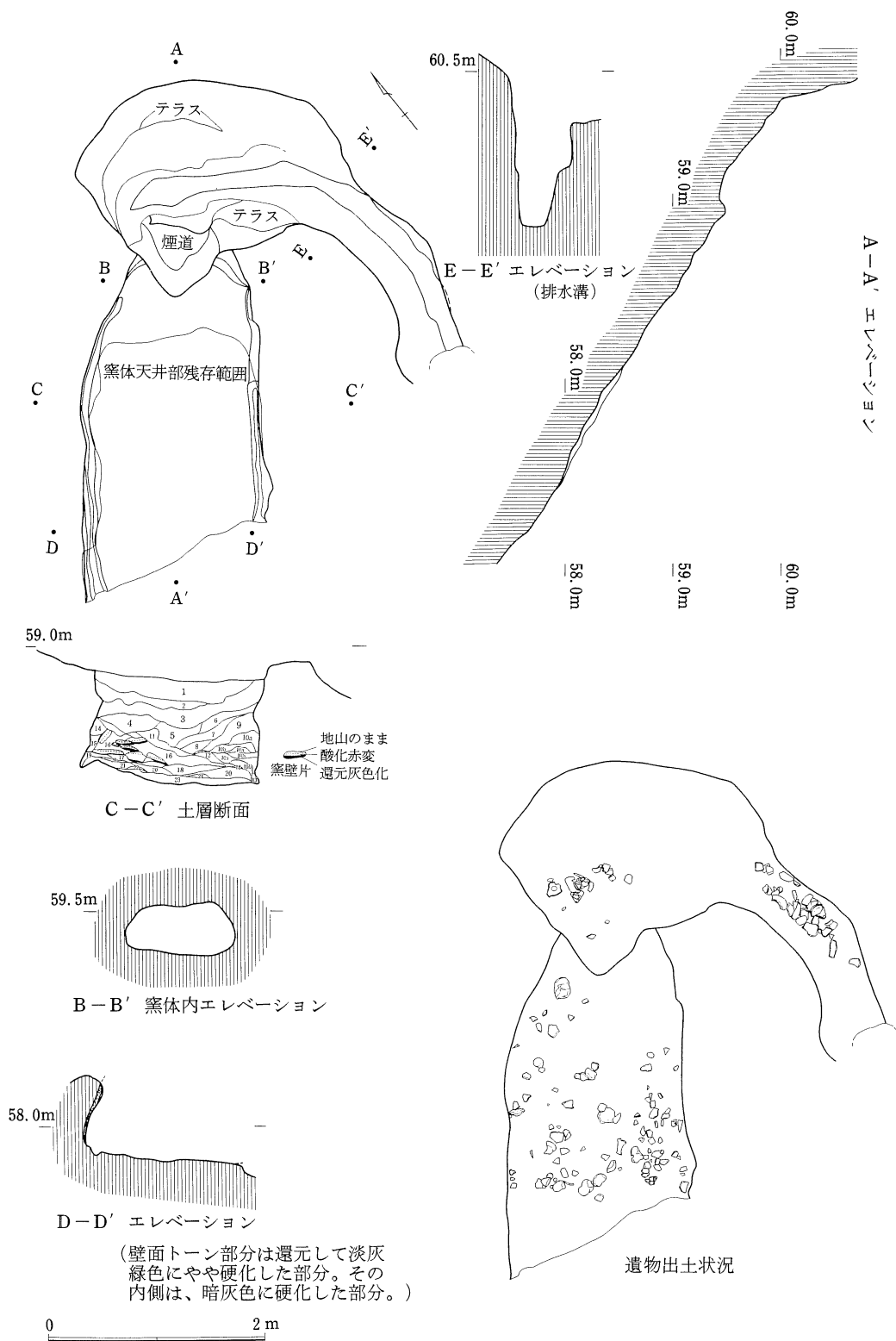
2) 窯 跡

調査区南側斜面の西端に近い部分で検出されたものである。南半は、切り通しによりカットされており、焼成部上半および、煙道部、それより東側下方へ延びる排水溝についての調査となった。

焼成部は、約3 mの残存のみであり、煙道部付近では、天井部が崩落をまぬがれて残存していた。窯体の還元状態は不十分であり、通有の須恵器窯に見られるような硬い面は形成されていない。遺物は全体に散らばって出土しており、床面には、粘土塊のような土製品が散在していた。焼き台と考えられるが、非常に簡略なものである。床面は、断ち割りの結果、一枚しか認められなかった。この部分で見える限りでは、還元技術は未熟で、しかも単期間の操業と考えざるを得ない。

排水溝は、煙道部から東側に、窯体に沿うような形で、下方へのびている。遺物は、この煙道部および排水溝から、比較的集中して出土した。特に排水溝からは、底面に並べられるような形で、出土しており、安定した出土状況といえる。

遺物は、焼成部出土のものも、煙道部、排水溝出土のものも、焼成は不十分といえ、ほとんど、堅く焼きしまった感じはない。排水溝出土の蓋坏は、還元状態の部分は見られず、全体が酸化炎焼成である。また、広口壺については、胴部中央付近以上が、不十分な還元状態で、生焼けの感すらあり、底部付近は、蓋坏同様酸化状態で、一部黒斑が認められる。これは一個体の広口壺に限ったことではなく、したがって偶然生じたのではなく、技術水準をおしはかる指標となりうるものである。窯操業時の焼成部内における、温度分布および酸化状態・還元状態の二者の分布状況については、速断することはできないが、憶測をめぐらすに、焼成技術の未熟さゆえに、窯体内において、床面付近は酸化状態でとどまり、やや上方においては、わずかに還元状態になっていたのではないか。その結果として、床面上にある蓋坏、あるいは広口壺底部付近は、酸化状態のままとなり、やや上方に位置した広口壺胴部上半は還元状態になったのではないだろうか。



第32図 12号窯跡実測図

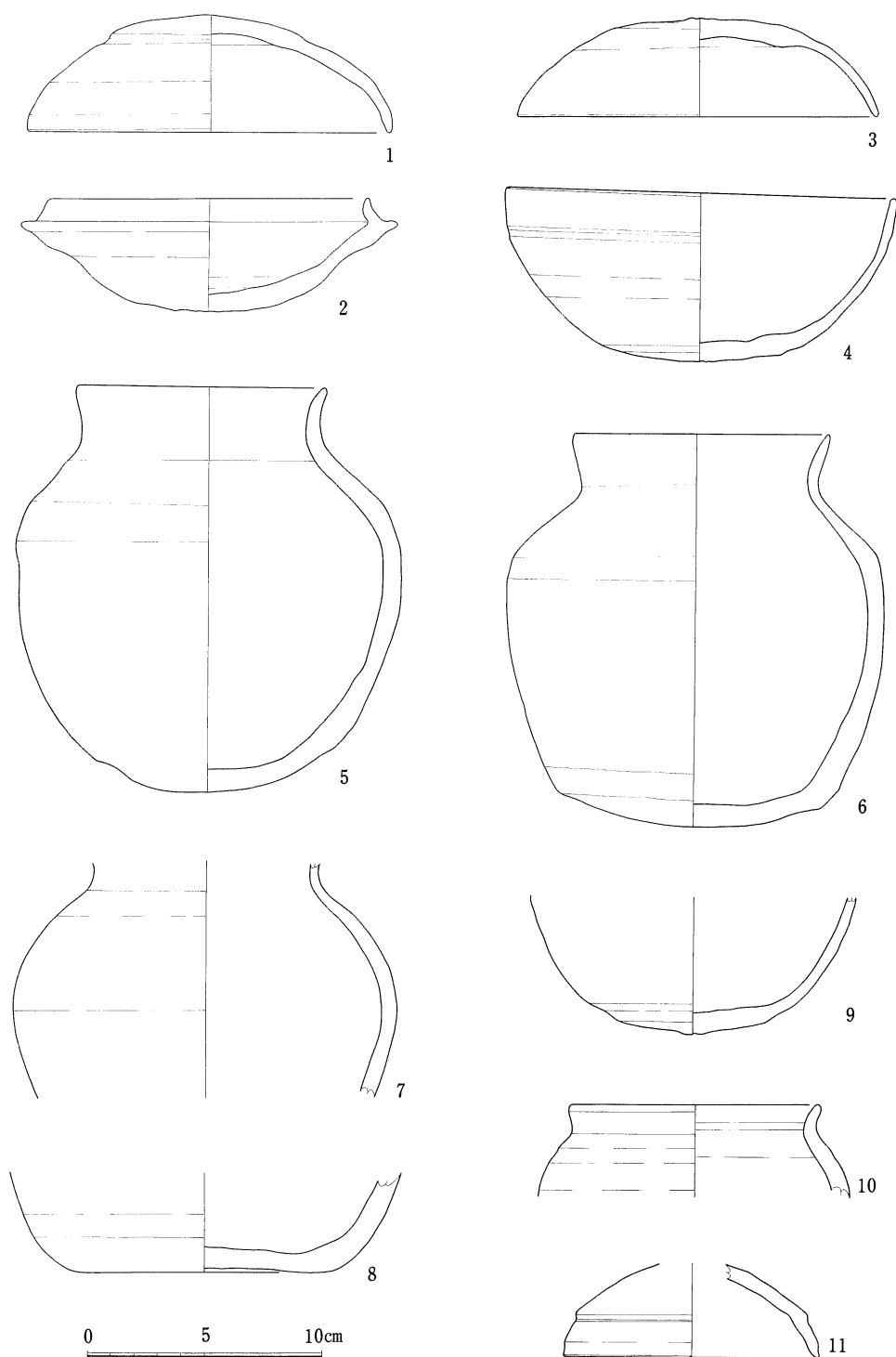
12号土層説明

1. 暗褐色土 粘性のある褐色ローム土を主体とし、暗褐色土・砂質土を混じえる
2. 暗褐色土 粘性のある褐色ローム土を主とする層
3. 淡褐色土 粘性のある褐色ローム土を主体とし、砂質地山の5～10ミリ大の小ブロックをまばらに含む
4. 淡黄褐色土 粘性のある褐色ローム土中に白色の砂質地山粒・小ブロックを多く混じえる
(ローム地山中の小礫を多く含む)
5. 淡黄褐色土 4層と同質の土を主体とするが、赤色及び淡灰色の窯壁片をまばらに含む
6. 黄褐色土 砂質地山の大ブロックからなる
7. 淡褐色土 褐色ローム土・砂質地山粒・有機質土を混合した層
8. 淡褐色土 7層に近似するが、有機性やや強く、また焼土をまばらに含む
9. 淡黄褐色土 有機質土とローム土との混合土中に白色地山ブロックを多く含む
10. 暗褐色土 炭化物・焼土と白色砂質地山との混合土(10a)と、
・淡黄褐色土 土色地山崩壊土(10b)との瓦層
11. 暗黄褐色土 白色地山崩壊土を主体とし、黒色有機質土を混じえる
12. 淡黄褐色土 やや黄味がかった白色地山ブロックからなる
13. 暗褐色土 炭化物を主体とした、白色地山崩壊土との混合土
14. 黄褐色土 白色地山崩壊土とローム土との混合土
15. 淡黄褐色土 14層に近似するが、焼土ブロックを多く含む
16. 淡赤褐色土 白色地山崩壊土とローム土との混合土中に、白色地山小ブロックと焼土粒・炭化物をまじえた土を
主体とし、窯壁ブロックを多く含む
17. 暗褐色土 基本的には16層の主体と同じであるが、炭化物を多く含み、黒味強い
18. 暗褐色土 17層に近似するが、焼土でブロックを若干含む
19. 暗褐色土 17層に近似するが、炭化物をより多く含む
20. 黒色土 炭化物の中に須恵器、焼台を多く含む。焼土は比較的少ない
21. 黒褐色土 炭化物を主体とし、地山粒・焼土粒をまばらに含む
22. 赤褐色土 焼土層。しまりを欠く
23. 淡褐色土 ローム土と思われるやや粘質の褐色土を主体とし、白色地山粒・炭化粒を若干含む

また、本窯跡出土の製品の胎土は、特徴的であり、それは、酸化した場合は赤褐色の、還元した場合は黒色の1mm前後の粒子が認められることである。この粒子の実体は不明であるが、本窯跡の製品を識別するのに有効であるかもしれない。なお、図示していないが、甕の破片の出土も認められ、内面の同心面文は、わずかにナデられている程度である。焼成は、他の遺物と同様、甘いものが目立ち、灰色を呈するもの、褐色を呈するものがある。

これらの年代的位置づけについては、出土資料数も少なく、広口壺については近隣からの出土も認められないので、蓋坏にある程度頼らざるを得ない。しかし、土器単体のみで、狭い時期に限定できるかどうかとも検討しなければならないところである。一応、蓋坏から判断して、6世紀後半から7世紀前半の時期を与えておきたい。本県において、最古の須恵器窯と位置づけられるものである。

現段階において、県内最古と位置づけられる須恵器窯が、この地に築かれた背景、あるいは奈良時代に入り、本窯跡と近接した箇所で作業が開始される、永田、不入窯との関係の有無等今後、検討していくべき課題は多いと言えよう。



第33図 12号窯跡出土遺物実測図

2. 台地上の調査

1) 古 墳

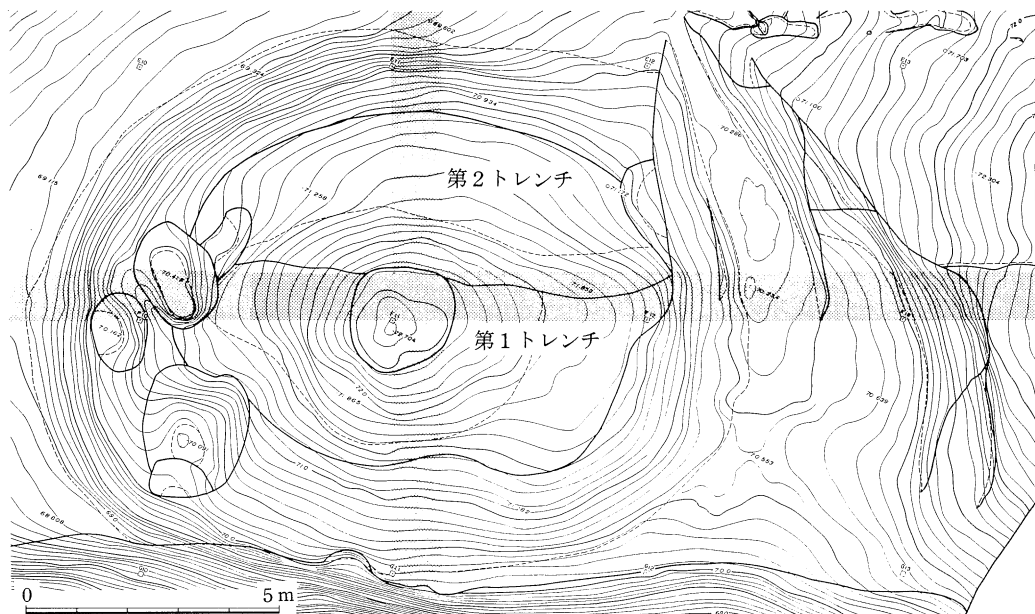
今回調査した、古墳は三基である。その内訳は円墳1基、方墳2基で、いずれも遺存状況は芳しくなかった。繰り返し述べてきたように、南側は、後世の切り通しにより欠失しており、また、北側は、道路状遺構による削平を受けている。円墳は、丘尾切断ののち、地山を半球形に整形したのち、盛土している。

円墳および、方墳1基では、主体部が検出されたが、出土遺物はなく、また、周溝からも良好な遺物の出土はなかった。したがって、これら3基の古墳の時期については不明である。横穴群との関係、また、須恵器窯との関係をいかに理解するかが、問題であるが、残念ながら、不明瞭といわざるを得ない。

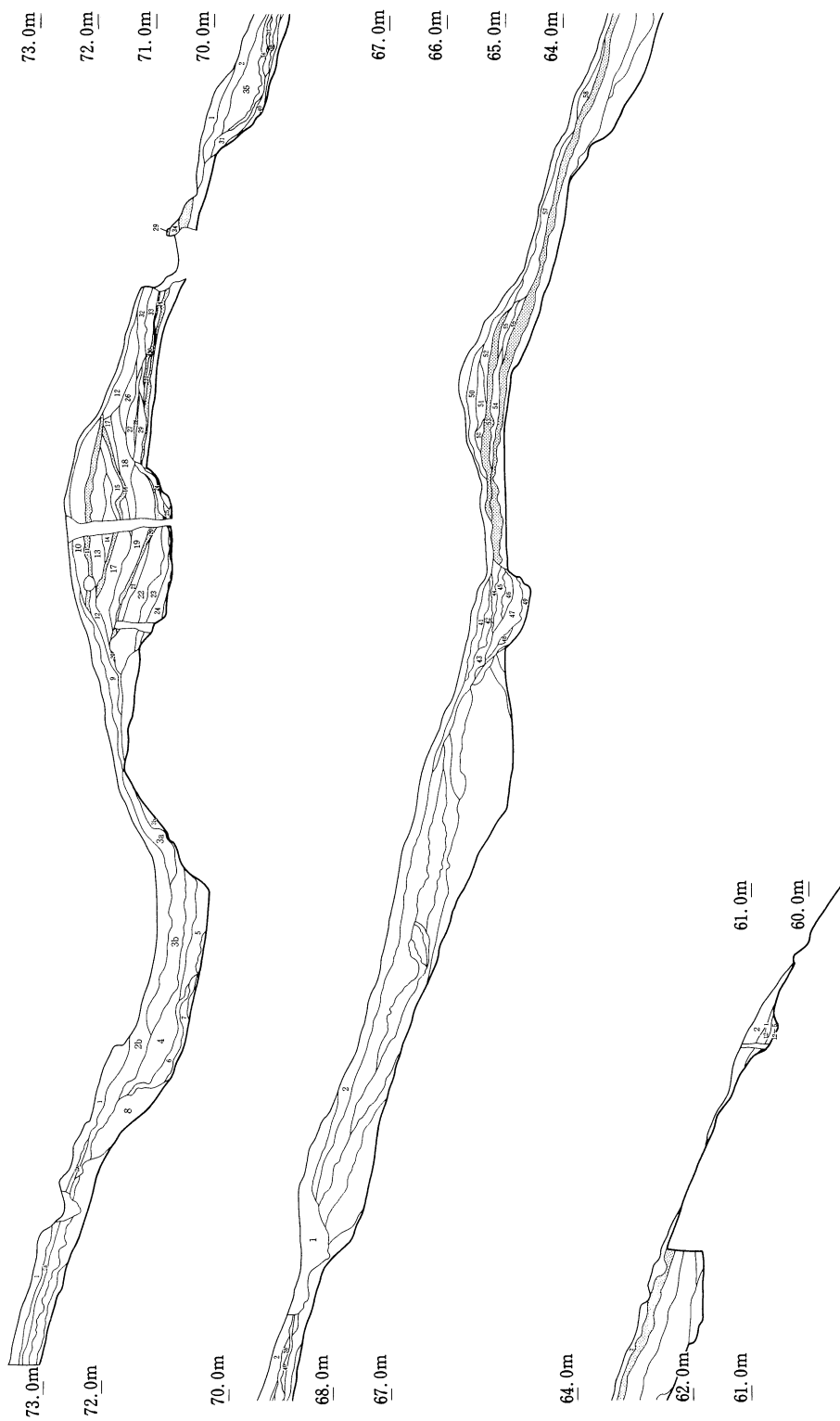
特にまとまった遺物の出土はなかったが、墳丘から、土師器の小片及び、須恵器広口壺の頸部の破片が出土している。

1号墳

円墳である。周溝は、東の丘尾切断部分で捉えることができたが、それ以外の部分では、明瞭には検出されなかった。盛土の状況は、図示した通りである(なお第1トレンチは、1号墳と2号墳の墳頂を通るように設定してあるので、2号墳の東西方向の数面図も連続する形で掲載してある)。東側での丘陵を大きく切り通し、西側ではわずかに地山を整形しているのがうかがえ、当初、全体を半球形に整形し、その後墳丘を盛ったものと考えられる。



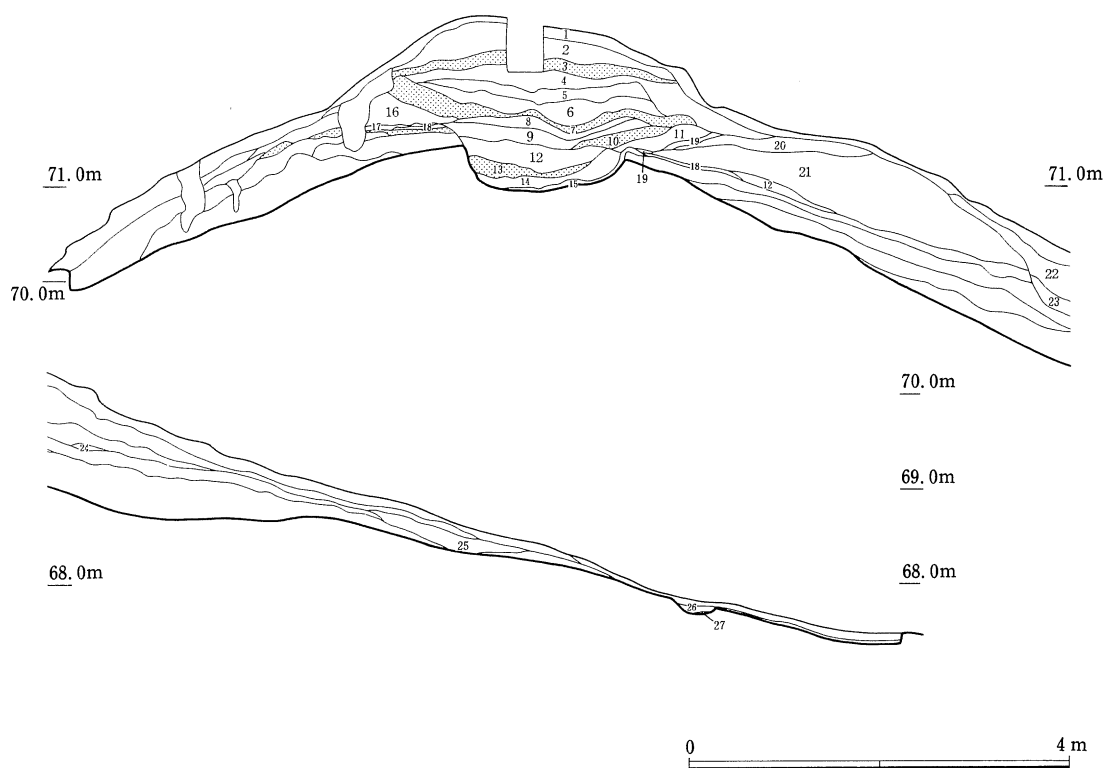
第34図 1号墳 墳丘測量図($s = 1/150$, トーン部はトレンチ)



第35図 第1トレンチ実測図($s = 1/120$)

第1 トレンチ

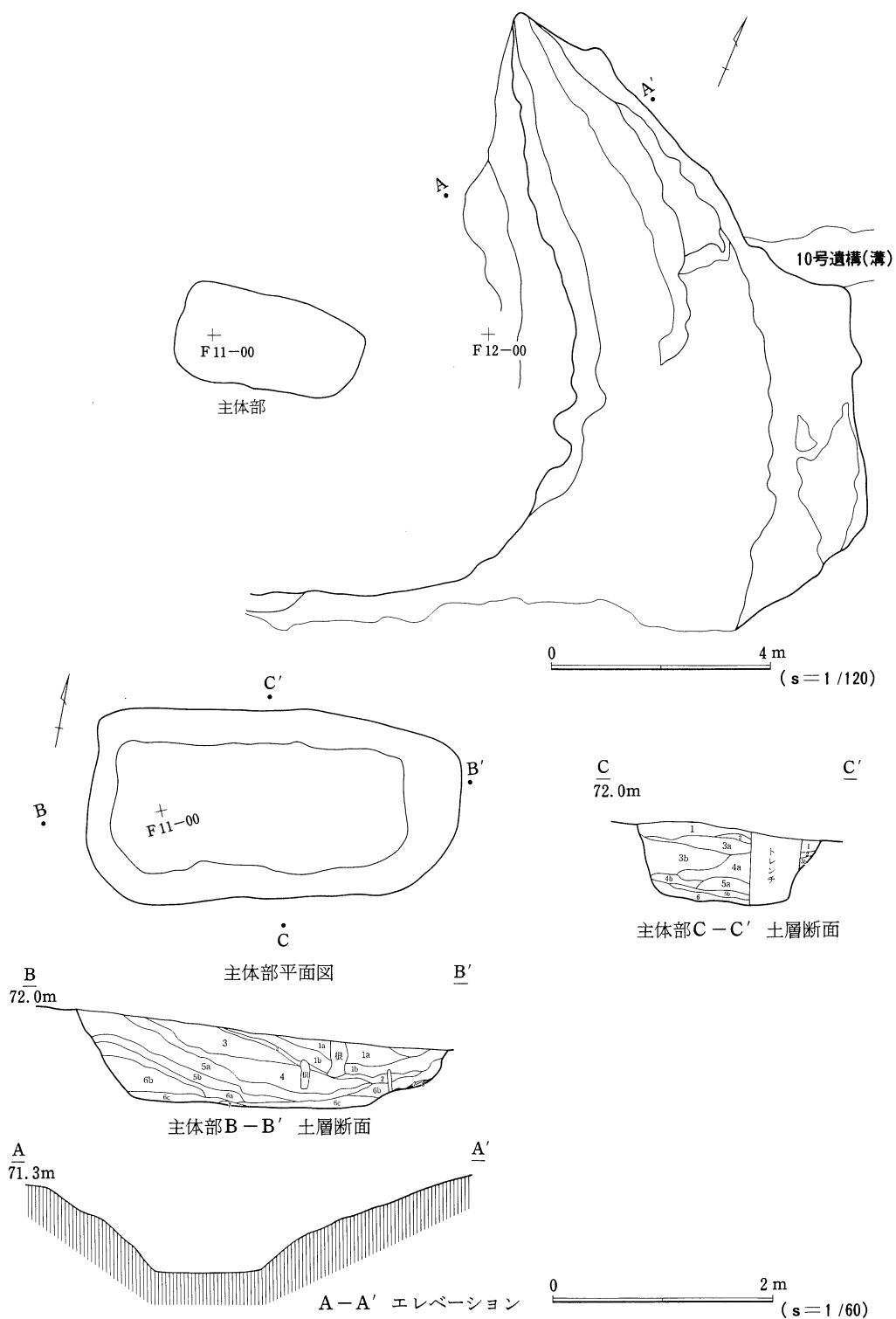
1. 暗褐色土 ローム小ブロックをまばらに含む。新しい盛土
2. 暗褐色土 本来の表土。a層は上に1層がのったために有機性が強く、b層に比べ黒味がかかる。ローム粒を若干含む
3. 黒褐色土 有機質土を主体とする。a層はb層に比べローム土の影響を強く受け、褐色味やや強く、粘性大
4. 暗黄褐色土 有機質とローム土との混合土。淡黄褐色砂粒を霜降り状に、ローム小ブロックを若干含む
5. 灰黄褐色土 ローム崩壊土を主体とし、ローム粒・砂粒をまばらに含む。しまりあり
6. 灰褐色土 黒色有機質土を主体とするローム崩壊土との混合土。黒色土を部分的に、ロームブロックを若干含む。しまりを欠く
7. 暗黄褐色土 ローム土を主体とする有機質土との混合土。ローム小ブロック・淡黄褐色砂質ブロックを多く含む
8. 淡黄褐色土 ローム崩壊土を主体とし、淡黄褐色及び白色砂粒を多く含む。しまりあり
9. 褐色土 ローム土を主体とし、有機質土を若干含む
10. 褐色土 ローム土
11. 暗褐色土 有機質土を主体とする、ローム土との混合土。旧表の可能性あり
12. 褐色土 ローム土
13. 褐色土 ローム土中に白色砂質粒をまばらに含む
14. 褐色土 ローム主体層。粘土小ブロックを若干含む
15. 淡褐色土 13層に近似するが、白色砂質粒増え、ブロックとしても含まれる
16. 褐色土 ローム土を主体とし、有機質土をまじえる。
17. 淡黄褐色土 ローム土と砂質土との混合土。砂質ブロックを多く含む
18. 淡褐色土 15層に近似するが、砂質ブロックを多く含み、暗褐色土を斑状に含む
19. 淡黄褐色土 砂質地山主体層。粘土ブロックを多量に含む
20. 暗褐色土 有機質土中に、粘土・砂質土ブロックをまばらに含む
21. 淡黄褐色土 19層に近似するが、ブロックが大型化する。有機質土を帯状に含む
22. 淡黄褐色土 21層に近似するが、ブロックさらに大型化する
23. 暗黄褐色土 有機質土・ローム土・砂質土の混合土。砂質ブロック含む
24. 暗黄褐色土 有機質土・ローム土・砂質土の混合土。砂質ブロックを多く含む。23層に比べ有機性やや弱い
25. 灰褐色土 灰色粘土と砂質土との混合土。粘土をブロック状に含む
26. 淡褐色土 18層に近似するが、砂質土多い
27. 灰黄褐色土 ローム土・粘土・砂質土の混合土。砂質ブロックをまばらに含む
28. 暗褐色土 砂質ブロックを若干含む
29. 灰黄褐色土 24層に近似
30. 暗褐色土
31. 灰色土 灰色粘土(地山)からなる
32. 淡褐色土 23層に近似するが、砂質土をより多く含む
33. 淡黄褐色土 白色地山土主体
34. 淡黄褐色土 淡黄色地山崩壊土からなる
35. 暗褐色土 有機質土と地山崩壊土との混合土。黄褐色の山砂小ブロック・炭化粒を若干含む
36. 黒褐色土 有機質土を主体とする地山崩壊土との混合土
37. 灰黄褐色土 地山崩壊土を主体とする有機質土との混合土
38. 黒褐色土 33層に近似するが、地山の影響がやや強く明るい
39. 灰黄褐色土 地山崩壊土を主体とし、黄褐色山砂ブロック(鉄分が固まったもの)をまばらに含む
40. 淡黄褐色土 地山崩壊土からなる
41. 暗褐色土 黒色土とローム土との混合土。ローム土の影響強く、やや明るい
42. 暗褐色土 黒色土とローム土との混合土。やや黒味がかかる
43. 暗褐色土 黒色土とローム土との混合土
44. 黒褐色土 黒色有機質土を主体とする、ローム土との混合土
45. 暗褐色土 黒色土とローム土との混合土
46. 黒褐色土 黒色有機質土を主体とし、ローム土を混合する。炭化粒をまばらに含む
47. 暗褐色土 ローム崩壊土を主体とし、崩壊土をまじえる
48. 暗褐色土 44層と46層との漸移層
49. 暗黄褐色土 崩壊土を主体とし、黒色有機質土を部分的に含む
50. 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、砂質地山をまじえる。砂質地山ブロックを若干含む。盛土
51. 暗褐色土 有機性強く、ローム粒は少ない
52. 暗黄褐色土 砂質地山と暗褐色土との混合土中に地山ブロックをまばらに含む
53. 暗褐色土 地山粒等を若干含む。有機性比較的強い。比較的しまりあり
54. 暗黄褐色土 暗褐色土とローム土との混合土。ややしまりを欠く
55. 黄褐色土 地山層と近似するが、地山ブロックを特に多く含む
56. 暗褐色土 地山と盛土の漸移層
57. 黄褐色土 ロームを主体とする盛土
58. 黄褐色土 54層に近似するが、地山粒はやや少ない。盛土が流出したものか



第36図 第2トレンチ実測図(s=1/80)

第2トレンチ

- | | | | |
|-----------|--------------------------------------|-----------|--|
| 1. 暗褐色土 | 本来の表土 | 15. 灰褐色土 | 灰色粘土と砂質土との混合土。
粘土をブロック状に含む |
| 2. 褐色土 | ローム土 | 16. 淡黄褐色土 | 8層に近似する |
| 3. 暗褐色土 | 有機質土を主体とするローム土との混合土 | 17. 暗褐色土 | |
| 4. 褐色土 | ローム土中に白色砂質粒をまばらに含む | 18. 灰色土 | 灰色粘土(地山)からなる |
| 5. 褐色土 | ローム主体層、粘土小ブロックを若干含む | 19. 淡黄褐色土 | ローム土と砂質土との混合土中に
砂質ブロックを多く含む |
| 6. 褐色土 | 4層に近似するが、白色砂質粒増え、
ブロックとしても含まれる | 20. 暗褐色土 | 21層に近似するが、砂質小ブロックを
まばらに含む |
| 7. 褐色土 | ローム土を主体とし、有機質土をまじえる | 21. 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とした、ローム土との混合土。
黒色土を水平のスジ状に多く含む |
| 8. 淡黄褐色土 | ローム土と砂質土との混合土。
砂質ブロックを多く含む | 22. 淡褐色土 | 墳丘の崩壊流出土。
ローム粒はほとんど含まない均一な層 |
| 9. 淡褐色土 | 6層に近似するが、砂質ブロックを多く含む。
暗褐色土をブチ状に含む | 23. 淡灰褐色土 | 有機質土を主体とするローム系
崩壊土との混合土。しまりを著しく欠く |
| 10. 暗褐色土 | 有機質土と砂質土との混合土 | 24. 暗褐色土 | 有機質土を主体とする |
| 11. 暗褐色土 | 10層に近似するが、有機性弱く、
砂質ブロックをまばらに含む | 25. 暗褐色土 | 22層に近似するが、有機性やや強く、
しまりがある |
| 12. 淡黄褐色土 | 砂質地山主体層。粘土ブロックを多量に含む | 26. 淡灰褐色土 | 粘土ブロックを若干含むローム質土を
主体とする有機質土との混合土 |
| 13. 暗褐色土 | 有機質土中に、粘土・砂質土ブロックを
まばらに含む | 27. 淡黄褐色土 | 26層に近似するが有機性弱い |
| 14. 暗黄褐色土 | 有機質土・ローム土・砂質土との混合土。
砂質ブロックを多く含む | | |



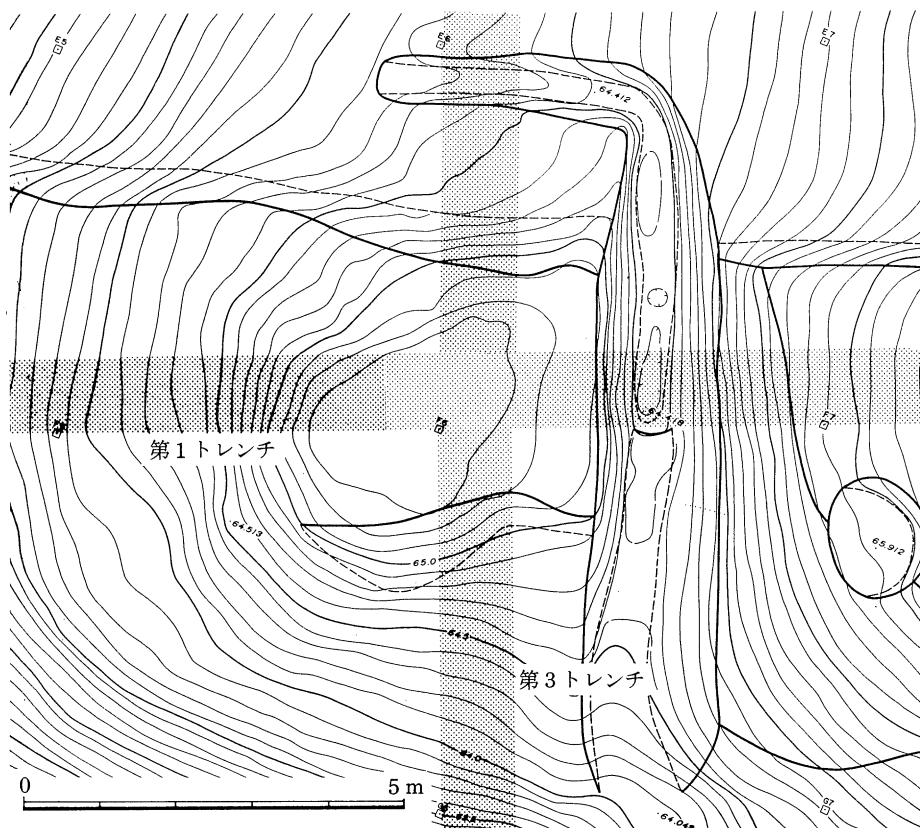
第37図 1号墳実測図

1号墳主体部B-B' 土層断面

1. 淡黄褐色土 砂質地山主体層。粘土ブロックを多量に含む
bはaに比べややブロックが多い
2. 暗褐色土 有機質土中に粘土・砂質土でブロックをまばらに含む
3. 淡黄褐色土 1層に近似するが、ブロックが大型化する。
有機質土を帯状に含む
4. 淡黄褐色土 3層に近似するが、ブロックはさらに大型化する
5. 暗黄褐色土 有機質・ローム土・砂質土の混合土。
砂質ブロックを多く含む
aはbに比べ有機性強く、こげ茶色を呈し、粘性が強い。またブロックが極めて大きい
bはやややわらかい
6. 暗黄褐色土 有機質土・ローム土・砂質土との混合土。
砂質ブロックを多く含む。
5層に比べ有機性がやや弱い
bはa、c層に比べ砂質土多くやや明るい。
a層は5層に近い
7. 灰褐色土 灰色粘土と砂質土との混合土。
粘土をブロック状に含む
8. 灰黄褐色土 砂質土・ローム土との混合土。有機質土を部分的に含む。ブロックは含まない

1号墳主体部C-C' 土層断面

1. 淡黄褐色土 砂質地山主体層。粘土ブロックを多量に含む
2. 暗褐色土 有機質土中に粘土、砂質土ブロックをまばらに含む
3. 淡黄褐色土 1層に近似するがブロックが大型化する。
有機質土を帯状に含む
aはbに比べやや有機性強い
4. 淡黄褐色土 3層に近似するがブロックがさらに大型化する
bはaに比べややブロックが小さい
5. 暗黄褐色土 有機質土・ローム土・砂質土の混合土。
砂質ブロックを多く含む
aはbに比べ有機性強くこげ茶色を呈し、粘性が強い。またブロックが極めて大きい
bはやややわらかい
6. 暗黄褐色土 有機質土・ローム土・砂質土との混合土。
砂質ブロックを多く含む。5層と比べ、有機性やや弱い



第38図 2号墳 墳丘測量図(s=1/100, トーン部はトレンチ)

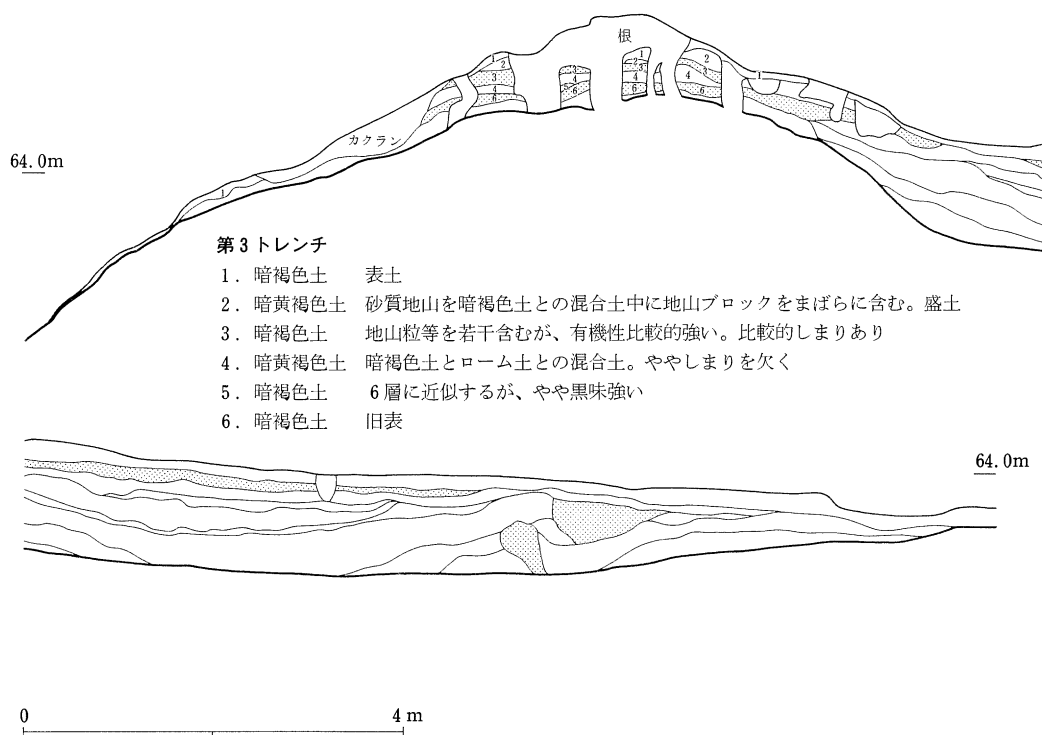
主体部は、墳頂のほぼ直下で検出された。主体部は、主軸をほぼ東西にもち、木棺直葬であったと見られるが、土層には、必ずしも反映していない。長軸が約3.3m、短軸が約1.7mである。副葬品の検出はなかった。

なお、残存していた墳丘の規模は、南北約11m、東西約14mで卵形を呈する。

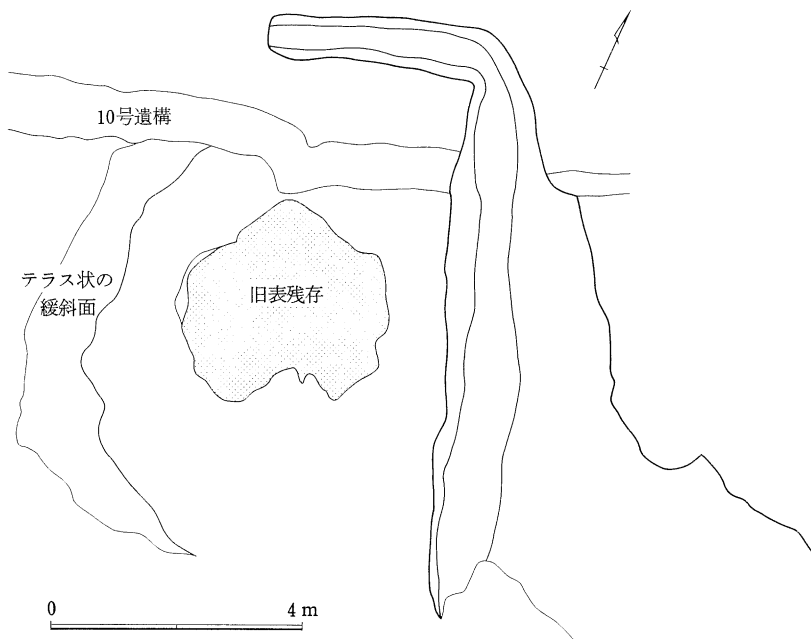
2号墳

方墳である。周溝は、東辺および北辺の東半が検出されたが、他の部分では検出されなかった。北辺の周溝は、必ずしも明瞭ではない。図に見る通り、盛土の残存も少なく、後世の削平を受けているものと考えられる(第1トレンチについては1号墳参照)。1号墳同様、ある程度地山の整形を行ってから、盛り土を行ったものと思われる。旧表は、ほぼ中央部分でわずかに残存しているのが認められ、西側においては、テラス状の緩斜面が認められた。主体部は検出されず、また他にも良好な遺物の出土はなかった。

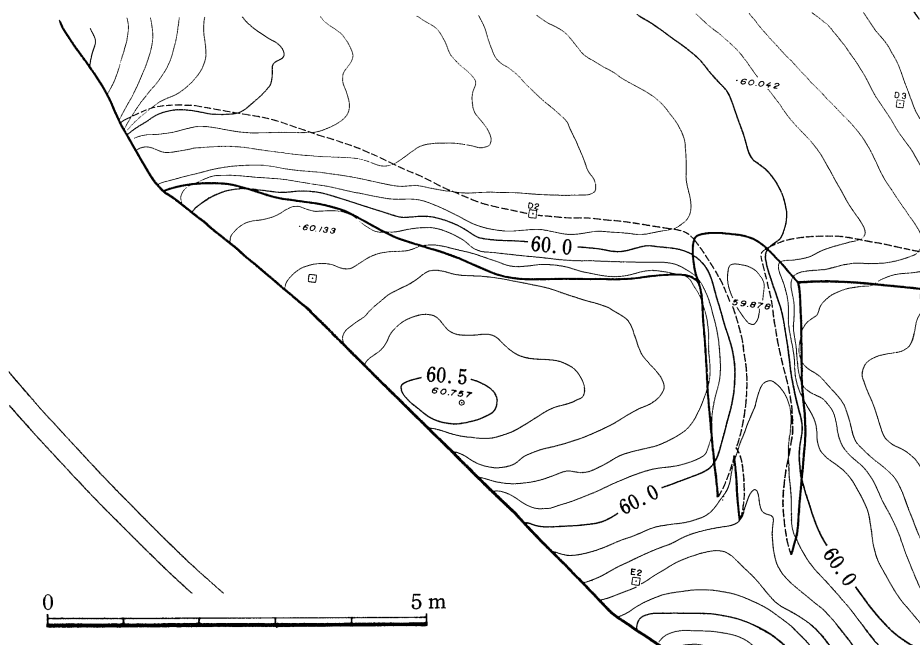
全体の規模については、推測の域を出ないが、周溝の内辺が1辺約10mの方形を呈するものと考えられる。ただし、西側で見られた、テラス状の緩斜面の近くに、周溝が存在したとすると、東西辺は、やや短くなる可能性がある。



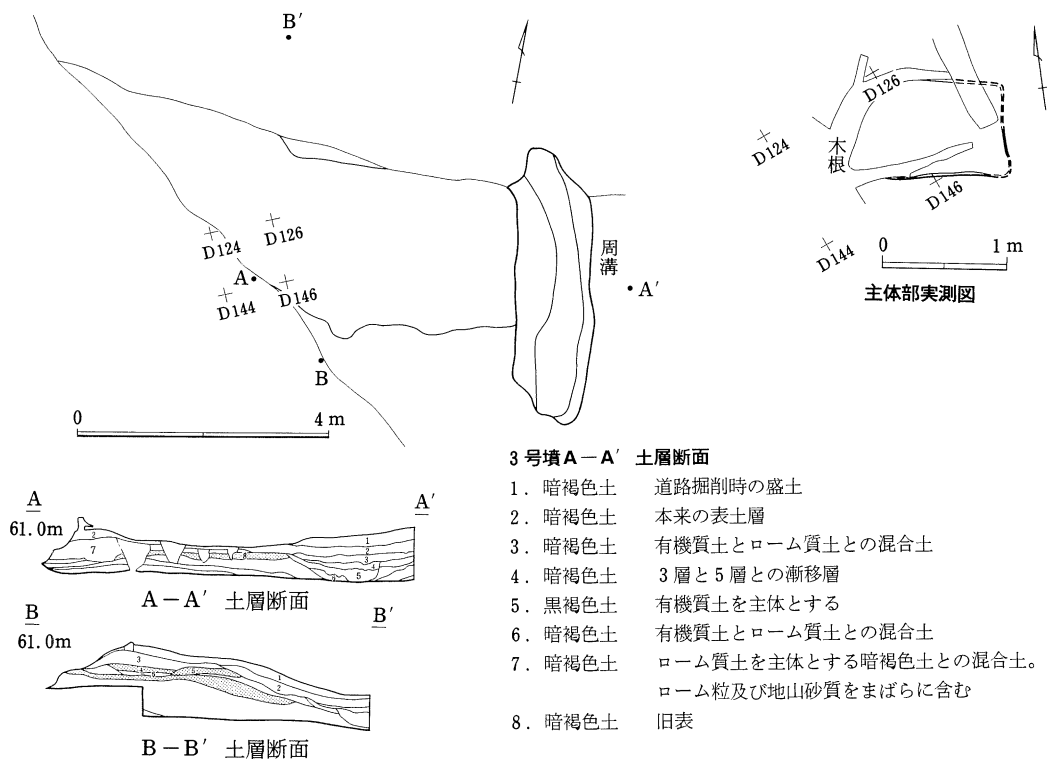
第39図 第3トレンチ実測図(s = 1/80)



第40図 2号墳実測図(s = 1 / 120)



第41図 3号墳 墳丘測量図(s = 1 / 100)



第42図 3号墳実測図

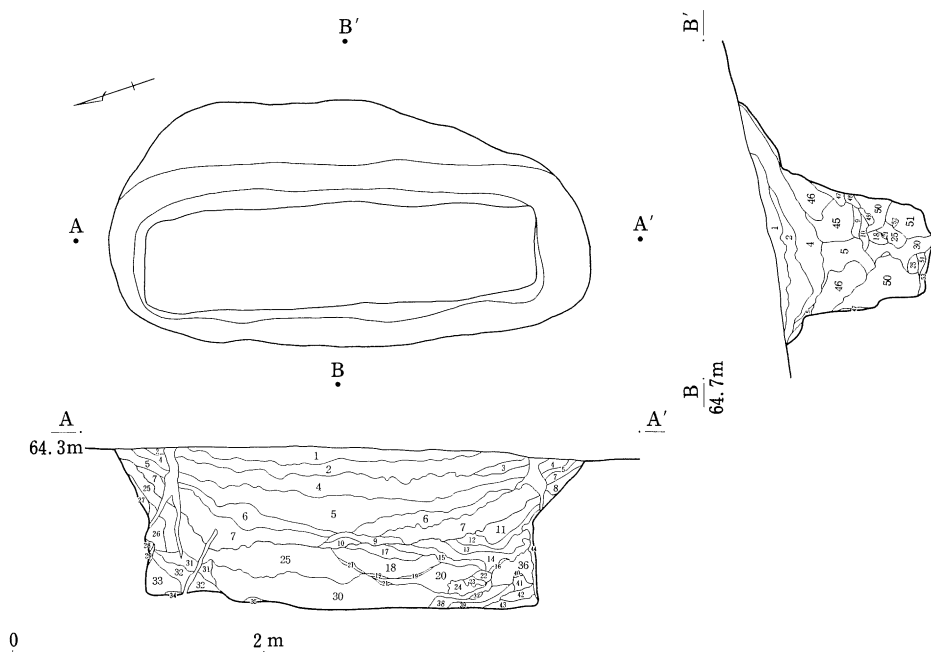
3号墳

調査区の西寄りに所在する古墳である。南西部は切り通しにより欠失しており、東辺の周溝約4mの部分のみが検出された。盛土はほとんど残存していなかった。

主体部は、切り通しの部分近くで検出されたが、木根による攪乱がひどく、盛土もほとんど残存していない状況であったため、わずかに痕跡が確認できる程度であった。主軸をほぼ東西にもち、確認し得る範囲で、東西約1m、南北約70cmの規模であった。この主体部が、墳丘のほぼ中央に位置すると仮定すると、1辺約8mに復元し得る。

この主体部および、周溝・墳丘からは良好な遺物の出土は認められなかった。

なお、この古墳の北側から、大和田窯の製品と思われる甕の破片が比較的集中して検出されている。(図版18を参照されたい。)



2) その他の遺構

第43図 13号土墳墓実測図

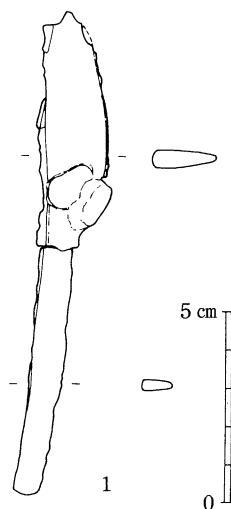
13号土墳墓

2号墳の北方約5mの所に位置する。周溝等は検出されず単独の土墳墓と考えられる。

主軸をほぼ南北にもち、上端で長さ約4m、幅2mを計る木棺直葬と思われるが、土層図を見る限りでは、その痕跡も明瞭には捉えられない。

この土墳墓からは図示したような刀子が一点出土した他には、遺物の出土は認められなかった。

主体部の規模そのものについては、1号墳の主体部に劣らないものであるが、時期的な対比も困難な状況であり、他の古墳ならびに横穴群との比較検討もし難いのが残念である。



第44図 13号土墳墓出土鉄製品実測図

19号住居跡

調査区の北西端の緩斜面に位置する。土の流出により、北東のコーナー付近の一部のみ検出された。柱穴は検出されず、またカマド等の構築も認められなかった。良好な遺物の出土はなかったが、胎土中に黒色粒を含む、須恵器の坏の破片が出土している。(工房址のような性格であったかもしれない。)ただし、これは隣接する20号遺構(溝)覆土中出土の遺物と接合しており覆土の安定性には疑問があり、この遺構に伴うとは判定し難い。

13号土壌A—A' 土層説明

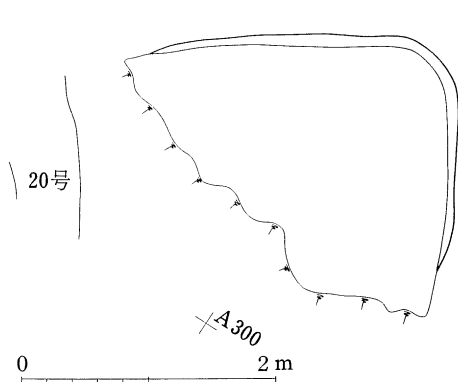
1. 暗褐色土 ローム質土と暗褐色土との混合土
2. 暗褐色土 褐色味の強い斑が認められる
3. 暗褐色土 2層と4層との漸移層
4. 黒褐色土 有機質を多く含む
5. 暗褐色土 有機質土を主体とするローム土との混合土
6. 暗褐色土 有機質土とローム土との混合土。5層、7層に比べローム土の影響が強く明るい
7. 暗褐色土 有機質土を主体とするローム土との混合土。5層よりも黒味が強い
8. 暗褐色土 有機質土とローム土との混合土。色調的には6層に近似するがやや明るい
9. 暗褐色土 暗灰褐色のローム崩壊土をブチ状に含む
10. 暗褐色土 9層に近似するが、ローム土の影響土
11. 灰黄褐色土 ローム土と暗褐色土との混合土。粘性、しまりあり
12. 黄褐色土 ローム土主体層。ローム小ブロックをまばらに含む
13. 暗褐色土 ローム土と暗褐色土との混合土。黒褐色をブチ状に含む
14. 黄褐色土 ローム土主体層。ローム粒を霜降り状に含む
15. 灰黄褐色土 ローム土と暗褐色土との混合土。黒色土をブチ状に含む
16. 暗褐色土 有機質土中にローム崩壊土を混合する。しまりを欠く
17. 灰黄褐色土 ローム土を主体とし有機質土をブチ状に含む
18. 黄褐色土 ローム土主体層
19. 暗褐色土 有機質土を主体としたローム土との混合土。しまりを欠く
20. 黄褐色土 ローム土を主体とした暗褐色土との混合土。ローム小ブロックを若干含む
21. 黒褐色土 有機質土主体層。しまりを欠く
22. 暗褐色土 有機質土中にロームブロックをまばらに含む
23. 黒褐色土 有機質土中にローム粒を多く含む
24. 暗褐色土 黒色土粒とローム粒とが混合したもの。しまりを欠く
25. 黄褐色土 ローム崩壊土からなる。ローム粒をまばらに含む
26. 暗黄褐色土 ローム崩壊土中に暗褐色土をブチ状に含む
27. 黄褐色土 ローム崩壊土
28. 褐色土 砂質。地山の崩壊土
29. 黒褐色土 有機質土。しまりを欠く
30. 暗黄褐色土 ローム土を主体とする暗褐色土との混合土。ロームブロック・ローム粒をまばらに含む。しまりを欠く
31. 暗黄褐色土 色調は30層と同じ。非常にしまり良い。27層に近似
32. 黄褐色土 ローム崩壊土と暗褐色土との混合土中に5ミリ大のローム粒を多く含む。しまりあり
33. 黄褐色土 色調的には32層に近い。ロームブロックをまばらに含みしまりを欠く
34. 暗黄褐色土 ローム土を主体とする暗褐色土との混合土。ロームブロックを若干含む
35. 黄褐色土 ロームブロックからなる
36. 黄褐色土 ローム崩壊土中にローム粒を多く含む
37. 黄褐色土 ローム崩壊土を主体とした、暗褐色土との混合土
38. 黄褐色土 ローム崩壊土中にロームブロックをまばらに、暗黄褐色土を若干含む
39. 黄褐色土 ローム崩壊土
40. 黒褐色土 有機質土。しまりを欠く
41. 暗黄褐色土 ローム土と暗褐色土との混合土。ローム粒を多く含む。しまりを欠く
42. 黄褐色土 ローム崩壊土。43層よりも暗い
43. 黄褐色土 ローム崩壊土。しまりがある
44. 黒褐色土 有機質土。しまりを欠く

13号土壌B—B' 土層説明

A—A' と重複する土層の説明は省略

45. 暗褐色土 ローム土を主体とする暗褐色土との混合土。ローム粒・粘土小ブロックを若干含む
46. 暗褐色土 46層に近似するが、やや明るく、ローム粒等は含まない
47. 黄褐色土 ローム崩壊土
48. 暗黄褐色土 有機質土とローム土との混合土。しまりを欠く
49. 暗黄褐色土 ローム崩壊土を主体とし、有機質土をまばらに含む
50. 暗黄褐色土 ローム土と有機質土との混合土。51層に比べやや暗い
51. 暗黄褐色土 50層に近似するがやや明るく、ローム粒・粘土小ブロックをまばらに含む
52. 黒褐色土 有機質土。しまりを欠く
53. 暗褐色土 粘性強く、しまりを欠く

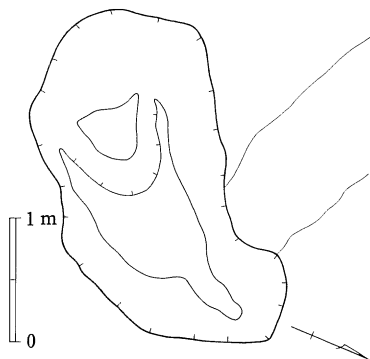
出土した坯は、図示していないが、上述のように、黒色粒子を顕著に含んでおり、焼成はやや甘い。身になるか蓋になるかは、微妙な形態である。端部が欠損していることにもよるが、大きさからいっても、身と蓋の逆転する時期前後のものかもしれない。窯の調査においては、同形態の製品は見られなかったが、本窯跡で生産したものと考えてまず間違いないと思われる。



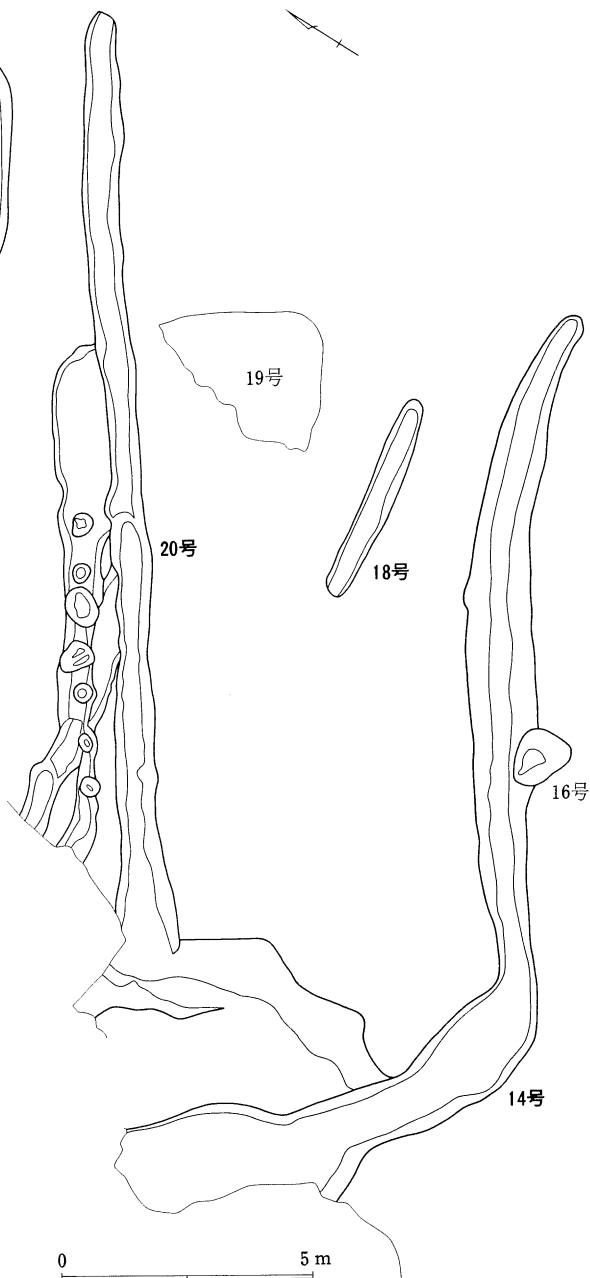
第45図 19号住居跡実測図(s = 1 / 60)

その他の遺構

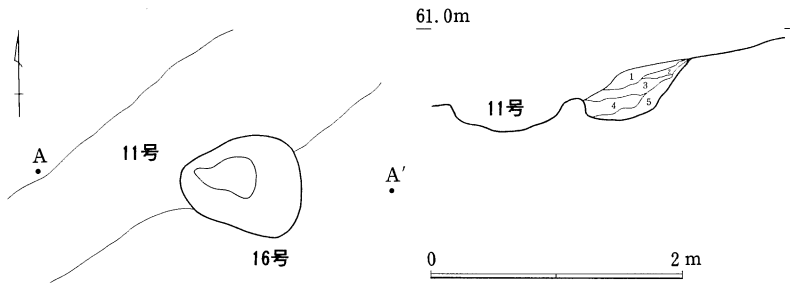
これまで報告してきた遺構の他に、以下に図示したような遺構が検出されている。調査区全体の中に占める立地等については、全体図を参照していただきたい。



第46図 17号土坑実測図



第47図 14・18・20号遺構実測図(s = 1 / 150)



第48図 16号土坑実測図($s = 1/60$)

16号土坑土層説明

1. 暗黄褐色土 ロームを主体とする黒色土との混合土
2. 黄褐色土 ロームを主体とする層。炭化粒を若干含む
3. 暗黄褐色土 1層に近いが、有機質の影響がより強く、黒味を増す
4. 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土を混合する。1層に比べ黒味が強い。炭化物を多く含む
5. 黄褐色土 ローム崩壊土からなる。ロームブロックを若干含む

14号・20号は、いずれも溝である。14号は大きく屈曲しているのに対し、20号は比較的直線である。この20号については、同一線上で、数回の掘り返しが行われたようで、錯綜している部分がある。一部、円形の小ピットが連続する部分があるが、これは、車輪が通った痕跡であるかもしれない。

16号・17号は、性格不明の土坑である。16号からは、図示し得るものはなかったが、土師器の破片と思われる遺物が出土している。17号からは遺物の出土はなかった。

なお、全体図中遺構番号を付して、報文のない遺構については、いずれも、近世以降の溝・道路であり、特徴的な形態あるいは遺物の出土もなく、記述を割愛した。

以上が、今回の調査による成果である。これら成果のうち、横穴群と窯跡に関しては、次章において、若干のまとめと問題点の整理をしておくことにする。本来、論点は多岐にわたるべきものであるが、報告者の遠く及ぶところではないので、視点については偏ってしまう結果になることについて、あらかじめお断りしておきたい。

小結にかえて

1. 養老川流域における横穴研究の現状と課題

1) はじめに

今回調査した大和田横穴群をはじめとして、市原市内に横穴群は22箇所確認されている。中でも分布の集中が認められるのは養老川流域である。ここでは、まず上総地方における横穴研究史を概観し、市内における横穴の分布状況を提示し、今後の課題について私見を述べてみることにする。なお、研究史については、全国的な研究を切り離して論じることにはできないが、ここでは、特に上総地方を中心として見ていくこととし、最後に大和田横穴群について触れたい。

2) 上総地域における横穴研究略史

上総地域において、横穴について初めて報告されたのは黒木安雄「上総地方洞穴及び私考」(『東京人類学会報告』第2巻第9号、1886)においてである。田中、押日、国府関の3箇所の横穴について報告されており、田中のものは「穴居」とされ、押日のものは「塚穴」とされている。養老川流域については、この黒木の報告の半年後に金田樞太郎「上総国市原郡内横穴報告」(『東京人類学会報告』第2巻第15号、1887)が報告されている。ここでは、本納の横穴とともに「柏橋」「馬立字沢辺センゲン山」「真ヶ谷」「宿村字御林」の横穴が略測図とともに報告されているが、その性格については触れられていない。この2つの報告までの段階を、横穴研究の端緒的段階としておく。

明治32年は、大野延太郎「上総国横穴調査」(『東京人類学会雑誌』第15巻第165号、1899)が発表されている。これは「長生郡豊栄村大字米満」及び「山武郡大字金尾字鬼ヶ嶋」の横穴の調査報告である。米満の各横穴については、平面図、断面図および立体的なスケッチが図示されており、鬼ヶ嶋横穴より出土した須恵器のフラスコ形瓶のスケッチが示されている。さらに玄室の横断面形の序列についての考え方が示されている。やや引用が長くなるが以下に記す。

「最初(1)ハ土台水平ニシテ凹穴ナシ(2)ハ左右ニ凹ミタル穴ヲ掘リ穿チタルモノナリ(3)ハ四方ニ縁ヲ附ケタル凹ヲ左側ニノミ附ケタルモノナリ(4)モ同シク左側ニノミ作り附ケタルモノニシテ一方ニノミ縁アリ(5)(3)の形式ニシテ(4)ヨリも一層高キモノナリ(6)ニ至リテハ十分棺形ニ規則正シク作ラレタリ且ツ左右に揃ヘル二個ノ石棺ヲ配置セシ如ク作り附ケタルナリ」

このように、各横穴の玄室の横断形態を六類に分け、その変化について考え方が示されている。これらの変化については「(1)ヨリ(6)に至ル構造ハ通シテ様ナリシモノト思ハルモノナリ」としている。さらに、これら横穴の性格については「自カラ初ヨリ葬穴ノ目的ヲ以テ

造ラレタルモノナリコトヲ疑ハス」とし、その時期については「古墳ト同時期ニ行ハレシ者」としている。ここにおいて、横穴の構造の変化、その時期、性格についての考え方が示されたといえよう。その後当地域においては横穴についての言及はなされていない。昭和に入り、「千葉県史蹟名勝天然記念物第6輯」において「高瀧村外部田横穴」「大和田ノ横穴」「池和田ノ横穴」について報告がなされている。また内藤政光「下総国外部田の横穴に就きて」(『考古学雑誌』第19巻第2号、1935、「下総国」は「上総国」の誤り)においても外部田の横穴について報告されている。二編とも当時の流行であろうか、原始的絵画についての言及が見られるが、前述の大野のような観点をふまえたものではない。

昭和11年、三木文雄「上総国長生郡二宮本郷村押日横穴群の研究」(『考古学雑誌』20巻1、2号、1936)が発表され、その後の上総地方における横穴研究に大きな影響を与えるところとなった。一宮川流域の3群22基をその研究対象とし、構造と形式の上から、7種11類に分類し、その形態の時間的変化について見解を出している。棺床の有無、その形態、位置等の変化から、単葬→二人合葬→多数葬と被葬者数の変化を想定し、形式的変化から質的变化を汲みとっている。さらに、横穴の占位位置に見られる傾向、羨門閉塞等にも言及し、また築造期間については「この横穴の上限を7世紀以前に認めることの出来ないことについては誰しも疑問をもたなからう」とし、下限については「本横穴文化の末期を奈良朝以前の文化に置かなければならない」としている。横穴の形態変化の序列は、かつて大野の示した序列とほぼ逆転する結果となっているが、その点についての言及は見られない。また、被葬者数の変化をどのような歴史的背景の中に捉えるかの言及がない点で、やや説明不足の感があることは否めない。しかし、戦前の横穴研究の到達点として評価すべきものと言える。

戦後は、昭和40年代に入るまで、特に横穴研究の進展はみられなかったが、昭和43年「長生郡一宮川流域の横穴」(『東上総の社会と文化』、上智大学史学会、1968)が発表される。これは東上総の一宮川の各支流ごとの横穴の分布調査に基くものである。700基に及ぶ横穴の概要についてまとめられている。主に玄室内構造に着目して分類し、それと棺床数との関係についての吟味もなされ、「年代的な変化と棺床の数は関係がないように思われる。」と結んでいる。また、被葬者については、「その地方での所謂有力な階級とか官位のある階級のものと考えなくてもよい様に思われてくる」とし、横穴の編年観、被葬者の位置づけについて、慎重な姿勢を見せているとともに、三木の論に対する有効性についても疑義を呈していると言えよう。

市原市内においては、昭和44年に、県立市原高校の郷土クラブにより米沢横穴群の3基が調査され、その実測図も掲載されている(『市原地方史研究』第7号、南総郷土文化研究会、1970)。それまでの諸研究をふまえた上での論考はなされていないが、昭和4年以來の貴重な成果の提示であるといえる。昭和46年には西国吉横穴群の調査が行われた。(『千葉県市原

市西国吉横穴群』、同発掘調査団、1972)。県道拡張に伴う緊急調査で、所在の判明した11基のうち8基について調査が実施され、良好な遺物が出土している。横穴の形態については、これまでの東上総地方における諸論の中で見られてきたような形態とは必ずしも一致しておらず、編年軸上にのせて考えるのも困難であるようなものが多い。この報告の中では、時間的変化について、出土遺物及び横穴構造の両面から検討が加えられている。横穴構造については、その占位位置(上か下か)、「屍床」の位置の相違を時間的変化と見るという前提に立っている。結果的には構造的に時間幅をもつと考えられる複数の横穴から伴出する土器が同時期の様相を示すということになっている。土器のもつ時間幅の中に横穴構造の変化の幅がおさまっていると見るか、横穴の諸形態が、時間的変遷をたどりながらも、かなり併存していたと見るかということになる。また墓前祭祀についても言及されている点など、継承すべき問題点を多く含んでいると言えよう。

橋口定志「千葉県・夷隅地域の横穴についてーその編年的研究ー」(『物質文化』19, 1972)

は、立教大学の分布調査に基づき、各横穴を棺床の位置、構造からA～D類の4類に分類し、それをさらに細分し、全部で9類に分けている。それをさらに、三木と同様に、被葬者数の変化を時間軸として、単数→2人→複数という序列を行なっている。被葬者については「家父長制的世帯共同体」の変質の中で捉えている。一見、明確な図式と言えるが、やはり問題となるのは、被葬者の想定である。それまでの、被葬者の確定し難い状況をふまえて、「夷隅地域においては、被葬者を画一的な視点から見ることはいできない。」としながらも、数的に少ないとされる、A類横穴の被葬者を「真間期に見られる家父長制的世帯共同体の分立が果たされない段階に、家父長層を超越する何らかの力を持つ人間」として考え、B類を「有力な家父長制的世帯共同体の家父長層」、C類を「従属的な在り方を示している家父長制的世帯共同体」、D類については「家父長制的世帯共同体の弛緩の中で生まれてきた地域社会内部の新しい動き」の中で捉えようとしている。現時点においては、家父長が古墳時代の中に出現しているかどうか疑問であり、家父長制を前提とした横穴の編年そのものも検討する必要性が生じていると言えよう。また、ほぼ時を同じくして、東京湾沿岸横穴群所在調査が行われ、市原市内では、安須、浅間山、藪、岩、外部田の各横穴群が調査された。これらについては後に触れる。

野中徹「東京湾東岸における横穴墳について」(『史館』2、1974) は、それまでの上総地域における横穴研究が東上総を中心としていた中であって、西上総を取り上げたものである。市原市域、木更津・君津・富津市域、安房地域の3地域についての特色があげられている。当時の資料上の制約もあって、その特色の把握には、現段階では若干有効性に欠けるきらいがある。副葬品の相違を「埋葬者の身分的な差」と考え、玄室構造の差(大型化、整正化)も同様に身分的な格差と考えている。また「形の変化は時代的な変化を物語るもの」とされている。

昭和52年、市原市岩横穴群の調査が行われた。10基について調査がなされ、時期を比定し得る遺物の出土も見られる。総体的には「上総地方に一般的に見られる横穴群」とされ、時間的には、いずれも7世紀後半～8世紀を中心とするとされている。なお、各横穴の構築順序等についての言及はない。

斉藤忠「長柄町横穴群調査報告」(『長柄町史、研究編(2)』、1977) は、長柄町に所在する300基を越す横穴群についての報告である。玄室形態を家型、蒲鉾型、ドーム型の3類に分類し、家型を先行形態とし、のち蒲鉾型とドーム型が併行するとされている。年代については、7世紀後半から8世紀前半としている。また、被葬者や集落、さらには生産基盤への言及もあり、提起している問題は包括的で多岐にわたっている。今後、それらについての検証を行っていく必要があるといえる。

昭和53年から2年度にわたり山崎横穴群の調査が行われた(及川淳一『茂原市山崎横穴群』、千葉県文化財センター、1982)。小横穴といわれる、小規模の横穴を含め、全体で46基の調査であった。各横穴について、それまでの諸研究をふまえ、平面形態、天井形態、棺床数、棺床の位置をそれぞれ分類しているが、編年観の提示はされていない。年代的には、7世紀～8・9世紀に至る時期をあてており、これまでの7世紀後半から8世紀初頭という、律令体制の確立と軌を一にするような横穴の終末観を大きく変更する結果となっている。また、8基の小横穴については、今後の類例の増加をまつという、慎重な姿勢をみせているが、今後の検討課題の一つである。

3) 養老川流域における横穴群と大和田横穴群

これまでに市原市内において所在の確認されている横穴群(単独の横穴を含む)は全部で22箇所あるが、養老川流域に大半が集中しており、村田川流域では、ごくわずかである。また、養老川流域においても、本流および各支流において横穴群が形成されている。今回調査した大和田横穴群は、宮原横穴群に次いで南側に位置するものである。実際に本格的な調査が実施されたものは少ないが、分布調査等で、規模、構造等明らかにされている部分もあり、ある程度論を進めることはできるようである。ただし、時期についてはどうしても不明と言わざるを得ず、型態論的部分に主眼を置かざるを得ないことについては御容赦願いたい。

個別の横穴の時間軸上の位置づけについては、棺床数の変化で捉えられる傾向にあるのは既に述べたところである。しかし、大和田横穴群においては、棺床あるいは棺台の設けられたものではなく、これまでの横穴変遷の軸上に乗せるのは困難な状況にあるのは明白である。ここにこれまでの変遷観の有効性に対する一つの疑問を呈することができる。このことに関して言えば、西国吉、馬立浅間山、岩の各横穴群についても、確かに棺床数に相違は見られるものの、

玄室型態では、西上総で見られるような型態以外の型態を採用しているのが見られる。西国吉・浅間山では、玄室がバチ状に開くものが存在し、岩では報告者も指摘しているように利根川流域通有の型態を持つものが1基とは言え存在している。このような類例を例外として片付けてしまっただけでは、歴史の復原が不十分なまま終わってしまうことになるであろう。これまでの横穴研究にあたっては、典型的な類例の抽出に主眼がおかれ、一見単系的な序列が行われてきた感がある。たしかに、数百を越すような横穴群を扱うには、例外的な存在を捨象するのは仕方のない部分もあるかもしれないが、例外的な存在をいかに取り込んでいくかが今後の課題の一つと言える。

以上のような問題点を描いて見るならば、ある程度実態が明らかになっている横穴群では、棺床、棺台数の相違は確かに認められるところであり、その点では一般的な傾向を有しているとも言える。その中で、棺床、棺台を欠く大和田の横穴群の特殊性がさらに浮き上がってくるわけである。無棺床、無棺台の横穴の出現を、鉄釘を使用した木棺の採用という視点で捉える立場もあるが、それらの場合、このような横穴の出現は横穴の変遷の終末期に近い方に位置づけられている。しかし、大和田の各横穴が全て終末期にかけての非常な短期間に集中して作られたとするような考え方も無理があると言え、横穴の造られた当初から終末まで連綿と棺床・棺台をもたないままであったと考えざるを得ない。それが、被葬者の複数化という状況が存在しなかったからか、逆に複数化はあったものの型態上の相違として現れて来なかったのかは、いずれとも断定するだけの根拠を欠いている。ただ、棺床、棺台を欠如している事とあるいは裏腹の関係にあるのかもしれないが、規模の小さい横穴がすぐ脇に存在していることも見逃せない事実であって、推測を重ねるならば、他の横穴においては玄室内に葬られたであろう被葬者が(棺床・棺台数の変化として現れる)、ここでは、同一室内に埋葬されず、小規模ながら別個の横穴に埋葬されたとも考えられなくもない。これを有力者層の排他性の現れと見るか、下層者層の独立性の現れと見るかは、議論の分かれるところであろうが、多様な可能性も考えておく必要があろう。

4) 横穴をとりまく諸問題

養老川流域に分布する諸横穴群の中で、現時点で棺床・棺台を欠如しているのは大和田横穴群のみであって、そのかわりに、小規模な横穴が隣接したのではないかという仮説を提示した。横穴は、それだけで理解できるものではなく、歴史的な産物である以上、何らかの歴史的諸条件のうちに、生成、発展、消滅するものである。集落の動向、古墳群の展開等、併せて視野に入れておかなければならない。大和田横穴群においては、台地上に古墳群が展開し、同一地点に横穴群が展開している。同一箇所への執着が認められる以上、それぞれの造墓主体が全く無

関係とはいいい難い。ならば一体どのような関係かという、これは難しい問題である。さらに古墳における副葬品が皆無といえる状況に比して、横穴においては、様々な副葬品が出土している状況にある。円墳の時期は残念ながら不明であるが、おそらくは、時期を隔てる物ではないかと思われる。労働力の集中は行ない得ても文物の流入が不充分であった時期の所産ではないだろうか。具体的な論拠は欠くが、古墳との相違も射程に入れ、当地域における古墳の展開の中で位置づけていくべき問題であろう。

一方、近年類例を増加している遺構に、いわゆる方形周溝遺構がある。これには、主体部として地下式埴を伴う例もわずかながら存在する。その形状については、横穴墓との類似性が指摘されているところでもある。地下式埴を伴う方形周溝遺構を、横穴と方形周溝遺構との融合の結果出現するものであるとするならば、その出現の背景をいかに理解するかという新たな課題が設定される。今後の墓制研究の進展をまちたい。

また、墓制の変化は、集落の動態を無視して考えることはできない。大和田遺跡に関して言えば、かつて調査された番後台遺跡との関連性も考えなければならないところであるが、時期的に一致する部分が少ない。別の集落を営むべく移動しているのかもしれない。新たな調査の成果に期待するところである。

5) おわりに

以上、かなり空論を書き連ねてきたが、大和田横穴群の特殊性については異論のないところではないかと思う。また、横穴形態変化の単系的な把握の限界も示し得たのではないかと思う。今後の検討に委ねた部分が多いが、多少なりとも横穴研究の一助になれば幸いである。

なお、本章の執筆にあたっては、千葉県文化財センター 渡辺政治より多大な資料の提供を受けた。記して、謝意を表しておきたい。

2. 大和田窯の提起する問題点

今回調査した、須恵器窯は、県内で調査された須恵器窯の中では最古に位置づけられる。しかし、その焼成技術は、完成されたものとは見做し難い。また、同窯で焼成されたと考えられる製品が、集落でどの程度使用されたかは現時点では不明である。そもそも、このような焼成技術の下に生産された製品が広汎に流通したとも考え難い。同時に、短期間で操業を終了しているとも考えられる。

築窯の目的については、古墳群、横穴群と同一地点で操業されているところから、この地に墓を築いた集団とは全く無関係とも考え難いが、その製品は横穴に副葬されていないどころかおそらく他の窯の製品と思われる須恵器で占められている。推測をまじえて論をすすめるなら

ば、本来は横穴への副葬を目的として築窯したものの、その意図とはかけ離れた製品しか生産できず、結局は、他所の製品でまかなわざるを得ない事態に至ったのではないか。ただし「他所」を東海地方と限定する必要はないように思われる。この点については確証はないが、かつて酒井清治氏により指摘されたような点、また、村田流域でのかなり古い段階に遡る須恵器生産の可能性も含めて考えると、今後、古墳時代の須恵器窯が発見される可能性は大きいと言えよう。

なお、隣接する、永田・不入窯との関係であるが、年代的には連続性は認められない。しかし、一旦、古墳時代の須恵器生産が断絶したのち、再び近接する箇所では須恵器生産が開始される例は、この大和田、永田・不入のみに見られる現象ではなく、単期間で操業は終了しているものの、後に須恵器生産が展開するための素地が作られたと見ておくこともできる。ただし、集落の動態、古墳群の展開等、在地の社会的背景と切り離して考えることはできない問題であって、歴史の全体的な流れの中で窯業生産を捉えていかなければならない。一方で、須恵器生産の展開の諸類型を認定しておく作業も必要となってくるであろう。

最後にもう一つ問題提起をしておきたい。九州北部の福岡あるいは佐賀地方では、「赤焼き土器」という名称で呼ばれている一群の土器がある。実物を実現したことはないが、その内容は、やや包括的で、橋口達也氏はそれらを4つの類型に分けている。そのうちの一つに、「須恵器の器形・技法で酸化炎焼成したもの」があり、それが福岡県・野間窯跡群から出土している。直接それを大和田窯を結びつけて考えるのは無理であろうが、九州と千葉という、いわば先進地から遠く離れた場所で同様な遺物が出土しているのは興味深いところである。また、窯業生産の実態の複雑さの一端ものぞかせている。さらに土師器、須恵器という概念規定に対する再検討も今後必要となってくるのではないだろうか。



大和田遺跡周辺の航空写真 1 : 13,000



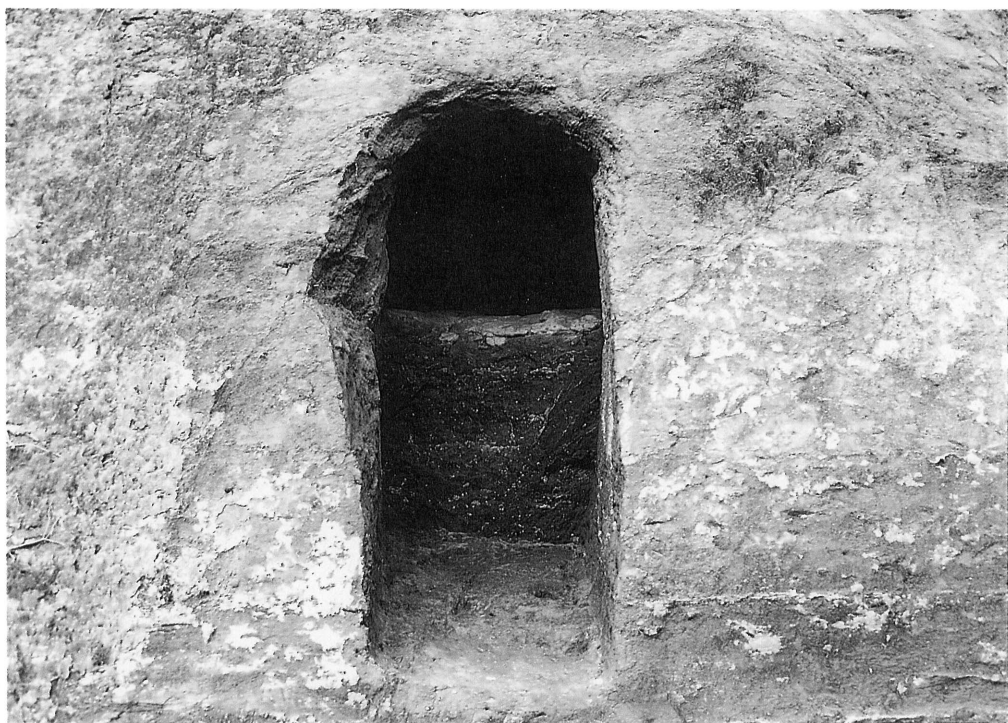
1. 大和田遺跡遠景



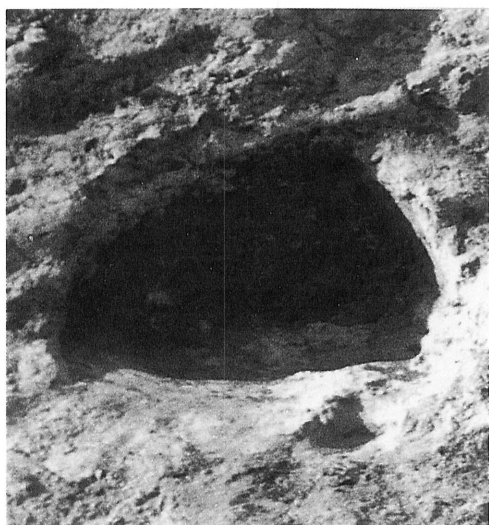
2. 大和田遺跡全景



1. 40号横穴玄室



2. 4号横穴全景



1. 5号横穴



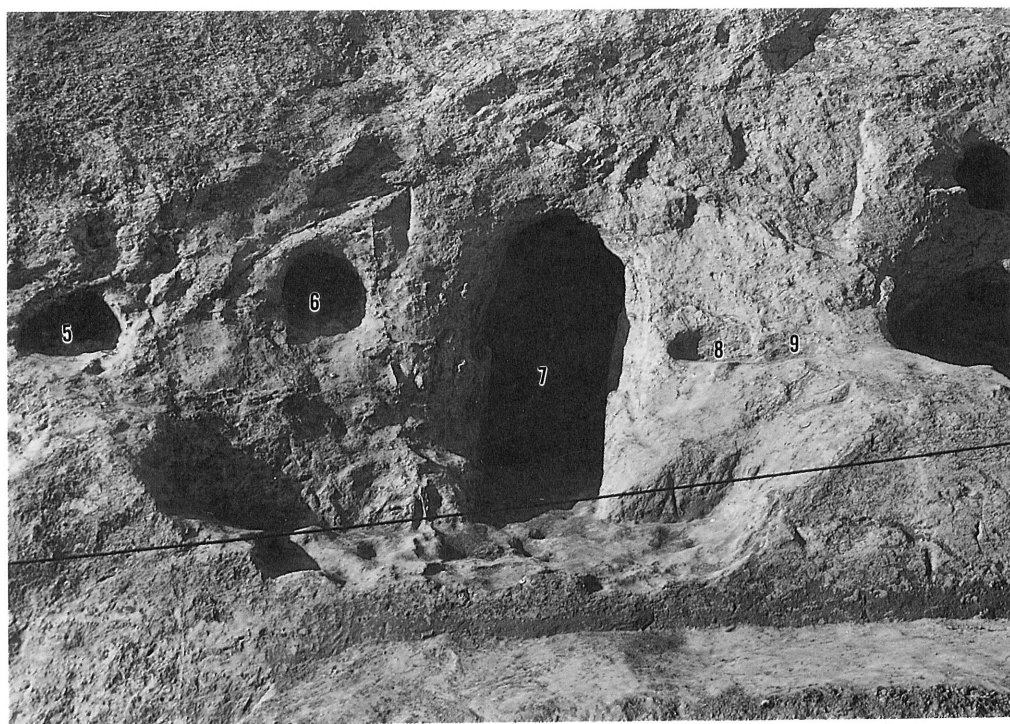
2. 6号横穴



3. 7号横穴



1. 7号横穴羨道部遺物出土状況



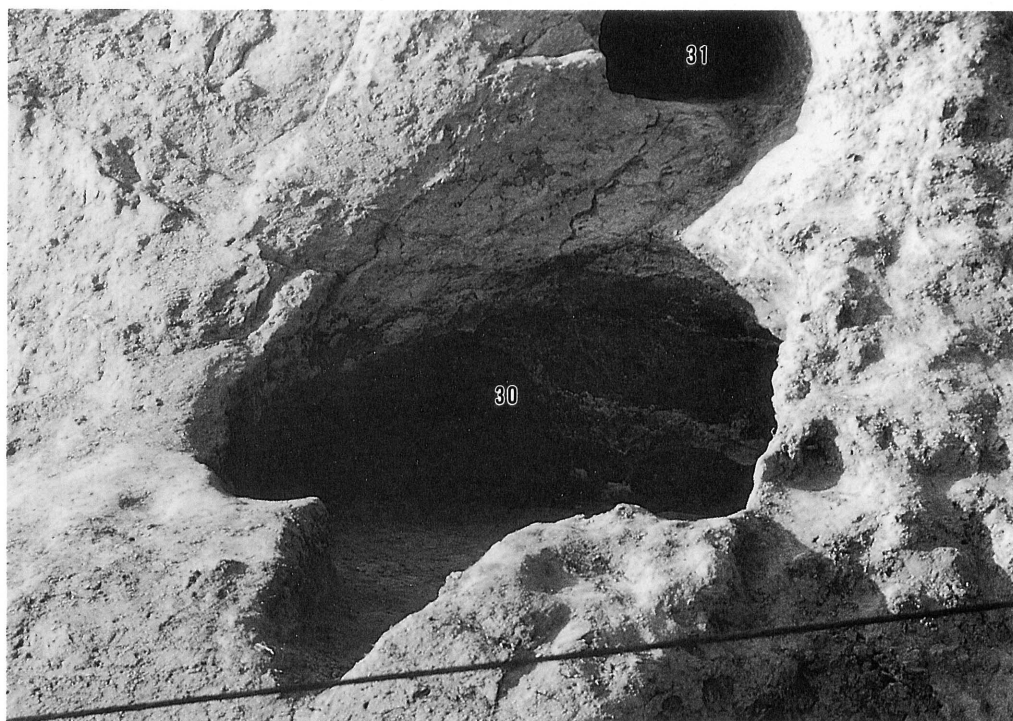
2. 7号横穴及び周辺の横穴



1. 7号横穴内部



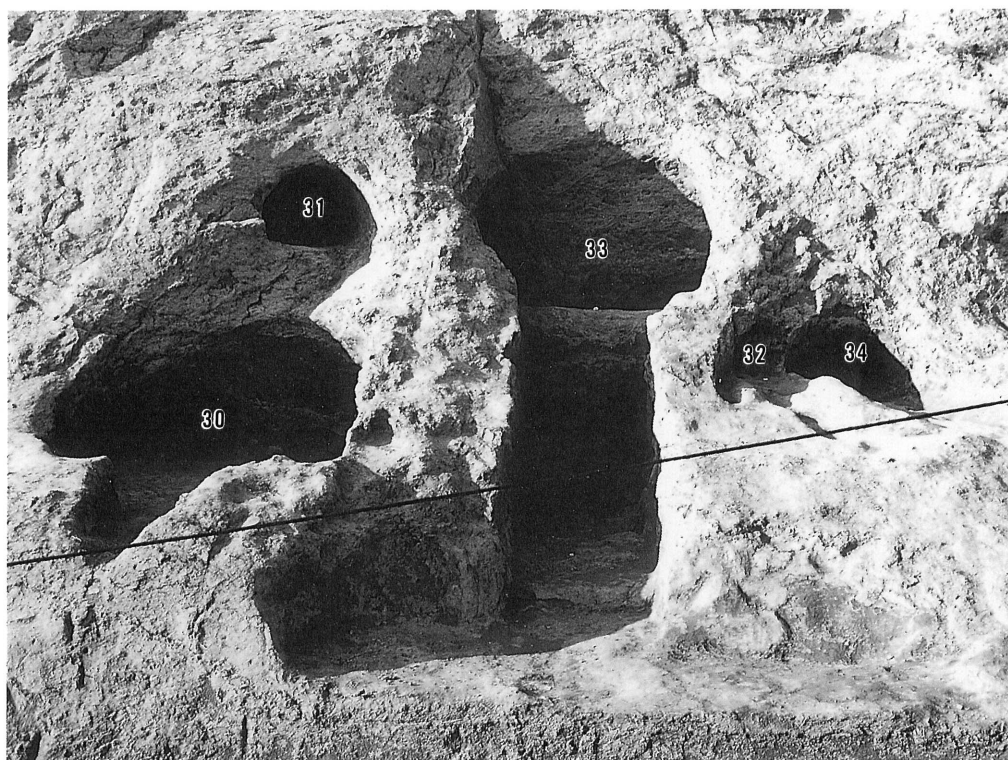
2. 8・9号横穴



1. 30号横穴（上方は31号横穴）



2. 30号横穴玄室内遺物出土状況



1. 33号横穴及び周辺の横穴



2. 33号横穴玄室



1. 33号横穴遺物出土状況



2. 33号横穴隔壁前遺物出土状況



1. 32・34号横穴



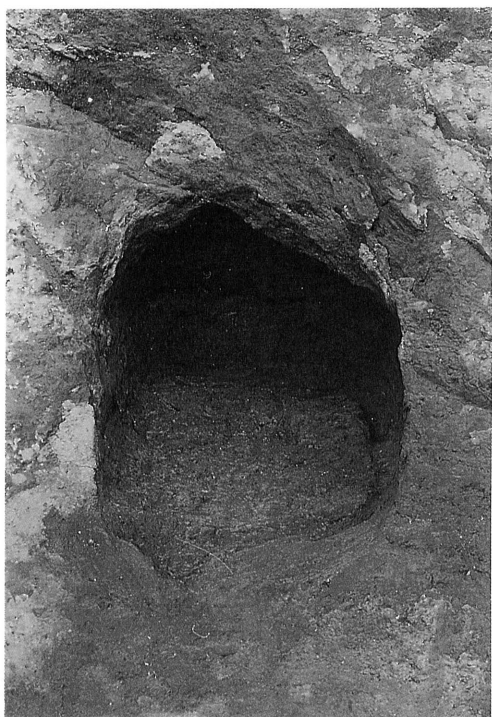
2. 35号横穴及び周辺の横穴



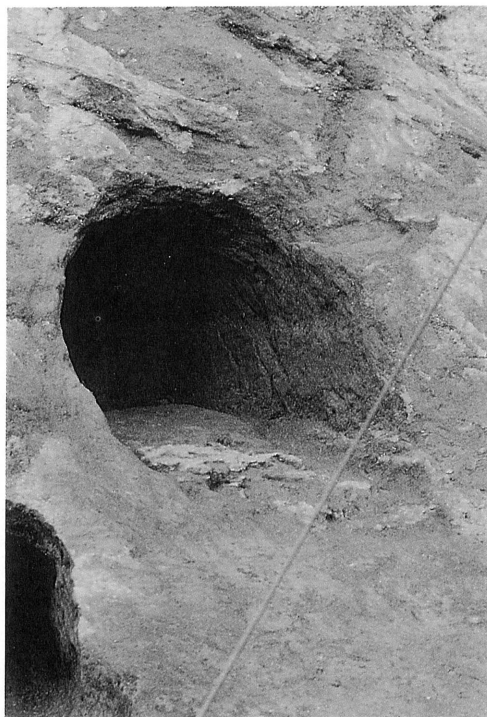
1. 35号横穴内部



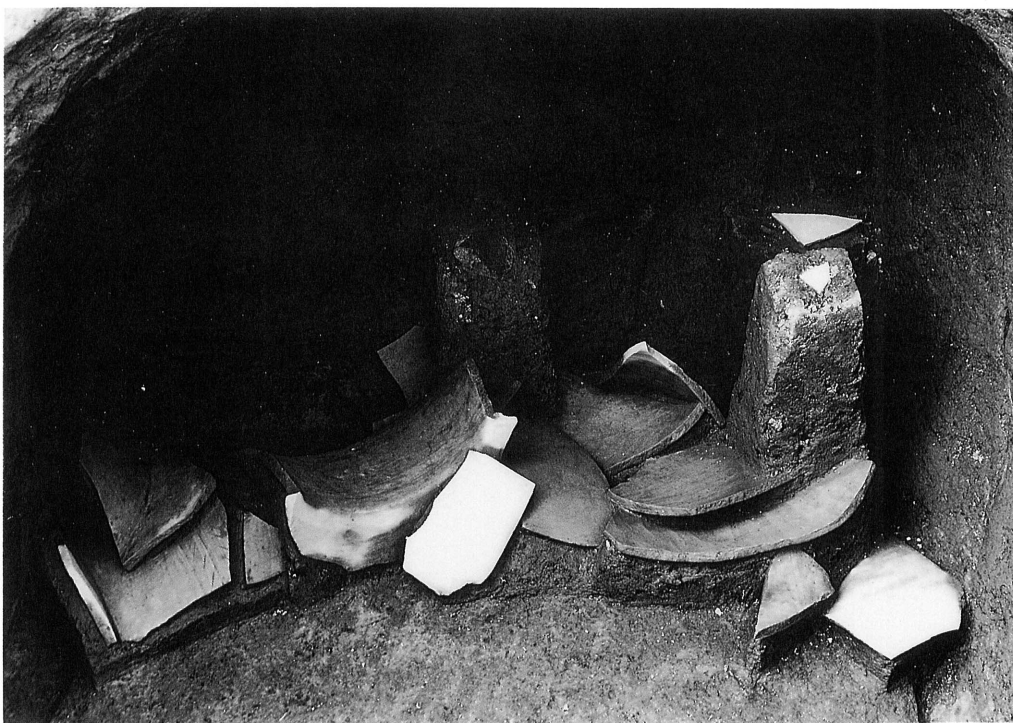
2. 39号横穴



1. 36号横穴



2. 37号横穴



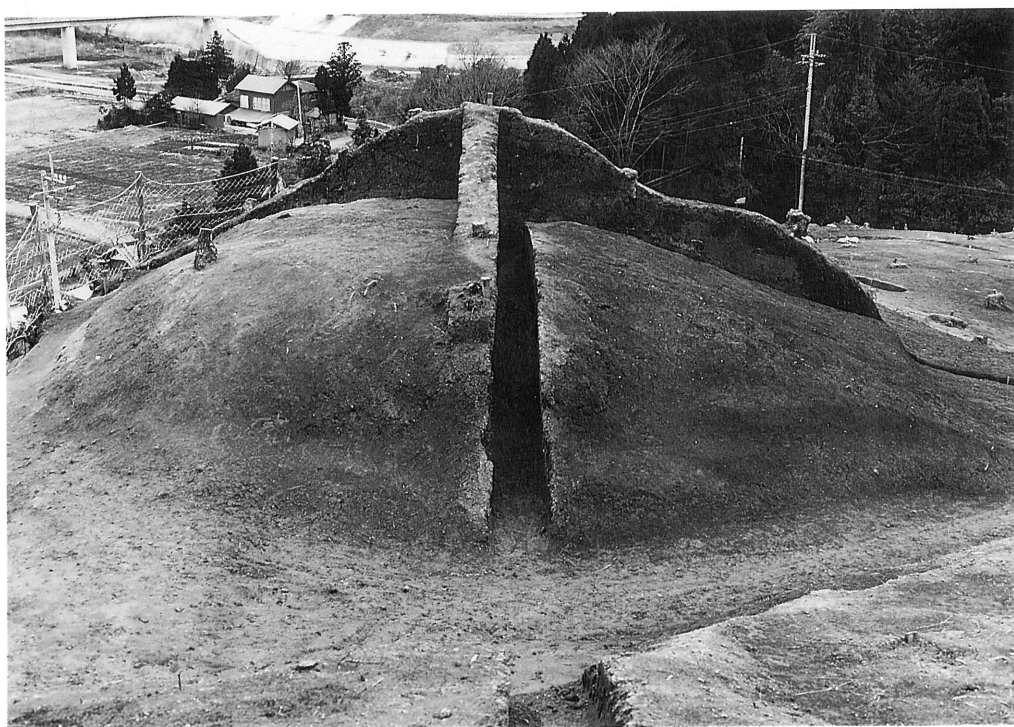
3. 37号横穴大甕出土状况



1. 1号墳全景（東から）



2. 1号墳表土除去後全景（東から）



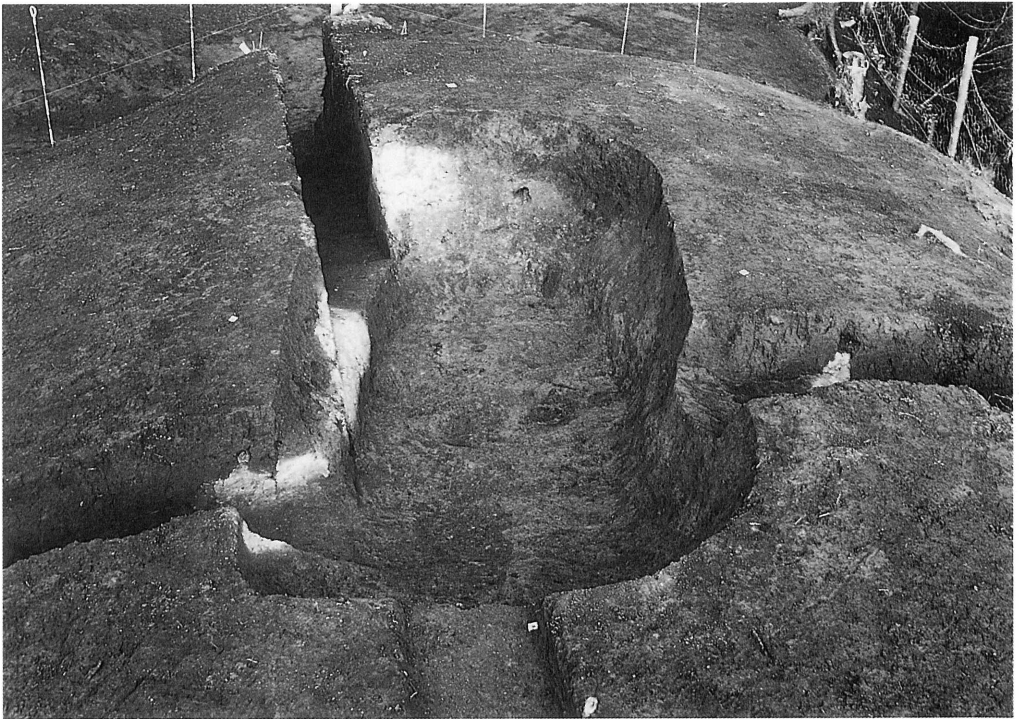
1. 1号墳盛土状況（東から）



2. 1号墳盛土除去後（西から）



1. 1号墳主体部土層



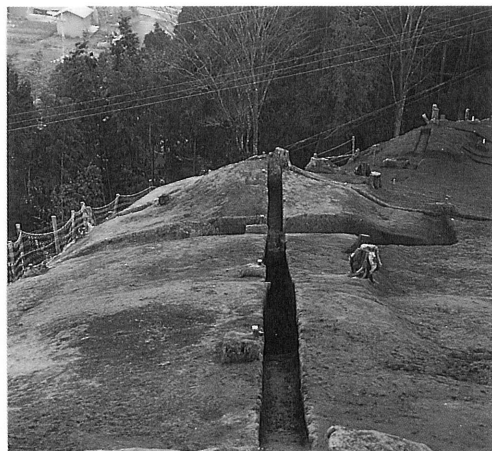
2. 1号墳主体部完掘状況



1. 2号墳全景（北から）



2. 2号墳表土除去後（北から）



3. 2号墳表土除去後（東から）



4. 2号墳盛土状況（北から）



1. 3号墳全景



2. 3号墳表土除去後



1. 3号墳主体部



2. 3号墳北側遺物出土状況



1. 19号住居跡全景（南から）



2. 13号土壙全景



1. 12号窯跡内遺物出土状況



2. 12号窯跡排水溝遺物出土状況



1. 12号窯跡煙道及び天井部残存状況



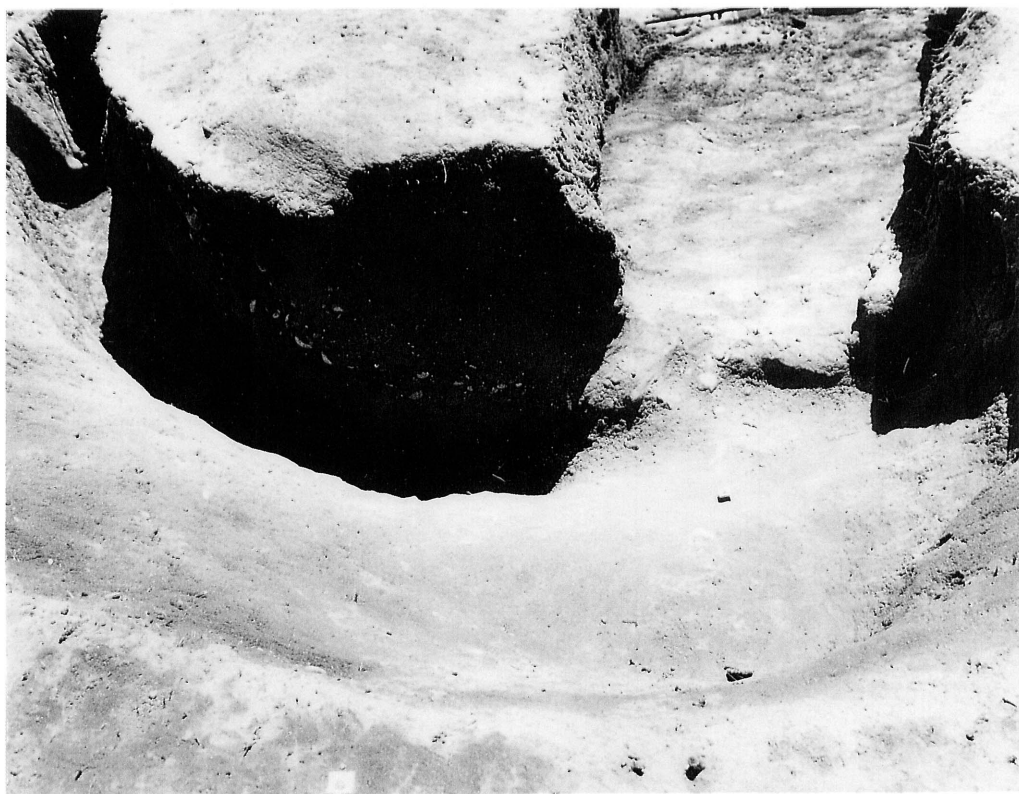
2. 12号窯跡排水溝遺物出土状況



3. 12号窯跡焼台出土状況



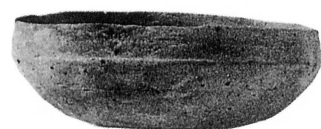
1. 12号窯跡掘り上がり状況(1)



2. 12号窯跡掘り上がり状況(2)

38号前庭部 1 (28－3) 2 (28－1)		33号横穴 4 (24－2) 5 (24－1)	40号横穴 6 (4－1)
32号横穴 3 (20－1)		4号横穴	
7号横穴 7 (12－1) 8 (12－1)			
35号横穴 9 (27－2)			

図版23 (カッコ内は挿図番号)



1



4



6



2



5



3



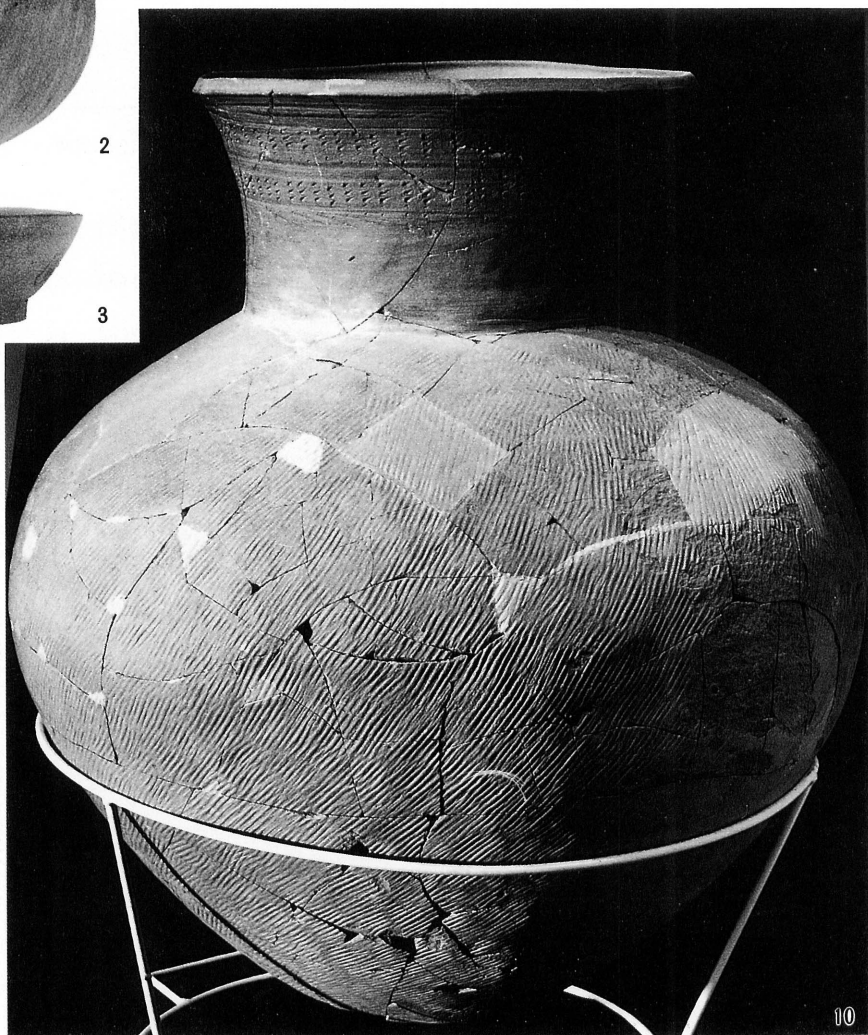
7



8



9

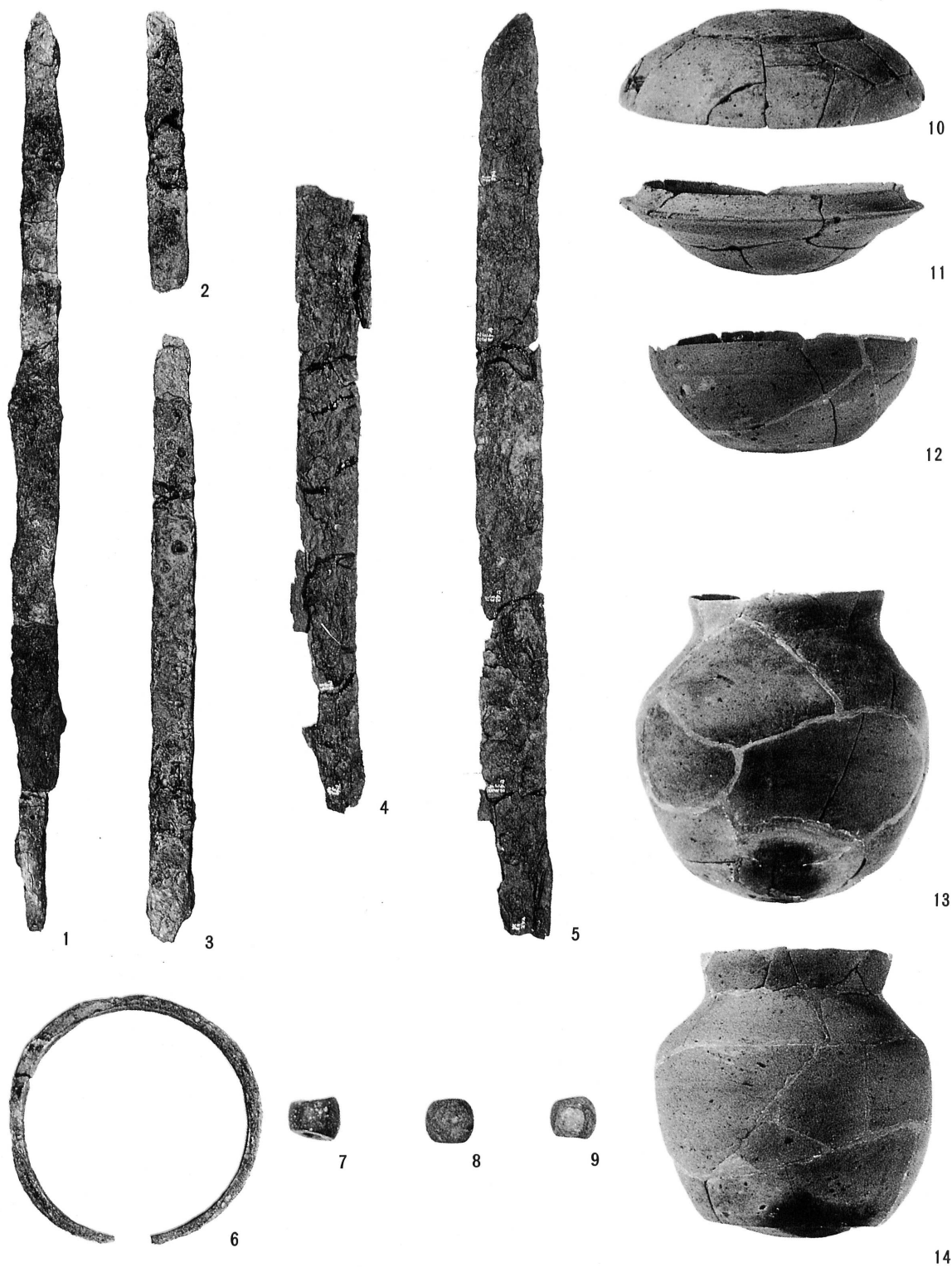


10

横穴群出土遺物(縮尺不同)

30号横穴 1 2 (18-1) (18-2) 3 (18-3)	33号横穴 4 5 (22-2) (22-1)	12号窯跡 10(33-1) 11(33-2) 12(33-4) 13(33-5) 14(33-6)
35号横穴 6 7 8 9 (27-1) (27-3) (27-4) (27-5)		

図版24 (カッコ内は挿図番号)



横穴群出土遺物および窯跡出土遺物(縮尺不同)

—— 千葉県市原市 ——

大和田遺跡

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社
千葉県市原市五井5510の1
T E L 0436(22)4348